

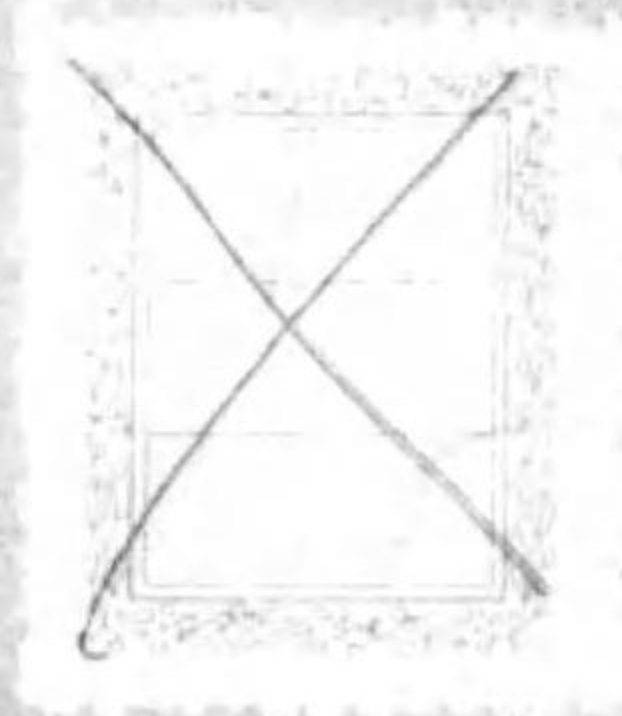
始

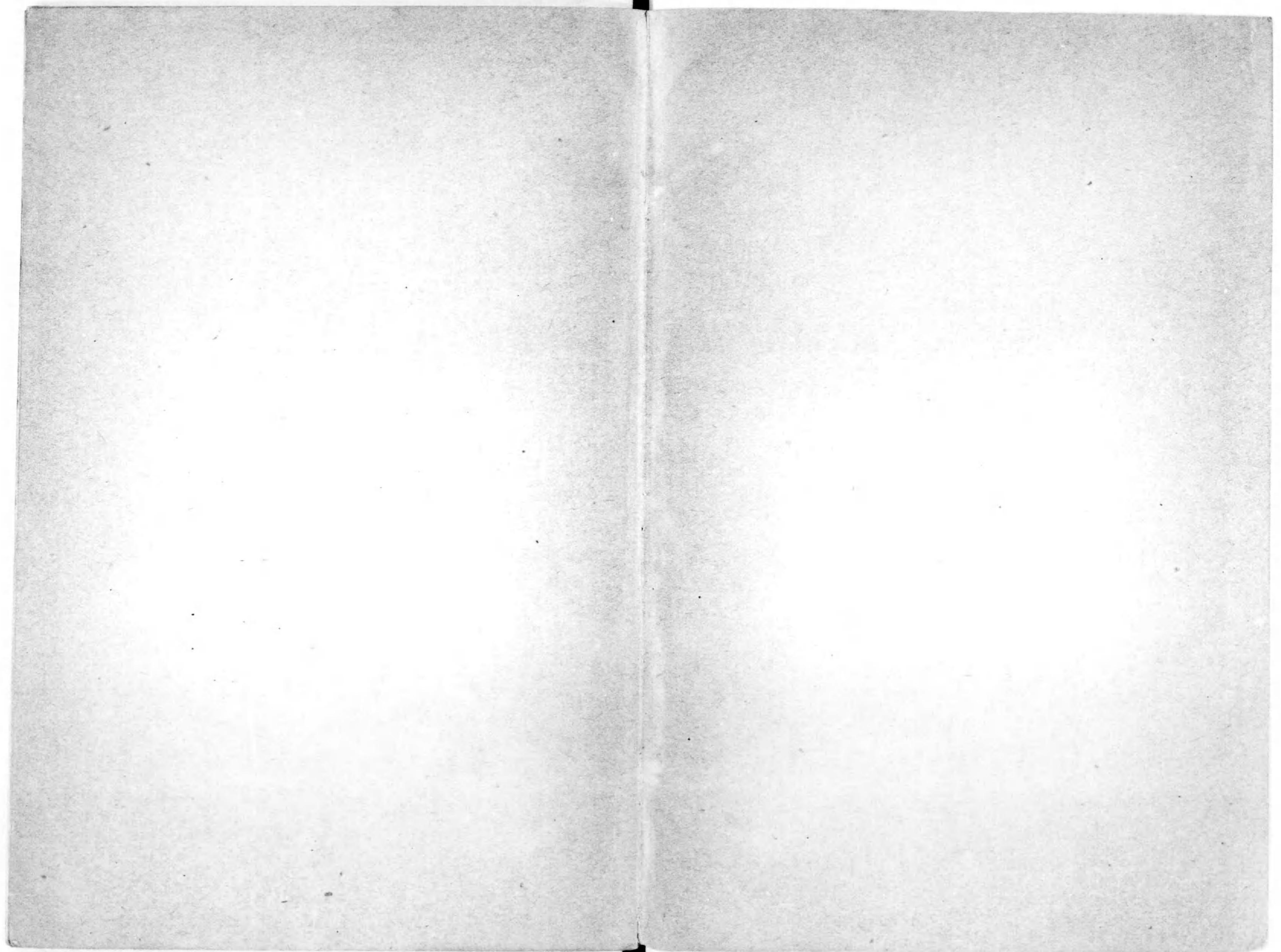


る 來 は 穌 耶

JESUS IS COMING

W. E. B.





特106  
464



# 耶穌は來る

『なんぢらエホバの書をつまびらかにたづねて讀べし』(賽三十四〇十六)

米國 ダブルユー、エー、ブラックストーン氏著  
日本 中田重治氏譯

大正  
6. 12. 17  
内交

推 薦 辭

ブラックストーン氏の著なる『耶穌は來る』は耶穌基督の來臨をして予にとりて活躍の事柄とならしめたる最初の本である。予は主の再臨が千年期前にあるものなる事に疾に知つて居つた事で、其はデンマルクの神學者マルテンセンの著書を見て其結論に達したが、本書を閱讀するまでは其は單に神學上の思想に過ぎなかつた。この事が予の明白なる信念となるに至つたのは此本の爲で、たゞ此教理を明確にせしめたのみならず、最も貴きものせしめたものである。此本は予の生涯に教授にとりて非常なる感化を與へたるものゝ一である。されば予は常に此問題につき研究せんとする人々に本書を推薦する者である。願くは本書は予に於るが如く多の人々にも恵まらんことを。

シカゴムーデー聖書學院名譽校長また逡迴傳道者

神學博士 アル、エー、トローレー氏

數年前予はブラックストーン氏の『耶穌は來る』なる小本を手にした事がある。其

以前には予は聖書の研究を餘り精密に爲なかつたものである。恥かしいけれども予は聖書を讀む事と救靈の事には餘り興味を有なかつた事を告白するものである。此本は予の考を全く一變し、基督につける新しい思想を興へ、また主の爲に働く事について新しい理解を興へたるものである。されば予は最も熱心に各所の教役者に本書を推薦するものである。

巡迴傳道者 シエー、ウイレルバー、チャプマン氏

### 第三補訂の序文

我等は此本を『我等の主の顯著を慕ふ』人々の用に供する。此本をば簡單なるものとなし、此眞理を學ぶ爲に此本から引照し易いやうにし、他の人にも知らしむるに便利なる本になさんとするのは我等の希望である。

本書は神の恵によりて幾版も出版し、今や二十五の語にて書るゝやうになつた事を難有く思ふ。我等は議論したくない、たい此問題について聖書を土臺とする我等の確信を證し、かつ『我儕が受し所と同じ貴き信仰の道』を得んとする正直なる求道者を助けんと欲ふのみである。永い間熱心にまた祈つて研究して見ると基督の來るは千年期前なりとの信仰をいよく固むるものである。此要點をば出來るならば初代信者の有たやうな熱心を以て高調したいものである。彼等は耶穌を俟望むべき事を繰返し我等に教へて居る。腓三〇二十、多二〇十三、來九〇二八、彼後三〇十四。

我等は主が歸る事に就て起り來る出來事の順序に關しては獨斷的でありたくない。若し或人々が我等の研究の結果として言出したる事と異なりたる意見を有して居るとしても、主の再臨は千年期前であり、また其時は定つて居らぬけれども切迫して居る









十、福音は全世界に傳はつて居らぬ	一七八
何處にも證せられてから	一七九
神のみが知つて居らるゝ	一八一
十一、「此に立つものの中」(太十六〇二八)	一八二
靈的再臨と模型的再臨	一八六
彼等の中或者は神の國を見た	一八八
マテロも見た	同
ヨハネもパウロも見た	一九〇
「爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さるる間」(太十〇二三)	一九二
十二、未來につける心細き思想	一九三
時悪ければなり	一九七
教會と世をば同視されない	一九八
文藝と科學の勝利は信仰が増加したと論證する事が出来ない	二〇〇
此世は漸々真くなつて居らない	二〇三
文明の進歩は清潔の源とならない	二〇五
教會は進歩して居るか	二〇七
世の光と鹽	二〇八
鹽其味を失ふこと	同
太十三章の譬	二〇九
忠實なる遣れる者	二一四
十三、大多數の未信者に對して慘酷なりとの説	二一八

此世は三十三年毎に死す	同
十四、イスラエル——「此世は逝ざるべし」	二二二
第十五章 イスラエルの恢復	二二四
第二回の恢復	二三四
永久の恢復	二三六
萬國民はイスラエルにリ就ん	二三七
彼等は「我を仰ぎ視」るべし	二三八
イスラエルの潔め	二三九
イスラエルと教會とを混同する事	二四〇
ヤコブの患難の日	二四四
第十六章 預言の研究	二四九
詭辯家と懷疑論者に對する最良の武器	二五二
第十七章 實行的教理	二五三
第十八章 出來事の順序の概畧	二五七—二七八
重なる聖句の引照	二七七
第十九章 誼か 慰か	二八四
耶穌基督は肉を以て來り給ふ事	二八六

最も心地よき慰藉	二八八
第二十章 時	二九六
第二十一章 アイオンス(世々)の計畫	三〇〇
終極の時	三〇四
圖解	三二八
第二十二章 基督が速に來る表徴	三二九
一、旅行と知識の繁昌	三二九
二、危険なる時	三三二
三、幽靈 教	三三四
四、背 教	三三五
五、全世界の教化	三三七
六、富 人	三三九
七、イスラエル	三四〇
八、シオン主義	三四二
目醒めよ	三五二
我證人となるべし	三五三
聖句引照見出し	三五六

# 耶 穌 は 來 る

米國 ダブルユー・イー・ブラックストーン著  
日本中 田 重 治 譯

## 第一章 耶穌は再び來る

讀者諸君よ、諸君は耶穌が再び來りつゝあるを御存知であるか。主は『我また來るべし』(約十四)と申された。主の聖言は限なく保つものである。そは主自身は眞理であるからである。

天 使等もまた耶穌は昇天の時と同じ貌にて再び來ると申された。彼等が主の第一降臨を告たる時は其言の如くなつた。また路二〇八―十八を見られよ。

聖靈も亦使徒等の口に由て主の再臨し給ふ事を屢々述べられた。斯く權威を以て述べられたる此事件が我等に取て大切なるものではないか。

主が初めて來り給ふた時は世人より擯斥せられ、輕蔑せられたるナザレ人であつた。しかし再臨し給ふ時は『福ある所の獨一の權威ある者諸の王の王、諸の主の主』として現れ給ふのである。

主は其榮光の位に坐し、諸の信者に由て讚を受け、公平と正義とを以て諸國民を支配せんが爲に來りつゝある。  
嗚呼麗しき狀なる王を拜するは如何に光榮なる事であるだらうか。

⑨(彼前二〇二五)然主の道は窮なく存なり爾曹に宣傳する福音は乃ちこの道なり。

⑩(約十四〇六)イエス彼に曰けるは我は途なり眞なり生命なり人も我に由れば父の所に往こ能す。

⑪(徒一〇十一)曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや爾曹を離て天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん。

⑫(路二〇二六―二八)此六ヶ月に當りガリラヤのナザレと名たる邑のダビデの家のヨセフと云る人の聘定せし所の處女に神よりガブリエルといふ天使を遣されたり其處女の名はマリヤと云り。天使この處女に來りいひけるは慶し惠る者よ主なんぢに在す。爾は女の中に福なる者なり。

(路二〇三十一―三三)天使いひけるはマリヤよ懼る勿れ。爾は神より惠を得たり。爾孕て男子を生ん其名をイエスと名べし。かれ大なる者と爲て至上者の子と稱られん又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予れば。ヤコブの家を窮なく支配すべく且その國終ること有ざるべし。

⑬(撒前四〇十六)それ主號令と使長の聲と神の籤を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり。

(來九〇二八)如此キリストも多の人の罪を贖んが爲に一たび犠牲とせらる彼は復罪を贖こなく己の望む者に再び顯現て救を施すべし。

⑭(十〇三七)今片時ありて來る者きたらん必ず遲らじ。

⑮(提前六〇三十一―三十五)われ萬物をして生を存しむる神およびボンテオピラトに向て善證を作給へるキリストイエスの前にて爾に命す。なんぢ我儕の主イエスキリストの現るる時まで玷なく責へき所なくして誠を守るべし。神その定め給へる期いたれば彼を顯さん。神は即ち福ある所の獨一の權威ある者諸の王の王もろくの主の主。

⑯(太二五〇三二)人の子おのれの榮光をもて諸の聖使を率來る時はその榮光の位に坐し。

⑰(撒後一〇十)其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸て信者に由て讚を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。

⑱(詩二〇九)汝くるがれの杖をもて彼等をうちやぶり陶工のうつはものごとくに打碎かんぞ。

(賽九〇六、七)ひさりの嬰兒われらのために生れたり、我儕はひさりの子をあたへられたり、政事はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神、ごころへのち、平和の君さなへられん。その政事ご平和ごましくはりて窮りなし、且ダビデの位にすわりてその國をささめ、今よりのちごころしへに公平正義をもてこれを立てこれを保ちたまはん、萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし。

(歌二〇二五―二七)只なんぢら有さるの者を我いたる時まで固く保つべし。勝を得て終に至るまで我を命ぜし事を守る者には我諸邦の民を治むる權威を賜へん。彼は鐵の杖をもて諸邦の民を牧り彼等を陶瓦の器の如く碎かん、我わが父より受たる權威の如し。

⑳(賽三十三〇十七)なんぢの日はうるはしき狀なる王を見さほくひろき國をみるべし。

茲に基督信者ならざる人があつて

予はかゝる事には一向無頼着である

と申されんか。然らば我等はかの十字架に懸り給ひし救主をば救の唯一の望として其人に示すものである。

我等は諸君が路を迷ひて滅ざらんが爲に子に吻せられんことを諸君に勧むる者である。彼に信賴するものは福である。諸君は若し全世界を得ることも其靈魂を失はざるの益にもならぬではないか。耶穌は來りつゝある。其日其時は何時だか分らない。若し今來り給はゞ如何だらう。諸君は恐れず其聖前に出られるだらうか。教會が携へ擧られ空中に於て基督と偕に居るのに、諸君のみは全世界に起るべき恐しき患難に遭ふべく後に殘され、かくて主が顯現する時に嘆き哀み、山と岡とに向ひ主の顔を避んが爲に自分等を覆ひ隠せよと叫び求むやうになりはせぬだらうか。

『爾の神に會ふ準備をせよ』(歴四〇)とはイスラエル人に對する嚴しき命令であつた。我等はユダヤ人又は異邦人たるを問はず各自惠の座か或は審判の座に於て神に見えなければならぬ。

⑫(詩二〇)十二子にくちつけせよ、おそらくはかれ怒をはなち、なんぢら途にほるびん、その忿怒はすみや

かに燃べければなり、すべてかれに依賴するものは福なり。

⑬(太十六)二六、二七もし人全世界を得ても其生命を失はゞ何の益あらん乎また人なを以て其生命に易んや。それ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん其時あのかの行に由て報ゆべし。

⑭(太二十五)十三然ば怠らずして守れ爾曹その日その時を知らざれば也。

⑮(彼後三)十四愛する者よ爾曹すでに之を望み待ば汚なく疵なく主の前に安然に在んことを務め。

⑯(路二十一)三六是故に爾曹徹醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ。

(撒前四)十七後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし斯く我儕いつまでも主と偕に居ん。

⑰(路二十一)廿五、廿六また日月星に異象あるべし地にては諸國の人哀み海と波との滿清に因て顛沛人々危懼つゝ世界に來んとする事を俟懼むべし是天の勢ひ震動すべければ也。

⑱(撒後一)〇七、十患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得んことを以て報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火獄の中にて其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面と其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讃を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。

⑲(太二十四)三十其とき人の子兆天に現る。また地上にある諸族は哭哀み且人の子の權威と大なる榮光をもて天の雲に乘來るを見ん。

⑳(黙六)〇十六山と巖とに曰けるは願くは我儕の上に墜我儕を掩ふて寶座に坐する者の面と羔の怒を避しめよ。

されば基督の使者たる我等は諸君が恩恵の時救の日なるいま神と和かんことを求ふ者である。我等は諸君の罪が抹され、且神に歸して活る眞神に事へその子の天より臨るを待ち(撒前二〇)其來り給ふ時責べき所なきものとなるため罪を悔ひ心を改めんことを冀ふ者である。

然れど諸君は基督者ならば、我等は基督の再臨を以て  
聖き生涯を送る眞の動機

として諸君に告る者である。

耶穌は來りつゝある。されば諸君は彼と偕に榮光の中に顯はれんことを願はゞ地に  
ある諸君の肢體を殺すべきである。

諸君は神に肖かつ神の眞狀を見たくば心の清潔を勉め且祈れよ。諸君は潔められ且諸君の全靈全生全身が我等の主耶穌基督の來らん時咎なき者とならんため聖言を探

哥後六〇二二(一)かれ曰われ慈恵の時に爾に聽また救の日に爾を助たり。今は恩恵の時なり今は救の日なり、(路十四〇三一)また王いでて他の王と戦はん先に先坐して此一人をもて彼二萬人に敵すべきや否を辨ららん乎。もし及ばずば敵なほ遠れる時に使を遣して和睦を求へし。然れば此の如く爾曹その所有を盡く捨ざる者は我弟子と爲こざるを得ず。

哥後五〇二二(二)是故に我儕召れてキリストの使者となり即ち神われらに託なんぢらに勸め給ふが如し。我儕キリストに代て爾曹が神に和んことを爾曹に求ふ。

徒十〇四二、四三(一)つ彼は其生者之死者の審判人に神より定められし事を我儕に證して民に宣ふ命じたり。凡の預言者も凡そ彼を信する者は其名に由て罪の赦を受べしと彼につきて證せり。

徒十七〇三三、三一(一)往者に蒙味の時神これを不問に爲給し今は何處の人にも皆悔改むることを命じ給ふなり。蓋神すでに其立し所の人により義をもて世を鞠べき日を定め此事に就ては彼を死より甦らせて其證を衆の人に予たまへば也。

撒前五〇二三(一)爾曹の心を堅くし我儕の主イエスその諸の聖徒と偕に來らんとき爾曹をして我儕の神なる父の前に潔して責べき所ならしめん事を。

約壹三〇二、三(一)愛する者よ我儕いま神の子たり後いかに未だ露れず。其現れん時には必ず神に肖んことを知れば我儕その眞狀を見なければ也。凡そ神に由る此望を懐く者は其潔が如く自己を潔す。

西三〇四、五(一)我儕の命なるキリストの顯れんとき我儕も之と偕に榮光の中に顯る也。是故に爾曹の地にありる肢體すなはち好淫、汚穢、邪情、惡欲および貪婪を殺すべし。貪婪は即ち偶像を拜すること也。

太五〇八(一)心の清き者は福なり其人は神を見んことを得べければ也。

約壹三〇二、三(二)愛する者よ我儕いま神の子たり後いかに未だ露れず其現れん時には必ず神に肖んことを知れば我儕その眞狀を見なければ也。凡そ神に由る此望を懐く者は其潔が如く自己を潔す。

弗五〇二六(一)かれ己を捨て水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり。

撒前五〇二三(二)願くは平安の神自らなんぢらを全く潔し又なんぢらの全靈全生全身を守りて我儕の主イエスキリストの臨らん時に咎ならしめ給んことを。

れよ。かく申さば諸君は輕蔑して

あゝ其は第二降臨説だ

と言ふに違ない。(譯者註す、此説は基督の來臨の時日を妄に定むるものなり)

愛する諸君よ、諸君はモーセ、ダビデ、イザヤ、エレミヤ、ダニエル、ザカリヤ及び多の豫言者と使徒等はかゝる第二降臨説を信じたる者と思はるゝか。此説の如く再臨の時日を定めたり或は種々の謬説が起つた爲に、此教理が惡名を蒙つたけれども、其が爲に此教理を棄る譯には行かない。

しかし諸君も或熱心なる基督者が次のやうな事を申して我等の心を痛めた如く申さるゝかも知れない。『基督再臨の事は

予に取ては左程重大なるものでない。

これは死ぬる事であると思ふて居るから、死に對して準備さへして居るなれば其で充分であると思ふて居る、かゝる事は解るまで研究するには容易でない、また此教理は實際的のものと思はれない、其よりも第一かゝる事にそんなに注意する事が間違であると思ふ。』

尤である、基督の體につける肢である名乗て居る多の基督者でさへもかく申して

①(申卅三〇二)エホバシナイより來りセイルより彼らにむかひて昇りバランの山より光明を發ちて出で千萬の聖者の中間よりして格りたまへりその右の手には輝やける火ありき。

②(詩百二〇十六)エホバはシオンをきつぎ榮光をもてあらはれたまへり。

③(賽五十九〇二)エホバのたまはく贖者シオンにきたりヤコブのなかの愆をはなるる者につかき。

④(賽六十〇一)起よひかりを發て、なんぢの光きたりエホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり。

⑤(耶二十三〇五、六)エホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き枝を起す日來らん。彼王となりて世を治め榮え公道を公義を世に行ふべし。其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん其名はエホバ我儕の義と稱らるべし。

⑥(但七〇十三)我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子のごとき者雲に乗て來り日の老たる者の許に到りたればすなばちその前に導きけるに。

⑦(亞十四〇四、五)其日にはエルサレムの前に當りて東にあるまことの橄欖山の上に彼の足立ん。而して橄欖山その真中より西東に裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし。汝ら我山の谷に逃いらん、其山の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウツヤの世に地震を避て逃しごまくに逃ん。我神エホバ來りたまはん諸の聖者なんぢもなるべし。

⑧(徒一五〇十五一十七)預言者の言これと符り其書に、此後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を復起し其破壊の跡を再び造て之を建べし。是の餘の民あよび凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言と録されたるが如し。

⑨(哥前十二〇二七)爾曹はキリストの體にして亦あのかゝる其肢なり。

居るのである。彼等は一人の夫に聘定けせられ、彼に獻げらるゝ者であり乍ら、其花嫁を引取るために耶穌は來りつゝあるといふ此貴き眞理を一切棄て居るのである。オー愛する諸君よ、かゝる言を吐て此慰安の眞理を見失ふやうな事をなさるな。何卒筆を以て此に關する聖句に印記をつけて見られよ。しからば

澤山の聖言が其に就て述られてある

事が解るのである。聖靈がかほごまで此事を重んじて居らるゝのであるから我等も注意すべきではないか。聖言にはこれを勧めて居るのである。若も其勸に從はなければ罰せらるゝ危険がある。

何卒實際的教理と題せる(本書十)所に引照せる聖句を吟味して貰ひたい。さすれば耶穌と其使徒等が目醒る事、悔改、忍耐、忠實に事ふる事、兄弟を愛する事などにつき此教理を用ひた事が解り、而して實際的教理としては之に勝るものが無と斷定するであらう。

●(哥後十一〇二)われ神の熱心の如き熱心をもて爾曹を念ふ我なんぢら一人の夫に聘定せり、是なんぢらを潔き女としてキリストに獻入とする也。

●(約十四〇三)もし往て我なんぢらの爲に所を備ば又きたりて爾曹を我に納べし。我なる所に爾曹をも居

しめんとす也。

(弗五〇二三)蓋キリスト教會の首なる如く夫は婦の首なれば也。キリストは身の救主なり。

(弗五〇三二)この奧義は大なり、我いふ所はキリストと教會を指なり。

●(撒前四〇十八)是故に此等の言を以て互に慰むべし。

(哥前一〇七)斯て爾曹は賜れる所の恩寵をくくることなく我儕の主イエスキリストの顯れんことを俟り。

(黙一〇三)この預言の書を讀者と之を聞て其中に記しある所を守る人々は福なり蓋時近ければ也。

●(路十二〇四五、四六)若その僕、心の中に我が主人の來るは遅らんと思ふの僕、婢を扑たき食飲して且酒に酔はじめば、其僕の主人おぼはざるの日しらざるの時に來りて之を斬殺し其報を不信者と同じすべし。

(路二十一〇三四—三六)爾曹みづからを慎よ恐くは飲食に耽り世事に累れ爾曹の心昏迷なりて感よらざる時に此日なんぢらに臨ん。これ機檻の如く遍く地の上に居者に臨むべし。是故に爾曹徹醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ。

(撒前五〇一—七)兄弟よ時と期については我なんぢらに書贈るに及ばず。そは主の日の來ること盜人の夜きたるが如くなることな。爾曹詳細に知れなり。人々平和無事なりと言んとき亡滅忽ち來らん。婦にその働勞の來る如なるべし人々絶て避ることを得じ。然と兄弟よ爾曹幽暗に居ざれば其目盜賊の來る如く爾曹に來ることなし。爾曹みな光の子とも晝の子とも也。われら夜に屬るもの暗に屬る者に非ず。然ば我儕他人の寢るが如く寢ることなせず醒て慎むべし。寢る者は夜ぬむり酒に酔ものは夜ふ也。



聖書中で眞に此教理のやうに肉を十字架に釘け、神の爲に獻身し、我儕の望また喜また誇の冕として靈魂の爲に働くやうにする動機となるものが他にないのである。要するに此教理は『我儕の國籍は天に在われらは救主即ちイエスキリストの其處より來るを待つ彼は萬物を己に服はせうる能に由て我儕が卑き體を化て其榮光の體に象らしむべし』(腓三〇二十、二十一)と云ふのである。また子とならん事即ち我等の身體の救はれんことを渴望すると云ふ事である。

此教理は我等に此世は難破したる船の如きものであると教へ、而して我等をして全力を盡して數人を救ふべく奮起せしむる所のものである。現今の傳道者の多は皆この

③(撒前二〇一九)我儕の望また喜また誇の冕は誰ぞや。我儕の主イエスキリストの臨らん時その前にて爾曹も此ものと爲にあらざる乎。

(但十二〇三)穎悟者は空の光輝のごとくに輝かんまた衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん。

④(羅八〇廿三)たゞ此等のもの耳ならず聖靈の初結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子と成んこと即ち我儕の身體の救れんことを俟。

(路廿二〇廿八)此等の事の成初ん時には起て爾曹の首を翹よ蓋なんぢらの贖ちかづけば也。

⑤(太七〇十三、十四)窄き門より入りよ沈淪に至る路は濶その門は大なり此より入りもの多し。命に至る路は窄

その門は小し其路を得もの少なり。

(撒前五〇三)人々平和無事なりと言んまき亡滅忽ち來らん妊婦にその劬勞の來る如なるべし人々絶て避ることを得じ。

(彼後二〇三一九)かれら貪婪心に由て造言を設け爾曹より利を取んまき彼等の審判は昔より定められ遅りらじ彼等の淪亡は寢す。神さきに罪を犯し、天使を容さず之を地獄に投いれ之を幽穴に置之を禁錮彼等をして審判の時を待しめ給へり。また古世を容さず洪水を以て神を敬はざる世を滅ぼし只義道を傳ふるノアの一家八人を救へり。又ソドムとゴモラの邑を滅さんまき定め之を焚て灰となし後の神を敬はざる者の鑒となし。たゞ義き口ト即ち惡者の淫亂の行を恒に憂へし者を救へり。この義人かれらの中に日々その不法の行を見聞して己の義き心を傷たり。此の如く神を敬ふ者を患難より救ひ不義なる者を審判の日まで守りて之を罰し。

(彼後三〇五一二)彼等は神の言に由て上古天あり地の水より出かつ水に由て立。之に由て古の世水に淹れ滅たる事を知欲せず。それ神は其言を以て今の天と地を蓄へ之を火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する淪亡の日まで存せり。愛する者よ爾曹の一事を知ざる可らず主に於ては一日は千年の如く千年は一日の如し。主その約束し給ひし所を成に遅きは或人の遅しと意ふが如くに非ず一人の亡ぶるをも欲み給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也。然主の日の來ること盜の夜きたるが如ならん其日には天大なる響ありてさき體質ごんく焚毀れ地と其中にある物みな焚盡ん。斯の如く諸のもの鎔されん然爾曹神の日の來るを待これ速やかにせんことを務いかに潔行をなし神を敬ふことを爲べき乎。神の日には天焚毀れ體質焚毀ん。

⑥(哥前九〇二十二)是柔弱者を得ん爲なり。又すべての人には我その凡の人の狀に循へり。是いかにもして彼等數人を救ん爲なり。

教理に勵はげまされて居る。されば其働そのはたらきは眞まことに實際じつさい的である。

ペテロ曰いはく「豫言者の確言かたきことば吾儕われらにあり是言このことばは暗處くらきところに輝とれる燈ともしびの如ごときものなり夜の明あるまで明星みやうせうの爾曹なんがらの心こころの中うちに出いづるまで之これを顧かへみば善よき」(彼後一〇十九)と。またこれらの言ことばを記憶きおくせよと勸すすめて居る。されば我等われらは豫言を學まなぶ時は祈禱いのりつゝ爲なすべき者もので、空論くうろんに陥おるべきでない。

⑤(彼後三〇一、二)愛する者よ我今われいまこの第二の書を爾曹なんがらに筆贈かきおくる、此このふたつのよみも、なんがらしんじつこころはほげま、先に聖預言者の語ことばし言ことばを爾曹なんがらの使徒等しだたらが傳つたへし主なる救主の命令さくひぬしを以もつて爾曹なんがらの眞實まことなる心こころを勵はげまし、

### 第二章 文字通の註釋

多分諸君たぶんしよくんの中に「これらの豫言は靈的れいてきに解かいすべきものでないか、この來るといふのが改心かいしんの際さいに基督きりすとを受うける事ことか或あるひは聖靈せいれいの證あかしの事ことでないか、また主しゆの教會けうかいを支配しはいし給たまふ事ことでないか」云々と申まをさるゝ人ひとあるかも知れない。

否々いな、決して然さうでない。鳥渡考ちよつとかんがへても解わかる。基督きりすとは豫言よげんに循したがひ文字通もじとほりに來きたりし時にユダヤ人よびとは彼かれを拒こぼんだ事ことを非難ひなんしながら、文字通もじとほりに再臨さいりんすることを拒こぼむとは何事なにごとであるか。これは理りに合あふて居ゐない。路一章三十一節を文字通もじとほりに信しんずるなれば其三十一節と三十三節をも文字通もじとほりに信しんずべきである。

(卅一)爾孕なんぢはらみて男子なんしを生うまふ其名そのなをイエスと名なづくべし。  
(卅二)彼大なる者かれおほいを爲なりて至上いどたかきものの子こと稱なはれん又主たる神かみ其先祖そのせんぞダビデ王わうの位くらを彼かれに與あたふれば、  
(卅三)ヤコブの家いへを限りなく支配しはいすべく且かつ其國そのくに終はる事こと有あらざるべし。

この三十一節を文字通もじとほりに解かいし、而そして三十二と三十三を靈的れいてきに解かいするが如ごとき矛盾むじゆんは、或ある基督教きりすとの教師かうしと一人の猶太人ゆだやびととの間に起おりし左ひだりの問答もんたうで明白めいぱくに説明せつめいさるゝのである。

猶太人は新約聖書路加傳一章三十二節を披ひらきかく問とふた、「此こゝに記しるされある事は文字通もじとほりに起おるものと信しんじま

す、主たる神其先祖ダビテ王の位を彼に與ふればヤコブの家を限なく支配すべしとあります。傳道者はかく答へた。『さうは信じません、これは譬喩で基督は教會を心的靈的に支配する事を記したものであります。』そこで猶太人はかく申した。『しからば私はダビテの子が處女より生るゝとある前節をも文字通に信じません、これは預言の題目となつて居る人物が非常に清き事を譬喩的に記載したまでの事であると思ひます。』なほも續いて曰く『足下は三十二節と三十三節を文字通に信する事を拒んで、其よりも遙に信じにくい三十一節を信するとは何事でありませうか。』其時傳道者は左の如く答へた。『其は事實であるからであります。』そこで猶太人は得意然として申すには『嗚呼足下は事實であるから聖書を信じ、私は神の言であるから信するのであります。』と。

愛する讀者諸君よ、この猶太人の議論は公平にしてかつ力ある言ではありませんか。聖書中には模型や綺語や寓言や譬喩などがある。しかし本文或は其前後に其等が解説されてなければ、たゞ文字通に意味をさるのみである。約翰傳七章三十八節にある基督の言は其次の節に於て『彼を信する者の受んとする聖靈』の事であると説明して居る。

加拉太書四章二十四節より三十一節にある比喩は聖書の文字上の意義を害せざるのみならず、却つて之を明確にするものである。我等はハガルもサラも文字通に實在したもので、シナイ山もエルサレムも文字通のものである事を知るものである。我等は新約の仲保者なる基督が文字通に在を知り、上なるエルサレムの模型がサラ

であつて、其天のエルサレム即ち神の所より降る新しきエルサレムは文字通であつて目に見る事が出来る實際のものである事を信する者である。我等は如何して路加傳一

- ①(約七〇三八、三九)我を信する者は聖書に録し如く其腹より活る水川の如に流出べし。如此いへるは彼を信する者の受んとする靈を指するなり。蓋イエス未だ榮を受ざるに因り靈はまだ降さればなり。
- ②(加四〇二四―二六)この言は譬喩にして即ち此婦は二の契約に比ふべし。一はシナイ山より出て子を奴隸に生これ即ちハガルなり。此ハガルはアラビヤのシナイ山今のエルサレムに當るなり。蓋これ其諸子と偕に奴隸なれば也。然ご上に在ごころのエルサレムは自主にして是われらの母なり。
- ③(來十二〇二四)新約の中保なるイエス及び灌ぐ所の血なり此血の言ごころはアベルの血のいふ所よりは尤も愈れり。

- ④(來十二〇二二)然ご爾曹の近ける所はシオンの山また活神の城なる天のエルサレムまた千萬の衆すなはち天使の聚集。
- ⑤(黙三〇十二)勝をうる者わが我神の殿の内の柱みなさん此より再び出ることなし。我また我神の名ご吾神の京城すなはち天より我神の所より降る新しきエルサレムの名もよび我が新しき名を之に書さん。
- ⑥(黙二十一〇二)われ聖城なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出て天より降るを見その状は新婦は新郎を迎へん爲に修飾たるが如し。
- ⑦(黙二十一〇十)われ靈に感じ天使に携へられて大なる高山に至れり。此にて我に大なる城聖エルサレム神の榮を以て神の所を出て天より降るを示す。

章の三十二、三十三節の如き、イスラエルの恢復の如き、基督の再臨の如き、其榮光ある王國の如き其他許多の章句をば千年後再臨説の人々が靈的に解するのに一任して置れやうか。否任して置れない。これらは文字通に解すべきである。もしかの千年後再臨説論者の如くするなれば神の言の權威と能力を打破るものである。夫の千年後再臨論者はかゝる事をするために懷疑論者や自由神學者に侵入さるゝのである。當今イスラエル人の中に改革派または自由派と自ら稱する者があつて、矢張舊約の豫言を精神的に解釋し、文字通に来るメッシヤを待望むことを斷念して居る者がある。近頃其一人が著者に向ひ『十九世紀は即ちメッシヤなり』と語つた。この不合理なる教理が今や彼等の重なる會合で一般に説かれて居る。ユダヤ人でさへも異邦人の如く聖書を靈的に解するやうになつたのは今の時代に於る一の驚くべき徴である。『人の子來らん時(この)信を世に見んや』(路十八)何故なればかゝる明白なる聖句を文字通に解すべきを精神的に解する傾向が遂に凡の基督教々理の基礎を覆へし、また人をして全然不信に陥らしめ或はス井デンボルジアン教の空想に耽らしむるものであるからだ。

若し言語の目的が一定の觀念を顯はすのでなければ何の益にもならない。聖靈は其思想をば正しく表す爲に其用ふる言を選んだに相違ない。或小兒が『若し耶穌様の言

た事が其欲ふ事でなかつたら何故その欲ふ事を言はなかつたでせう』と問ねたごあるが實に其通である。我等は主が言たまふた事が其通であると信じ、其聖言が決して廢ざる事を信する者である。

耶穌曰く『われ律法と豫言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れわれ來りて之を廢るにあらず成就せん爲なり』又曰く『天地の盡さる中に律法の一點一畫も遂げ盡さずして廢ることなし』(太五〇十)

第一降臨の時文字通に成就せられたる豫言

若し基督が來りて、苦難を受けるメッシヤに關する豫言が文字通に成就せしめたならば(賽五十三)彼は復來りて勝利と權威とを以て此世を支配する榮光のメッシヤに關する豫言も成就せしめぬ事がない。(詩二〇、七十二、七〇、六十三)苦難を受けるメッシヤに關する多の豫言を考へて見るなれば其は文字通に成就せられた事が分り、聖言が眞理であり又神託である事の強い證據を握る事が出来る。左の豫言の通である。

處女より生まるゝ事(賽七〇)  
ベツレヘムに生まるゝ事(米五〇)

(太二十四〇三五)天地は廢ん然と我言は廢し。

幼童の虐殺(耶卅一)  
 埃及より呼出さるゝ事(何十一)  
 聖靈を以て膏沃がるゝ事(賽十二)  
 エルサレムに入る事(亞九〇)  
 友の爲に賣さるゝ事(詩四十二、四九、五十)  
 弟子の彼を棄つる事(亞十三)  
 銀貨三十枚に賣さるゝ事(亞十二)  
 製陶師の田園買上げらるゝ事(亞十三)  
 睡され嘲笑さるゝ事(賽五十)  
 酷と膽の事(詩六十九)  
 手足共に釘刺さるゝ事(詩二十二)  
 衣服を分つ事及鬪引する事(詩二十)  
 骨の一だに破壊されざる事(出十二、四十六)  
 貧困と苦痛と忍耐と死去の事(賽五〇)  
 此他之に關する章句が澤山ある。

是等の豫言は皆既に基督の降臨の時に其文字通り應じたるものである。然らば基督の再臨と地上に於ける其榮光の支配を記載せる許多の豫言を以て文字通り成就せるものでないを爲てはいけない。即ち、

再臨の時文字通りに成就せらるべき豫言

基督は自ら來臨し給はん事(撒前四)  
 彼は號令し給はん事(撒前四)  
 死者は彼の聲を聞かん事(約五〇)  
 復活しまたは榮化したる信徒は主に遇はん爲め空中に携へ擧られん事(撒前四)  
 彼は信徒を受納れ給はん事(約十四)  
 彼は目を醒し居る僕に給仕し給はん事(路十二)  
 彼は地上に再臨し給はん事(徒一〇) 其昇天し給ひし橄欖山へ來る事(亞十四) 焔火の中に(撒後一) 權威と大なる榮光を以て天雲の中に(太二十四、四十三) 又地上に立たん事(伯十九、廿五)  
 主の聖徒(教會)は主と共に降來すべき事(申卅三、二、撒前)  
 衆の目耶穌を見る事(黙一)

彼は偽基督を滅ぼすべき事(撒後二)

彼は其位に坐すべき事(太二十五〇卅一)

各國民皆彼の前に召集せられ而して彼之を審判せん事(太三十二)

彼はダビデの位を襲ぎ給ふべき事(路一〇卅二、結廿一〇廿)

是正に地上に於てあらん事(耶二十三)

彼は一王國を得て(但七〇十四)其聖徒と共に之を支配すべき事(但七〇十八、二二)

諸王諸民盡く彼に服事すべき事(詩七十二〇十一、賽四十四)

此世の王國皆彼の有となるべき事(亞九〇十五、默)

人民悉く彼に來集すべき事(創四十)

各人膝を彼に屈すべき事(賽四十五)

人民來りて王耶穌を拜すべき事(亞十四〇十六)

彼はシオンの城を建つべき事(詩百二)

彼の王位はエルサレムにあるべき事(耶三〇十七、賽)

十二使徒は各自位に坐しイスラエルの十二支族を審判すべき事(太十九〇廿八、路)

耶穌は萬國民を支配すべき事(詩二〇八、九)

彼は公平と公義を以て支配すべき事(賽九〇)

エルサレムの神殿は再建せられ主の榮光此に來らん事(結四十〇、四十八、四十九)

主の榮光の顯はる事(賽四十五)

荒野は變じて良田となるべき事(賽三十二)

砂漠は番紅の如く花咲くべき事(賽三十五)

而して彼の止る所に榮光あるべき事(賽十一)

この外にも澤山ある。

是等の明白なる預言の中には一も譬諭がなく、精神的に解すべき點もない。反つて

我等をして主の第一降臨の時に預言が文字通に成就したる如く再臨の時にもかく成就

せしるゝ事を信せしむるのみである。

第三章 彼の再臨は死を意味せず

基督の第一降臨はユダヤ人を死しむる爲でなかつた。ユダヤ人もさうは思はなかつた。彼の第二降臨も基督信者を死しむる爲でなく、信者も然は思はない。

耶穌は死と其來ることとの間に明白なる區別ある事を約二十一章に示したまふた。

主はペテロが如何なる状で死するかを告げ、ヨハネに就ては反對に『我もし彼が存て我來るを待を欲ば爾に何の與あらんや』と言給ふた。是即ちヨハネは死すに主の再臨

まで生て居ると申したのである。弟子等も然合點し、彼は死すと傳へられた。

死は敵である。基督の再臨の時には死人の中より甦へり、死と陰府に對して勝利を

叫ぶのである、『死よ爾の刺は安に在や陰府よ爾の勝は安に在や』

若し我等死に至るまで忠信ならば(生命懸の忠信であれば)主は冠冕を與ふるを約束し給ふた。しかし其再臨までは受る事が出来ない。

死に就ては其時樂園に於て息む事の外何も約束せられてない。しかし耶穌は再臨

を伸て人爾を束り意に欲ざる所に曳至らん。如此いへるは其如何なる死にて神を榮えさふ事を示した

るなり此を言て後また彼に曰けるは我に從へ。ペテロ反顧イエスの愛せし弟子の從へるを見この弟子

は食する時イエスの懐に倚て主を賣す者は誰ぞやと問ひ弟子なり。ペテロ之を見てイエスに曰けるは主よ

斯人いかに。イエス彼にいけるは我もし彼が存て我來るを待を欲ば爾に何の與あらんや。爾は我に

從へ。是に於て此言兄弟の中に傳りて此弟子死す言り。然もイエスペテロに彼は死す言しに非

す我もし彼が存て我來るを待を欲ば爾に何の與あらん乎と言しなり。

④(哥前十五〇二六)最後に滅さるる敵は死なり。

⑤(哥前十五〇二三)然も各人其次序に循ふ初はキリスト次はキリストの來らんとき彼に屬する者なり。

⑥(哥前十五〇五四、五五)此くつる者うちざる者を衣この死者しなざる者を衣んとき聖書に録して死は勝に

呑れんそ有に應べし。死よ爾の刺は安に在や陰府よ爾の勝は安に在や。

⑦(黙二〇十)なんち將に受んとする苦を懼るる勿れ。惡魔に兩曹の中の者を試し入て爾曹を試みん

す。爾曹十日のあひだ患難を受べし。爾死に至るまで忠信なれ。然ば我生命の冕を爾に賜へん。

⑧(提後四〇八)今より後義の冕わが爲に備あり主すなほち正き審判をなす者その日に至りて之を我に予

ふ。獨われに予るのみならず凡て彼の顯著を慕ふ者にも予ふべし。

⑨(彼前五〇四)なんち牧者の長の顯れん時に壞ることなき榮の冠冕を得ん。

⑩(路十六〇二二)貧者死たれば天の使者たちに依てアブラハムの懐に送れたり富る人も死て葬られしが。

⑪(路二十三〇四三)イエス答けるは誠に我なんち告ん今日なんち我に我に樂園に在るべし。

⑫(撒後一〇七)患難を受る爾曹には我儕に偕に平安を得んことを以て報るは神の公義なればなり。此事は主

イエス火燄の中に其能力の諸使に偕に天より顯れん時にあり。

⑬(黙十四〇十三)われ天より聲ありて我に言ふを聞り曰なんち此言を書せ今より後主に在て死る死人は福

なり。靈も亦いふ然れらば其勞苦を止て息ん其功これに隨はん。

すせ味意を死は臨再の彼

し給ふ時我等は甦り、凡の物を給る約束を受けて居る。

さればこそパウロは此復生を慕ふて居つた事が分る。

彼は死によりて脱ん事を欲はず、復生に由て著んことを欲ふて居た。

若し何人か、基督の再臨について書てある所に死なる語を宛はめて見たらば如何だらう、例へば

『夫れ死は父の榮光を以て來らん』(太廿六)

『死榮光の位に座する時』(太廿八)

『此後死大權の右に座し天の雲に乗て來るを爾曹見るべし』(太二十六)

『視よ死は雲に乗て來る衆の目彼を見ん』(黙一)

『我儕の國は天にあり我儕は死の其處より來るを待』(腓三)

讀者もし是等の引照を以て例外と思はゞ主の再臨に關する他の聖句に換て見てもよい。基督の再臨と死とはたゞ一つ似て居る事がある、即ち我等は何時死るか其時を知らぬといふ一事である。しかし神に感謝すべき事は我等は悉死ぬのでない、『我儕のごとく寝るには非ず』(哥前五)とある。今後主の再臨は死に非る事を實際に知る人々があると思はれる。

若し『死は自ら號令を以て天より降るべし』(撒前四)と言ふ事は不當ならば『是故に怠らずして守れ蓋死何れの時來るか爾曹知らざればなり』(大二十四)と言ふのも不當である。

何故なればかく聖書を漫に解釋する事は主の再臨の大眞理を排斥し、之に代るに怪

●(路十四)然ば爾福なるべし。蓋彼等は爾に報ること能ず。義き人々の甦らん其時なんぢに報答あれば也。

(路二十)三五、三六)彼世に入り死より復生に足ものは娶嫁ことなし。是また死ること能ざるが故なり。蓋天の使と伴く復生の子にて神の子なれば也。

(羅八)三二)己の子を惜ずして我儕衆の爲に之を付せる者は豈れに併て萬物をも我儕に賜ざらん乎。

●(腓三)十一)兎にも角にも死たる者の甦りて得んが爲なり。

●(哥後五)四)我儕この幕屋に在り重を負て歎くなり之を衣の如く脱んことを欲はず彼を衣の如く着んことを欲ふ是生に死へき者の呑れんが爲なり。

(哥前十五)五一—五四)視よ我なんぢらに與義を告ん。我儕こゝに寝るには非ず。我儕皆未の獄の



物なる死を以てする事となるからである。

死は事實上主の再臨ではない

死は信者に取ては事實上主の再臨なりと説は餘りに專斷である。我等はかく信せず、聖書も然示して居ない。之に反して主が來り給ふ時に起る出來事をば聖書は示して居るが、其等の出來事が一信徒の死ぬる時に起らないのである。其時には死人は復生もせず、また信者は主が來り給ふ時のやうに變化もせないものである。我等は陰府即ち死人の中間の状態に就ては知るどころ僅少である。基督の復生後は信者の靈魂は死すれば上なる樂園に行くので、パウロが『身を離れて主と偕に居んこと』(哥後五)と申したのは真である。黙六〇九一十一には死せる信者の或者が主が來り給ふ時に起る所の審判の執行を要求して居る事が記されてある。信者は今もまた常に靈的に基督と偕に居る、しかし有形的に基督と偕に居る事は其再臨の時に復生する事によりて得らるゝものである。されば死を主の再臨と同一のものゝ如くして之を待望むべきを信者に教ふる事は全く非聖書的である。

⑫(黙六〇九一十二)また第五の封印を開しとき祭壇の下に曾て神の道のため及その立し證の爲に殺された者等の靈魂あるを見たり。これら大聲に呼り曰けるは、聖誠の主よ何時まで地にすむ者等を審判せず

且これに我儕の血の報をなし給ざる乎。爰に彼等各人に白衣を賜へて之に曰給ひけるは彼等の如く殺されんとする其共に勞ける兄弟等の數の盈るまで安んじて暫く待べし。

⑬(哥前四〇五)然ば主の來らんときまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ。主は幽暗にある隠たる情を照し心の計謀を顯さん其時おのゝ神より譽を得べし。太二十五〇三一三四を見られよ

(提後四〇一)われ神の前おび顯るゝ時その國に於て生る者死る者を審判するキリストイエスの前にて爾に求む。

(黙十一〇十八)諸の國の民怒を懷けり。爾の怒も亦至れり。且死し者を審判して爾の僕なる預言者及び聖徒ならびに大と小の別なく其名を懼るゝ者に賞を予へ地を亡し給ふ時既に至れり。

⑭(約十四〇二三)イエス答て彼に曰けるは若人われを愛せば我言を守ん。且わが父は之を愛せん。我儕きたりて彼と偕に住べし。

(太二十八〇二十)且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れし彼等に教よ。夫われは世の末まで常に爾曹と偕に在なりアメン。

⑮(約十二〇二六)人もし我に事んさせば我に従ふべし。我に事る者は我なる所に在ん。人もし我に事れば我父は之を貴ぶべし。

(十七〇二四)父よ爾の我に賜し者の我なる所に我と偕に在て我榮すなほち爾が我に賜し者を見んことを願。そは世基を置ざりし先に爾われを愛したれば也。

⑯(約十四〇三)もし往て我なんぢらの爲に所を備は又きたりて爾曹を我に納べし。我なる所に爾曹をも居しめんさて也。  
(撒前四〇十七)後に活て存る我儕われらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。

ダビデ、フラオン博士の證

この人は有名なる千年期後再臨論者であるが斯く申して居る、「信者が死する時に基督が再臨するといふ説は、縦ひ巧に論せられ、また如何に有益なる思想を暗示するにしても、信者が聖書中に第二降臨に關する事として取て居る所に當てはむるは適當の事ではない」と。また次の言によりて明白に説明して居らるゝ、「主は悲める弟子に對ひ「爾曹心に憂ること勿れ……我父の家には第宅多し我爾曹の爲に所を備へ往く」と言ひ、それから何とあるか、「爾曹速に我に従ふべし」とあるか、「死は忽ち我儕を借に居らしむべし」とあるか。否、「もし往て我なんぢらの爲に所を備へ又きたりて爾曹を我に納べし我をる所に爾曹をも居しめん」と也」(約十四)と。

又曰く「イエスの昇れる時かれら天を仰ぎ視たりしに白衣を着たる二人の人ありて旁に立ち曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや爾曹を離て天に擧られし此イエスは」何をするとあるか、死によりて爾曹を天の家に携へ行とあるか。否「爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん」(徒二十)とある。

なほ進んで曰く「教會の待望なる此出來事(再臨)を其聖書上の地位より黜くるならば實際的教義としての其資格と權威をば大部分毀ちつゝ居らぬかを如何して我等は

知るだらうか。神の方法は尋ね知る事が出来ないにしても最善のものであり、自然界に於ても默示に於るが如く神が設備してある事を、縦し僅少にせよ、我々が其に附加へたりなごするなれば、多少見ゆるところの利益があるにしても、其結果は計畫せられ預期せられたる所に反し、全く思はざる變化を來す事を我等は信する事が出来ないか。我等はこの再臨に就ても斯の如き事あつてはならぬと懸念するものである。我等は若し紙數に限が無ならば、千年期後再臨説を熱心に主張したるかゝる人が、死は我等の主の再臨でないとは大膽に言し事を、我等は敬服するものであるから尙澤山引照しなく思ふものである。實に死を以て主の再臨の代となす事は復生の大教理を聖書中の高き地位より貶して殆んど無用の贅物とする事である。

しかし我等は耶穌の説く所と復生とを信する者である。かつ耶穌は我等に打勝

⑤(徒四〇一、二)彼等が民を教へ且イエスの事をひき死より復生の事を宣るにより祭司殿司ふよびサドカイの人たち心を惱し其民に語れるとき突然きたりて。

(徒十七〇十八)時にエビクリアン及ストイクの理學者數人これと相語り。或人いひけるは此騰咽者なにを言んとする乎。また或人いふ彼は異なる鬼神を傳る者の如しと。蓋パウロ彼等にイエス及び復生の事を宣しが故なり。

⑥(哥前十五〇五四、五五)此くつる者くちざる者を衣この死者しなざる者を衣んとき聖書に録して死は勝に香れんと有に應べし。死よ爾の刺は安に在や。陰府よ爾の勝は安に在や。

つ勝利を與へ給ふ時、死人の中より甦るといふ喜ばしき希望を以て我等は待望み居る者である。

・どうか基督信者は「イエスキリストの顯れ給ふ時（死する時でない）我等に來らんとする恩恵」を實驗したいものである。

我等の救主の教訓中一言たりとも死の爲に目醒め、また準備すべき事を命じて居ない。たゞ基督の來ることの爲に目を醒しかつ準備すべき事を命じてあるのみである。されば我等は我等の大敵なる死が我等の重んずる耶穌の再臨であるといふ説に誑されぬやうにせなければならぬ。

故に愛する諸君よ、我等は此光輝ある教理が諸君に大關係あるものと結論する者である。

聖書を研究せられよ

多分諸君は「此事に就ては餘り知らない、了解する事が出來ない」と申さるゝだらう。しかし諸君はこれを知らん事を欲するか。しからは神の聖言は諸君の前にある。聖靈は之を諸君に教へ、また來らんとする事を示し給ふ。是等は皆此眞理を學ばんとする諸君を助けんとする熱情を以て書れてあるのである。

諸君は之を學ばんと欲するか。かの性情良きベレヤ人の如く諸君自身の爲に研究せんと欲するか。たゞ此小冊子を一讀するのみならず、之を手引として聖書を繙き、引照せる章句を探り出し、之を讀み、之が爲に祈り、聖靈が此眞理を諸君に明になし給ふまで研究せんと欲するか。若し然らば諸君は光を與へられ、諸君の靈魂に慰を得るに至ることを我等は信する者である。

基督の千年期前再臨説に永らく反對したる一人の基督信者が斯く申した事がある、  
「予は予の生涯中最も福なる一夜を明した、何故なれば予は昨夜再臨に關する眞理

①(彼前一〇十三)然ば爾曹心の腰に帶して慎みイエスキリストの顯れ給ふ時なんぢらに來らんとする恩恵を疑はずして望むべし。

②(約十四〇二六)わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし。

③(約十六〇十三)然と彼すなはち眞理の靈の來らんとき爾曹を導きて凡の眞理を知しむべし。蓋つれ己に由て語に非ず其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければ也。

④(徒十七〇十、十一)兄弟たち夜間に急ぎパウロとシラスをアレアに去しむ。彼等かしこに至てユダヤ人の會堂に往り。此處の人々はテサロニケの者よりは性情よきが故に好て道をきき此の如こ果して有か無かを知んて日々聖書を究れり。

を見出したからである」と。これが彼の人を喜びを以て充した。而して彼は多くの靈魂を基督に導くために大に用ひられた人である。神は愛する讀者諸君をも恵みまた用ひ給はんことを我等は祈るものである。

第 四 章 三 の 顯 現

歴史中で最も大なる事は榮光の主なる耶穌基督が曾て此世に在し給ふたといふ事である。

現在に於て最も重なる事は基督は今天にありて我等の爲に執成を爲居給ふといふ事である。

今後に於る最も大なる預言の成就は基督が再び來り給ふといふ事である。是等の三の顯現は希伯來書九章に麗しく述られてある。

①(來七〇二五)是故に彼は己に頼りて神に就る者の爲に懇求して恒に生れば彼等を全く救ひ得たり。

(羅八〇三四)罪を定る者は誰ぞや死て復よみがへり神の右に在て我儕の爲に禱告し給ふキリストなる乎。

(約壹二〇一)わが小子よ我これらの事を爾曹に書贈るは爾曹をして罪を犯すこと莫らしめん爲なり。若し人罪を犯せば我儕の爲に父の前に保惠師あり即ち義なるイエスキリスト。

②(來九〇二四)キリストは眞の物の模なる手にて造る聖所に入す今より永く我儕の爲に神の前に顯れんとして眞實の天に入る。

(來九〇二六)もし然すば彼創世より以來しばらく苦難を受べきなり。然ど己を犠牲となして罪を除かんが爲に今世の季にびきたび顯現たり。

(來九〇二八)如此キリストも多の人の罪を負んが爲に一たび犠牲とせらる。彼は復罪を負ふことなく己を望む者に再び顯現て救を施すべし。

曾て世に現はれしは『己を犠牲となして罪を除かんが爲』であつた。二十六節。  
其天に入しは『永く我儕の爲に神の前に顯れん』が爲である。二十四節。  
『彼は復罪を負ふことなく己を望む者に再び顯現て救を施すべし』(二十  
八節)  
主は世に在し給ひし時に『我往は爾曹の益なり』と宣ふた。かくて此世を去給ふた。  
而して『我爾曹の爲に所を備へ往』と仰せられた。しかし主は

かく約束し給ふた

『もし往て我なんぢらの爲に所を備へ又きたりて爾曹を我に納べし我をる所に爾曹をも居しめんとて也』(約十四)これは主の不在中の我等の望また我等の慰として我等に與へ給ふた約束である。

又曰く『爾曹世に在ては患難を受ん』(約十六)『爾曹は嘆き哀しみまた憂るならん然ぞ我また爾曹を見ん其時爾曹の心喜ぶべし』(二十二)

今此世に居らざる我等の主が我等に遺し給ひし此貴き約束即ち彼は再來りて我等を彼に納け、かつ我等彼と偕にありて彼の榮光を拜するといふ事が、基督の花嫁なる教會にとりて之程慰めになるものが外にないのである。

主は我等に

主の晩餐

を與へ、彼を憶へんが爲にパンを食し酒杯を飲み、其死を示して其來る時にまで至る

①(約十六〇七)われ眞を爾曹に告ぐ我往は爾曹の益なり。若しつすば訓慰師なんぢらに來じ。若しつば彼を爾曹に遣らん。

②(徒一〇九)此事を言畢し乃ち彼等の見も間に擧る雲これを接て見ざらしめたり。

③(約十七〇二四)父よ爾の我に賜し者の我なる所に我と偕に在て我榮すなほち爾が我に賜し者を見んことを願ふ。そは世基を置ざりし先に爾われを愛したれば也。

④(弗五〇二五—三二)夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし。己れ己を捨て水の水を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり。また點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。此の如く夫その婦を己の身となして愛すべし。婦を愛する者は己を愛する也。己の身を惡む者は曾て有ることなし之を保養ふことキリストの教會を保養ふが如し。我儕は彼が身の肢なり彼が肉より出されが骨より出たり。是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし。この奧義は大なり我いふ所はキリストと教會を指なり。

⑤(路二十二〇一九)またパンをとり謝して擘かれらに予て曰けるは此は爾曹の爲に予るわが身體なり我を記ん爲に此を行。

⑥(哥前十一〇二六)爾曹このパンを食し此杯を飲ぶに主の死を表して其來る時まで及ぶなり。

べきを命じ給ふた。我等は教會が此地上に在て旅人である間は此約束の變らざる表證として此簡單にして且懐しき紀念を有して居る。而してこれに由て我等は羔の婚筵の時父なる神の國に於て主と偕に新しき物を飲む時まで、十字架より其再臨まで待望み居る者である。

これは主の約束を斷ず憶起さしめ、其再臨に我等の信仰の目を向けしむるものである。『約束せし者は誠信なり』されば我等は『約束のものを受んが爲め』確信と忍耐とを有つべく勸を受けて居る。『今片時ありて来る者來らん必ず遅らじ』(來一〇三)

神學博士ダビデ、プラオン氏が基督の再臨を以て

教會の北斗星

なりと言ひ、又パウロは『望む所の福』と名けて居る。

耶穌も使徒も預言者も此活問題につきて聖書中に力説して居る。紀元二世紀間の初代師父等と基督教會は、彼等の望と慰の重なる源は基督の再臨にあるとして居られた。其時代には耶穌が千年王國時代に地上にありて其聖徒と偕に此世を支配せんが爲に榮光を以て來るといふ信仰が殆んど一般に有せられて居つた。

然るに三世紀頃オリヂンといふ人の首唱の下に一學派が起り、聖書を所謂靈的に解

するやうになり、千年王國なるものが文字通り起るものでないを解釋するやうになつた。かゝる解釋法はマーチン、ルーテルやアダム、クラーク博士や其他の註釋家によりて甚しく排斥せられたものである。

コンスタンチン帝が信者になつて羅馬帝國が名ばかり基督敎國になつたので、多の人々は千年王國が此地上に出來たやうに思ふた。そこで教會が世と妥協して暗黒時代

①(來一〇三)此等は皆信仰を懷きて死に未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望みて喜び地に在ては自ら賓旅なり寄寓者なりと言ひ。

(彼前二〇一)愛する者よ我爾曹に勸む爾曹は賓旅また寄寓者なれば靈魂に逆ひて戦ふ肉の慾を去

②(太二二二)天國は或王その子の爲に婚筵を設るを如し。

(黙一九〇九)天使われに曰けるは羔の婚筵に招れたる者は福なりと書記せ又われに曰これ神の眞の言なり。また路十四〇六二四を見られよ

③(太二六〇二九)われ爾曹に告ん今より後なんぢらと偕に新しき物を吾父の國に飲ん日までは再びこの葡萄にて造れる物を飲し。

④(來一〇二二)我儕誠實の心と疑を懷ひざる信仰を保ち心の惡念を離れ清水をもて身を洗はれて近くべく。又認はず所の望を動かさずして固く守るべし蓋約束せし者は誠信なれば也。われら互に顧みて愛心と善行を激勵し、會集を輟る或人に倣ふことなく共に相勸め其日いよく近るを見て益此の如くなすべし。

⑤(多二〇三)望所の福さ大なる神即ち我儕の教主イエスキリストの榮の顯れん事を望待しむ。

に投じ、遂に十六世紀の改革者によりて覺醒せらるゝ時までには及んだ。そこで主の再臨の慰ある望と福なる約束が再び宣傳せらるゝやうになつた。其以後長年の間忘れられた此問題が非常の興味を以て研究せられた宣傳せらるゝやうになつたのである。過去二百年間此説は（十字架に釘られし救主を單純に信する事によりて救はるゝといふ教理とともに）初代教會にありし如く大に重んぜらるゝやうになつて來たのである。嗚呼神は讀むべき御方である。

第 五 章 千 年 期 (The Millennium)

千年期なる語は拉典語で希臘語のチリアドと同じく千年といふ意味である。この二の語は千年間地上に義しき政府が樹立せらるゝといふ將來の時代につける教理を言顯はす爲に用ひられてある言である。

タルムド書にあるユダヤ人の記者等は此千年期なるものがユダヤ人が凡の敵より救ひ出され、パレスティンが恢復せられ、其處で非常の榮を以てメッシヤの支配は文字通に行はるゝといふのが重なる特色であると申して居る。

千年期前再臨を信する基督信者も一般に左の如く信じて居る、即ち我等の主耶穌基督はメッシヤであり、彼は地上に來りて惡魔と凡の不敬虔なる政府と不法を滅し、正義の王國を立て、彼自ら教會と偕に此世を支配し、エルサレムは其主府となり、再び集められ悔改めたるユダヤ人は中心となり、凡の國民は普通的にして萬國の聖くかつ福なる政府の支配下になる事を信じて居るものである。

千年期後再臨論者は大概左の如く信じて居る、即ち現今のやうに福音を宣傳へて居ると、遂に全世界が悔改め、正義の黄金時代に入り、正義と平和の政府が千年間續き、

それから後に主が「一般の審判」をなささんが爲に再來し、それから永遠に入るものであると信じて居る。千年期に關して明白なる思想を心に有て居る事はよい事である。千年期後再臨説に反對する説は基督が其聖徒と偕に千年間文字通に此世を支配するといふ事で、其は黙示録二十章に明白に記されてある。千年なる語が六度録されてある。二三四五六七節にある。此教は「これを歩むものは愚なりとも迷ふことなし」(賽三十五〇八)とある如く明白である。

基督の千年期前再臨につける「福なる望」に反對する人は次の如き議論を吐て反對するのである、千年期といふ事は黙示録の二十章にのみある事で聖書の外の所には一もない、黙示録は模範的の性質を帯て居るものであるから其を土臺として教理を立る事は不可と。かゝる話は實に皮相的のものである。何故なれば猶太人は黙示録や其他の新約書が書れない前から疾に舊約書の教に由て千年期の教理に充分達して居た事が事實によりて明白である。またタルマド書(經外書の一)の中にも「メッシャの王國は千年間續くべし」と屢々記されてある。これは猶太人が一般に信じて居る事柄である。彼等が何の上にも此教理を立て居るかを知らるには容易事である。其は神の週の安息を言ふのである。

時をば七即ち週に分つ事は聖書を一貫して居る。モーセの律法の根本的制定は安息日を守る事であつた。(埃二十)これは創世記二章にある神の大なる息日に基いたものである。これからして、日から成立つ週のみならず、週から成立つ週即ちペンテコステに至るまでの事を設定したものである(利二十三〇)。また月の週もある、即ち七月には贖罪をなし幕屋に於て七日間の祭をなす事(利二十三〇、二八)、また年の週もある、即ち利二十五〇四にある安息の年である、また安息の年を七次かぞへて遂に第五十年に至るヨベル

④(黙二十〇一九)われ一人の天使底なき坑の鑰を大なる鍵手に携へて天より降るを見たり。かれ惡魔を稱へサタンと稱る龍すなはち老蛇を執て之を千年のあひだ縛置んす。之を底なき坑に投入し閉めて其上に封をなし千年過るまで諸國の民を惑すこと莫らしむ。其後、ならす暫時のあひだ釋放さるべし。我らほくの座位を見しに其上に坐する者あり彼等審判の權を予らる。又イエスの證あふび神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり。此は黙し其像を拜せず其印誌を額あるひは手に受さりし者の靈魂なり。皆生てキリストと共に千年の間王と作り。其他の死人は千年終まで甦らざる也。これ第一の復生なり。この第一の復生に與る者は福なり是聖者なり。此輩の上に第二の死は權を執ること能す。彼等は神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし。千年終てサタン其囚より釋放さるべし。かれ出て地の四方の列邦ゴグとマゴグを惑し之を集めて戦しめんす。彼等の數は海の砂の如し。これら地に遍く滿て聖徒の陣營と愛せらるる城を圍む。此時に火天より降りて彼等を焚盡せり。



の年となるのである、(利二十五〇)

イスラエルが大なる罰を受けた其期間も七につける律法に基いて居つた。即ち彼等がバビロニヤに捕虜になつて居たのは七十年であつた、耶二十五〇十一、十二、但九〇二。またダニエルに示されたる大時期は(但九)メシヤの来るまで七十週あるとしてある。イスラエル人が罰せられ、敵國の中に分散するといふ非常の時期はモーセに由り預言せられ(利二十六〇十八、二十)四重に強められ七倍と言て居る。此神聖なる數七は神が特に選んで其神政々治を布んとし給ひし民の律法、生活また歴史の中に織り込れてある。イスラエル人が反き罪を犯し常に懲されて居るにも關らず安息を守る事は彼等と總ての世に遺されてある、(來四)神に於ては一日は千年の如く(詩九)千年は一日の如くである(彼後三)。

此聖數七なる岩の上にユダヤ人と偕に固く我等の結論を置く事が出来る、即ち聖書の週、週の週、月の週、年の週、七年を七次重ねた週、七十年の週、時の週、本章二十一章にある時代の週の如く、千年期の最週がある事を我等は知るものである。勞苦の六千年が過ぎて千年期即ち安息の第七番の福なる千年が来るのである。千年期に關する此聖書の教理は動かすべからざるものである。其根は創世記にある

安息で其實は默示録の千年王國である。これは神が祝福すべく約束なし給へる諸國民の輝ける望であつて、神の聖言を通じて輝くところのものである。創十二〇三。オ一神の恵の默示よ、輝けよ。願くは主は『若この書の預言の言を削る者あれば神之をして此書に録す所の生命の樹の果に與ること莫らしむ』(黙二十二)この警告を我等の心に印し給はん事を。

なほ此教理に就てもつと委しく知りたいたい人々は著者の小冊子千年期を讀まれよ。

### 第六章 千年期後再臨説

十七世紀の頃教會内に一の新説が這入りこんだ。即ち千年期後再臨説である。

これは英國の神學者ダニエル、ホイトビーによりて説き出されたもので、彼は一の新假定説として宣たものであつた。其説によれば、教會は益々繁昌して全世界が悔改する所まで進歩し、かくして教會が勝利を得て千年期となり、耶穌は其千年期後で無れば臨り給はぬと言ふのである。

彼は此説をば新假定説と呼んだが怪しむに足らない。何故なれば其著書なる口碑論中にかく論證して居る、千年期の教理即ち聖徒が千年間此世を支配するといふ説は二百五十年間重なる基督信者間に通つて居たものであつた、何故なれば其傳説は使徒的であつて、二三世紀頃の多の師父等は之を以て我等の主と其使徒等の言傳であると語つて居たものである。

記載の餘地がないから讀者はデー、テー、テラー氏の「教會の聲」なる本を讀んで貰ひたい。其中にはヘルマス、ジャスタン、マター、ルーテル、メランクソン、メード、ミルトン、ボルネト、アイザック、ニュートン、ワッツ、チャールレス、ウエス

リー、トフレデー及び其他教會歴史中で著名なる多の人々が證人となつて、過去千八百年間基督の千年期前再臨の眞理なる事を非常の勢を以て證して居る。

かゝる證據があるのに教會が聖言の單純なる教と師父の信仰から離るゝといふ事は奇怪なる事である。千年後再臨説が近頃起つたのに關らず教會内に這入りこみ、のみならず基督信者又は教役者などの大多數がこれを受けて居るのである。

そこで此問題の重なる點はこれである、即ち基督の再臨は千年期の前に起るだらうか、而して千年前再臨の信者の信する如く何時起るか知れないといふものであるか、或は千年期後に起るだらうか、即ち千年期後再臨論者の信する如く少なくとも千年期に起るものであるだらうかとの點である。

### 第七章 千年期前説の論證

次に掲ぐる聖書の論證は我等の主の再臨が千年期前なる事を示すものであるが、我等は諸君に祈り深き注意を拂はれんことを請ふものである。

#### 第一、僞基督

撒後二〇八を見るに、僞基督はとう見ても千年期前に現はるゝ者で、主は其臨る時の榮光を以て彼を滅亡すごある。其臨る事をもつと文字通に言ば、主自身の臨在の顯現 (epiphany) である。これに由ば基督の再臨は千年期前なる事が分るのである。(提六〇四、提後二〇十、四〇一、八、多二〇十三にある。前提のあらはるゝなる語はギリシヤ語のエピファニアなり)

監督マクイルヴエーン氏は此論證を以て全く争ひ能はざるものであると言て居る。千年期後再臨説の首唱者なるブラオン氏さへも之を以て千年期前再臨の明確なる證據であると承認し、遂に之を心靈的に解するやうな破目に陥つたのである。かくする事は博士ジョン、バイ、スミス、マルチン、ルーテル、アイザック、ニュートン、監督フリーカー、博士アダム、クラーク及其他の人々の非難したる事である。此論證だけでも澤山であるが、他にも充分確定するところのものがある。

#### 第二、患難の後たぐちに

太二十四〇二九—三一を見るに人の子の來るは患難ののち直にあるとしてある。此患難は千年期前即ち平和の時代の前にあるものである。(路二十一〇二) 第八章の圖解を見れば分る。されば再臨は千年期前である。

#### 第三、迫害せらるゝ教會

①(撒後二〇八)其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。

②(太二十四〇二九、三十)此等の日の患難の後たぐちに日は晦く月は光を失ひ星は空よりおち天の勢ひ震ふべし。其とき人の子の光天に現る。また地上にある諸族は哭哀み且人の子の權威さ大なる榮光をもつて天の雲に乗來るを見ん。

③(太二十四〇二一)其とき大なる患難あり。此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき又後にも有じ。(賽二十四〇二一—二三)地は居る者のごこく踏きによるめき假處のごこくふりうごく、その罪はそのうへにももく遂にたふれて再びおくることなし。その日エホバはたかき處にて高きごころの軍兵をきため地に地のもろくの王を征めたまはん。かれらは囚人が阱にあつめらるゝごこく集められて獄中にごこく多しの日をへてのち刑せらるべし。かくて萬軍のエホバシオンの山およびエルサレムにて統治めかつその長老たちのまへに榮光あるべければ月は面あからみ日ははちて色かはるべし。

眞の教會は迫害せられ、苦しみ、十字架を負ふ人々であつて、かく定められたるものである。凡てキリストイエスに在て神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘を受べし。○(提後三)この事は基督が再臨し給ふ時まで續くもので、基督が来るまでは如何なる形式の千年期をも遮り止むるところのものである。

第四、稗子と麥

新約聖書中何所を見ても基督の再臨前に千年期があると示して居る所は一箇所もない。却つて稗子と麥とが(此時代)の終までともに成長して行くものであると明白に教へられてある。而してまた悪人と人を欺く者は益々悪に進み、ノアとロトの如く人の子の來る時もその如である。○(提後四〇三、四、太二二)稗子の性質また其數の點よりして收穫前に取除く事は反つて神の國の民を危からしむるものである。○(約十五〇九、一二)爾曹も世の屬ならば世は己の屬を愛すべし。然る爾曹は世の屬ならず。我らなんぢらを世より選たり。之に因て世なんぢらに惡む。僕は其主より大ならず。我なんぢらに曰し言を心に記よ。人もし我を窘迫ば爾曹をも窘迫し我言を守ば爾曹の言をも守るべし。然る彼等は我を遣し者識ざるに因わが名の故をもて此等の事を爾曹に加へし。○(約十六〇三三)われ此事を爾曹に語しは爾曹をして我に在て平安を得させんが爲なり。爾曹世に在ては患難を受ん。然る懼るる勿れ我すでに世に勝り。

○(撒前三〇三)一人もこの患難に搖されざらしめんため也。それ患難は我儕に定れることなるを爾曹自ら知り。

○(撒後一〇七、十)患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得べきを以て報は神の公義なればなり。此事は主イエス火獄の中に其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面と其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸て信者に由て讃を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。

○(太十三〇二九、三十)否おそらくは爾曹稗子を抜あつめんとして麥をも共に拔べし。收穫まで二ながら長あけ。我かりいれの時まづ稗子を抜集て焚ん爲に之を束ね麥をば我倉に收よ。刈者に言ん。

○(彼後三〇三、四)まづ首に此事を知べし末日至らば戲謔者いで來り己の欲に従ひて行み、主の約束し給ひし其臨る何處に在や。列祖の寢しより以來すべての物開關の始と變ること無と云ん。

○(提前四〇一)然るも靈明かにいふ。後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑す靈と惡鬼の教に心を寄ん。

○(提後三〇十三)惡人と人を欺く人は益々惡に進み人を惑し亦人に惑さる。

○(路十七〇二六、三三)ノアの時に有し如く人の子の時に然あるべし。即ちノア方舟に入り日まで衆人食飲、嫁、娶など爲たりしが洪水きたりて彼等を滅せり。又ロトの時にも如此ありき。衆人食飲、貿易、樹藝、構造など爲たりしに、ロトソドムより出し日天より火と硫磺を雨せて彼等を皆滅せり。人の子の顯るる日にも亦斯有べし。

る、(太二十三)〇。これ即ち此時代に於て正義の千年王國が樹立せらるゝといふ思想を絶對的に排除するものである。

初め第一のアダムが此王國を惡魔に渡した時から以來人間がこれを再建せんと勉めなければも悉失敗に歸した。しかし曾てノア、サウロ(母上九〇十六、十三〇十三)ネブカドネザル及び其他にも與へられたが失敗した。サタンを征服し給ふた第二のアダムが來つて此世を潔め、甦の根據の上に其王國を樹立し給ふ時までは、此罪に誣はれた地上に千年王國を立るなどの事は失敗に歸するのみである。されば基督が再臨し給ふ其時までには千年期なるものが無のである。

聖書には千年期を待望めどは書てないけれども、我等の主の歸り來るを待望むべきを繰返した最も嚴かに命せられて居るのである。そこで我等は主の歸り來るのが千年期前であると再も論結せざるを得ない。

第五、基督は文字通に支配する事

千年期王國とは基督が此世をば文字通に支配する事であつて、教會が靈的に高めらるゝ事でない。

『二人の王あり正義を以て統治めん』(賽三十二〇一、耶) エルサレムに在て、ダビデの

位に座するごある。また其時は使徒等は十二の位に座し、(太二九)聖徒等は、地を支配するごある、(黙五)〇十。

此王國即ちイスラエルの冠について主なる神かく言給ふ『我顛覆をなし顛覆をなし顛覆を爲ん權威を持べき者の來る時まで是は有ことなし彼に我之を與ふ』(結二七〇二)。

●(創九二、二)神ノア其子等を祝して之に曰たまひけるは生よ増殖よ地に満よ。地の諸の獸畜天空の諸の鳥地に匍ふ諸の物海の諸の魚汝等を畏れ爾曹に懺かん。是等は汝等の手に與へらる。

●(但二〇三七、三八)王よ汝は諸王の王にいませり。即ち天の神汝に國と權威と能力と尊貴とを賜へり。また人の子等野の獸畜および天空の鳥は何處に在る者にもあれ皆これを汝の手に與へて汝にこれをこまぐく治めしめたまふ。汝はすなばち是金の頭なり。

●(耶三〇十七)その時エルサレムはエホバの座位を稱へられ萬國の民に集るべし。即ちエホバの名によりてエルサレムに集り重て其惡き心の剛復なるにまたがひて行まざるべし。

●(亞十四〇十六)エルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし。

●(賽九〇七)その政事と平和とはましくはりて窮りなし。且ダビデの位にすわりてその國をさめ、今よりのちこころしへに公平と正義をもてこれを立て保たたまはん、萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし。(路一〇三二、三三)かれ大なる者を爲て至上者の子と稱られん。又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予れば、ヤコブの家を窮なく支配すべく且その國終ること有ざるべし。

此事に關する章句は澤山あるけれども一々引照する事が出来ない。博士ジエー、パイ、スミスはかゝる章句は基督の肉體となりて世に來り苦難を受ける事を記したるものよりも遙に多いと申して居る。

これらの章句は主が文字通に第一降臨なされし時の預言の如く、特種のものでまた其事柄を充分記したるものである。されば千年期後再臨説を信する兄弟等は此議論に對抗するため、止を得ず聖句を靈的に解するといふ方法を考へ出して解釋法を亂さるを得ざるやうになつたのである。

我等は『預言は神に屬する聖人聖靈に感じて語りし者』(彼後一〇十九)なるを信する者である。マルチン、ルーテルが「文字通の意義こそ實に我等の信仰と基督教神學の實質なり」と云る如く、先づ文字通の意義を了解するために専ら勉めねばならぬ。

耶穌は今天に在て神の右に座し(彼前三三)父と偕に其寶座に居り(時百十〇二)至聖所即ち眞の聖所に在て(來九〇)彼に由て神に就る者の爲に(來七〇)執成居給ふ(羅八〇)のである。『神の古より聖預言者の口に託て言たまひし萬物の復興ん時まで天は必ず彼を受おくべし』(徒三〇)彼は再び來り給ふ時は其父ダビデの位に座する時である。

これもまた其再臨は千年期前である論證である。なほ教會と千年王國との區別につきては

第十章を見られよ。

第六、復生の順序につける論證

我等には復生について決定的の論證がある。其を次の如く簡單に述ぶ事が出来る。凡の死人は復生さるゝ、然し耶穌は死人の中より甦され他の死人は遺されし如く、基督にありて死にし者即ち其臨る時に彼に屬する者は死人の中より先に甦り、其他の死人は尙一の最後の甦の時まで後に遺され、而して千年期は此二の復生の間に起るものである。これに由て基督の再臨は千年期前なる事が明白に示さるのである。

若し何人でも先入主となつて居る思想を有すに單に次の聖句を讀むなればこれを悟ることである。我等は信する者である。

甦の順序

『アダムに屬する衆の人の死る如くキリストに屬する衆の人は生べし然各人その次序に循ふ初はキリスト次はキリストの來らんとし彼に屬する者なり後……終なり……最後に滅さる敵は死なり』(哥前十五〇三) \*ギリシヤ語のアイタ(後)なる語は其次といふ意味で可四〇十七、二十八、提前二〇十三にある如く直ちにさいふ意味でない。同

⑨(徒三〇二十一)且あらむじめ疑たまひしイエスキリストを遣れんむ爲なり。神の古より聖預言者の口に託て言たまひし萬物の復興ん時まで天は必ず彼を受おくべし。

章の五十七には「エパイタ(後)といふ言が數ヶ所に用ひられてある。此事は聖句をば全く誤解して居る千年期後再臨論者によりて凡て不問に附せられて居るやうに見ゆる。聖靈は直にこいふ意味のころには希臘語のエキサワテス、エウセウス又はパラキスレマといふ語を用ひて居る。徒十〇三三、太四〇二二、路一〇六四等を見よ。

基督にある死人は先に復生する事

「兄弟よ爾曹の憂戚は望なき他人の如くならざらんことを願ふが故に我儕既に寝る者に就ては爾曹の知らざるを好まず。我儕若し耶穌の死て甦りし事を信するならば耶穌に由る所の既に寝れる者を神かれと偕に携へ來らんことを信す可きなり。それ主號令と使長の聲と神の筮を以て自ら天より降らん其時基督に在りて死し者先に甦るべし」(撒前四〇十)

第一の復生

「我多の座位を見しに其上に座する者あり。又耶穌の證及神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり。此は獸を拜せざりし者なり。皆生きて基督と共に千年の間王と爲り。然れど其他の死人は千年終る迄甦らざる也。是第一の復生也。此第一の復生に與る者は福也。是れ聖者也。此輩の上に第二の死は權を執ること能はず。彼等は神と基督の祭司と作り基督と共に千年の間王たるべし。而して千年終てサタン其囚より釋放さるべし。彼出て四方の列邦を惑はすべし。……我白き大なる寶座と之に座する者と

を見る。而して地と天と其前を遁れたり。我又死し者の大と小との別なく皆神の前に立つを見たり。……海その中の死人を出し死と陰府と其中の死人を出せり」(黙二十〇)

右に引照せる三節は明瞭であるから何人と雖ども誤解する事はない。第一の引照には復生の順序が記されてあつて「各人その次序(ギリシヤ語の團體)に循ふ」とある。其圖は大隊や聯隊に由て動く軍隊から取たものである。

最初は「死の中より首に生れし」(西一〇)基督。

次は基督に在て死し聖徒で其臨る時に彼に屬する者である。

其次に終が來るので其外の死人(基督に屬する)は復生り、死そのものは滅亡るのである。

第二の引照には基督に在て死せる者先づ復生する事と其復生は主が筮を以て自ら天より降る時に起るものなる事を強めて述べて居る。そこには不信者の復生については記してない。何故なれば彼等はこの福なる第一復生に關係のないものであるからである。

第二の引照には第一復生が患難時代の聖徒(十一章を見よ)の復生に由て完結する事が記されてある。而して基督と偕に千年の間王たる事は其他の死人が復生する前にある事を示して居る。而して千年後には千年終るまで復生らざりし其他の死人は神の臺

前に立ち、死と陰府は其中より死人を出す事を記してある。  
此一千年は所謂千年期で拉典語のミレアンナムである。基督の再臨は千年期前である事の證據としてはこれよりも尙明白なるものは外にあるまい。基督に在て死せし者は其再臨の時に復生する事があるが其復生は千年期の前である。そこで彼の再臨は千年期前であらねばならぬ事になるのである。

### 反對説の論究

#### 聖句を用ふる事

我等は聖書の各所から之等の句を引照して一所にする事は宜き事でないと言て反對する人がある。

何故宜くないか。聖言は悉靈感に由て書れたものでないか。聖言は悉一の心から出たものではないか。また是等は悉聖靈の言であることが明白に示されて居る。是等は悉一の問題即ち復生に關する事は明白なる事である。

使徒パウロも同じやうに聖句を引照して居る、例へば羅馬書三章で凡の人は罪人なる事を言ひ、同十章では信仰に由る義を語り、希伯來書十一章では信仰の果について

書てある。されば我等はパウロの例に倣ふのが穩當であると認るものである。  
かくの如く聖句を集めて論證する方法は基督の神性又は其他の福音的教理を論證せんが爲に用ひられて居るものである。

#### 惟靈魂とのみ記されあるとの事

黙示録二十章には惟靈魂とのみ書れてあるから、其は文字通り肉體の復生とは受取れない、其はたゞ新生の事であつて、靈的復生であるから、基督を信する者の現在の生涯であると謂て反對する人がある。

①(提後三〇十六、十七) 聖書はみな神の黙示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學しむるに益あり。これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり。

②(約十四〇二六) わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言ししことを爾曹に憶起さしむべし。

(約十六〇二三) 然と彼すなはち真理の靈の來らんとき爾曹を導きて凡の真理を知しむべし。蓋かれ己に由て語に非ず其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければ也。

(哥前二〇十) 然と神は其靈をもて之を我儕に顯せり靈は萬事を究知また神の深事をも究知るなり。(彼後二〇二二) そは預言は素より人意に由て出しに非ず。神に屬する聖人聖靈に感じて語りし者なれば也。





る言と全く異ふ言が用ひられてある。此アナスタシスは新約聖書中何處に於ても肉體の復生を言顯はして居る。

首斬られたる者のみが記されある事

此所には首斬られたる者即ち獸と其像とに關係ある者のみが記されてあるからとて反對する人がある。

成程その通である。彼等は患難時代の聖徒であつて、其時に基督を信じ其が爲に偽基督の支配時代に殉教者となりし人々である。其は教會が空中に於て主に遇ふべく携へ擧られてから後の事である。(委細は十一章にあり)。しかし二十章四節の上半句には『我多の座位を見しに其上に座する者あり』とあるが其人々は其以前に復生された人々である事を注意せねばならぬ。

此人々の復生については何も書てない。何故なれば患難時代の前の携擧の時に復生つたからである。

○(撒後二〇一十) 兄弟よ我儕の主イエスキリストの臨り給ふこと及び我儕が彼の所に集ることに就ては我儕願ふ。爾曹あるひは靈により或は言に由あるひは我が暗れるに似たる書に由て主の日に既に來るきて心を動かし且擾こも莫らんことを。誰にの法を以てするとも爾曹欺むること勿れ蓋さきに道を

離る事なく且罪の人即ち淪亡の子現る事なく其日きたらじ。かれ凡て神と稱する者また人の拜む所の者に敵し之より超て己を尊くし神の殿に坐して自ら神なりと爲に至る。われ爾曹の中に在しき此事を語しを爾曹記憶せざる乎。彼をして其時に至りて現れしめん爲に今かれを抑る者を爾曹しる。それ不法の隠たる者すでに働けり。今これを抑るもの除るまで隠れり。其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るに發す所の榮光を以て彼を廢せん。彼サタンが行爲に循ひて各様の偽なる能と徴と奇跡と不義の諸の詭譎を以て顯れかの淪亡者の中に在なり。

(獸十三〇十一一十八) 我また一匹の獸の地より出るを見たり。之二の角ありて羔の角の如し。且その言ふこと龍の如し。この獸先の獸の前にて先の獸の凡の權威をとり地と其上に住る者をして先に死なざる状なりし傷の愈たる獸を拜せしめたり。また大なる奇徴をなし人々の前にて火を天より地に降し、且その權を得て獸の前に行ふ所の奇徴を以て地にすむ者を欺き彼等に語りて彼の刀傷を受けなほ活る獸の像を作らしむ。彼この獸の像に生命を予へ之をして言ふことを得しめ又その像を拜せざる者を悉く之に殺しむるの權を予られたり。かれ衆人をして大小貧富、自主、奴隸の別なく或は右の手或は額に印誌を受しむ。印誌すなほち獸の名あらざる者あるひは其名の數あらざる者は凡て貿易する事を得ざらしめたり。此獸の數目の義を知ものは智慧あり。才智ある者は此獸の數を算よ。獸の數は人の數なり。其數は六百六十六なり。

○(撒前四〇十六一十八) それ主號令と使長の聲と神の籟を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり、後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。是故に此等の言を以て互に慰むべし。

彼等は皆座位に座し約束に基き地に王たらんとして居る。ヨハネは基督と偕に王となるため復生つた患難時代の聖徒をも見た。これで第一復生の順序に符合して居るのである。

基督

復生の首

次は基督の來らん時  
教會と舊約時代の聖徒、基督が空中に來り給ふ時の携擧の時に甦るものなり。

患難時代の聖徒、基督が地上に來り給ふ時の顯現に際し甦るものなり。

末日

基督は其信者を末日日に甦らすとあるが(約六〇三九、四)然らば不信者が甦る前に千年期なるものはあるべきでないと言て反對する人がある。ペテロは『主に於ては一日は千年の如く千年は一日の如し』(彼後三)と申された。此日は大なる千年期の日であつて復生を以て始まり、又復生と審判を以て終る所の日である。其日の間基督は義を以て

萬國を治め之を審判し給ふのである。

此日とは一時代の日であつて、聖靈は彼後三〇十八に窮なしといふ言を以て示して居る。これは希臘語のヒーマラン アイオノスである。ヒーマラとは日といふ言で永い時代を指したものである。約八〇五六、九〇四、羅十〇二一、哥後六〇二、來四〇七

①(太十九〇二八)イエス彼等に曰けるは我まここに爾曹に告ん。我に従へる爾曹は世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫べし。

(哥前六〇二、三)なんぢら聖徒の世を鞫んとするを知らんや。世もし爾曹に鞫るゝならば爾曹至小き事を鞫に足ざる者ならん乎。爾曹われらが天の使を鞫んとするを知らんや。況や此世の事をや。

(黙三〇二二)勝をうる者には我まきに勝を得て我父と偕に其實座に坐するが如く我ま偕に我が寶座に坐することを許さん。

②(徒十七〇三一)蓋神すでに其立し所の人により義をもて世を鞫べき日を定め此事に就ては彼を死より甦らせて其證を衆の人に予たまへば也。

(賽十一〇九一十一)斯てわが聖山のいづこにても害ふことなき傷ることなからん。そは水の海をおほへるごさくエホバをまゐるの知識地につつべければなり。その日エツサイの根たちともろくの民の旗となり、もろもの邦人はこれに服ひきたり榮光はそのささる所にあらん。その日主はまたたぎ手のをべてそ

一八にある日の如くである。

『其日』

其日なる語はイザヤ書又は其他の預言書の鍵である。次の引照を見るなれば如何に澤山であるか分る。賽二〇十一、三〇七、十八、四〇一、二、五〇三十、七〇十八、二十、二十一、二十三、十〇二七等、耶二十五〇三三、結三十八〇十四、十六、三十九〇十一、四十八〇三五、耳三〇十八、摩九〇十一、米四〇六、七〇十一、十二、番三〇十一、十六、基二〇二三、亞九〇十六、十二〇三、四、六、八、九、十一、十三〇一、二、四、十四〇六、八、十三、二一、馬三〇十七、太七〇二二、二十四〇三六、可十三〇三二、路二十一〇三四。

これを以て見れば其は主の日と同じである事が明白である。賽二〇十二と二十を較べて見れば此の如である、『萬軍のエホバの一の日ありすべて高ぶる者の上にのぞまん……その日人々おのが拜せんとして造れる偶像を鼯鼠の穴になげすてん』また番一〇十四、十五には『エホバの大なる日近づけり……この日は忿怒の日なり』とある。また亞十四〇一四にも然ある。何六〇二には『エホバは二日の後我等を活し三日に我等を起せ給はん』とある。是等は明に三千年の三日である。何故なれば『主

にありては一日は千年の如し』であるからである。されば其日は疑ひもなく神の幾時代（アイオンス）の大週年の最後の一千年の日を指すのである。なほ第二十一章を見られよ。

この復生が同節中にある事

義しき者と不義する者との復生は其性質上異つて居るけれども、同節中に一所に記されてあるから、其復生の時も同時であらねばならぬと謂て反對する人がある。

然しかする反對は何の力もない事を主耶穌が著しき例を示し給ふた事によりて教へ給ふた。路四〇十六―二十一を見ると主耶穌は以賽亞書六十一章の一節から讀み、二節

①（但十二〇二）また地の下に睡りたる者の中衆多の者目を醒さん。その中永生を得る者あり。また恥辱を蒙りて、限なく羞る者あるべし。

（約五〇二九）善事を行し者は生を得に甦り惡事を行し者は審判を得るに甦るべし。

（徒二十四〇十五）かつ義も不義も死し者の甦らんことを神に頼て我は望り。即ち彼等が望む所と異なるなし。

②（賽六十一〇一―三）主エホバの靈われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧きものに福音をのべ傳ふることをゆだね我をつかして心の傷める者をいやし俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、エホバのめぐみの年さわれらの神の刑罰の日さを告しめ又すべて哀むものをなぐさめ、灰にかへ

冠をたまひてシオンの中なかのみなしむ者にあたへ、悲哀かなしみにかへて歡喜よろこびのあぶらを手へ、うれひの心こころにかへて讚美さんびの衣ころもをあたへしめたまふなり。かれらは義ぎの樹きエホバの植うゑたまふ者ものその榮光えいこうをあらはす者ものこゝなへられん。

(路四〇六―二一)その長言そだちし所ところなるナザレきたに來り常例じょうれいの如ごとく安息日あんそくにちに會堂くわいどうに入いりて聖書せいしよを讀よんで立たちれば預言者よげんしやイザヤの書ふみをあたへしにイエス其書そのふみを展ひらけて斯録かくしよれたる所ところを見出みだせり。主しゆの靈みやまわれに在あり。故ゆゑに貧者ぶつしきものに福音ふくいんを宣傳のべつたへ、事ことを我われに膏あぶらを沃そそぎに心の傷こころのいためる者ものを醫いふ、又また四よ人に釋ゆるん事こと、智者めしひに見みさせん事を示しめし又また壓制あつからるる者ものを縦たち、主しゆの禧よろこばしきと、年としを宣播のべんが爲ために我われを遣つせり。イエス書ふみを捲まき、役やく者ものに手てへて坐ざしければ會堂くわいどうに在ある者ものみな目めを注そめて視みなせり。イエス彼等かれらに曰いひけるは此録このしよれたる事ことは今日こんにちなんぢらの前に應こたへり。

の上半句かみはんくに至いたり『書ふみを捲まきその役者やくものに手てへ』而しかして『此録このしよれたる事ことは今日こんにちなんぢらの前に應こたへり』と言いはれた。何故なぜ全文ぜんぶんを讀よまれなかつたのだらうか。何故なぜなれば『神かみの刑罰けいばつの日ひ』なるものを宣傳せんてんする時ときが未だ來こなかつたからである。其所そこで句切くぎた事ことが爾後そのご千八百年間せんぱちひゃくねんかんつう續つきて今日こんにちに至いたり、なほ基督きりすとは撒前てさる四〇十六、十七にある如ごとく先まづ聖徒せいとを御み許もとに集あつめ、其後神そのちかみを敬うやまはざる者ものを罰ばつせんとして顯あらはれ給たまふ時まで續つくのである。撒後てさるご一〇七、十、猶十四、十五。これに由よて見みれば主御自身しゆごじしんは賽六十一〇二にある二の事件じこがらが既に千八百有餘年せんぱちひゃくちゆうねんを経過けいこして居をることを教おしへ給たまふ。我等われらは聖言せいごを重おもんずるものであ

る。されば聖者せいしやの復生ふたがへりと其餘そのほかの死人しにんの復生ふたがへりとの間に千年せんねんの距離へだかりがある事ことを信しんずるものである。

主耶穌しゆいすは約五〇二八よつごにじちやうに用もちひ給たまふたホラ(時)なる語ことばは二十五節にじふごせつにある語ことばと同じである。あどの時ときなるものは既に千八百有餘年せんぱちひゃくちゆうねんを経過けいこして居をると我等われらは信しんずる者ものである。そんなら前の時ときなるものは少なくとも一千年せんねんの長さながさであつてみれば黙二十章もくじしちやうと全く一致いちじするではないか。約四〇二一、二二と羅十三〇一十一ろくにんさんじゆういちじにある時ときは皆長みなながき時ときを表あらわして居をる。猶太人ゆだやびとの聖書註釋家せいしよちゆしやに重おもんせられ居をるトレゼルス氏とれぜるすしは但十二〇二ただににじふにを左ひだりの如ごとく譯やくして居をる。

『また地ちの塵ちりの睡ねむれる者ものの中なかより衆多おほくの者もの目を醒ささん等らは永生えいせいに至いたらんされば其等そのら(此時復生このときふたがへらざる外ほかの睡ねむれる者もの)は恥辱はぢじやくを蒙かうらん』これは第一復生だいいふたがへりの教理けうりを最も強く保證ほしやうする事ことは言いふまでもない事ことである。

たゞ一句なるが故

義ぎしき者ものと不義たがしからざるもの者ものとの復生ふたがへりには時ときの距へだかりがある事ことはたゞ黙示録もくしよろく二十章じしやうにのみ一箇所かじよ

②(約五〇二五、二八)誠まことに實まことに爾曹なんがらに告つげ。死しし者神しものの子この聲こゑを聞きき來きたらん。今いまその時ときになれり。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲ために勿なかれ。そは墓はかに在ある者ものみな其聲そのこゑを聞きき出いづ。來きたらん。之これを聞きく者ものは生いく。之これを奇あやしき爲

だけ記されてあるが、此書は譬諭的のものであるから、かゝる重要な問題を定るに當り此一句にのみ依る事が出来ぬと言て反對する人がある。

然り、一箇所だけである。しかし其だけで澤山でないか。例へば凡の光は創一〇三の短き一文章に基して居る、而してその如く成て居る。何故なれば神がかく宣ふたからである。最も驚くべき事實は我等の主の第一降臨に關する事で處女の妊娠の事である。其はマリヤの品性を疑ふ基となつたけれども、其子の父となりし聖靈を信する大信仰を喚び起すものとなるのである。世人の目にはたゞ姦淫と恥辱のみが見ゆるだらうが、其處には最大の純潔が顯はれて居るのである。しかるに此驚くべき事實は過去數百年間左の預言の一節に基を置て居るのである。『視よ處女はらみて子をうまん』(賽七〇十四)。此事は殊に肝要なる休徴として神よりユダヤ人に與へられたものであつたけれども、彼等は詩的の本の中にある故を以て之を信せず、遂にベツレヘムの嬰兒を信せざるやうになつたのである。

しかし賽七〇十四が文字通に實現したる事を信する我等は其を信せざる猶太人を攻撃し、而して黙示録二十章に明白に書れてある事が文字通に實現するといふ事を拒んで自己を義しとして居られやうか。否々、『われ速かに至らん此書の預言の言を守る者』

は福なり』(黙二十二〇)と言ひ給ひしを記憶せられよ。此一句は諸君の定説を粉碎するだらうが、これに注意せられんことを我等は熱心に諸君に勸むるものである。これを拒みなさるな、其單純なる教を賤めなさるな。これは神の神聖なる預言である、山の岩の如く動かざるものである、然り其以上である。山は廢る時があらう、『然る主の道は窮なく存なり』。

教頭アルフォード氏の註釋

我等は今諸君が周到なる注意を教頭アルフォード氏が『これ第一の復生なり』と言つた聖句の註釋に拂はれんことを希ふものである。氏曰く『予は此預言の明白なる意義と其年代に關する言を枉げやうとは思はない、縱し千年期説のために如何なる困難又は辱かしめらるゝ危険に遇ふとも、其を枉ぐることに同意し能はざること此註釋を讀む人々の預期し居らるゝことであらう。使徒等に續ひて生存せし人々や又は初めの三百年間の教會は悉文字通に之を了解して居つたのである。然るに近頃古を尙ぶ事』

①(創一〇三)神光あれと言たまひければ光ありき。  
②(來四〇十二)その神の言は活てかつ能あり。兩刃の劔よりも利く氣魂また筋節骨髓まで刺し割ち心の念と志意を鑿察ものなり。

に於ては第一に居るべき解釋者でありながら初代の人々が全然一致したところのものを得意然と排斥することは實に奇怪なる現象である。若し此一節を正當に解釋するなれば近頃流行する靈的解釋なるものを止を得ず受入るゝやうな事はあるまい。縦は茲に二の復生が記されある句があるとして、第一の時に或靈魂が復生り、其他の死人は夫より暫らくの時日を経てから後に復生るとせんに、若し第一の復生のみが基督と偕に精神的に蘇る事であるとなし、第二の復生は墓より實際に肉體が復生する事であることせんか、然らば言語の凡の意義は全く没却せられ、聖書は何等の事をも證明し能はざるものとして抹殺せらるゝ事になるのである。第一の復生を靈的のものとなし、第二をも然とすれば、何人が主張しても左程困難ではあるまいと思ふ。しかし予は初代の總の教會と有名なる近世の註釋者の多が主張したる如く第一も第二も共に文字通のものとして固く信するもので、之を予の信仰と望の一條として受入れ居るものである。』

**死人の中より復生する事**

若し基督は不義者よりも千年前に義者を甦らする爲に再臨するとすれば、義者の復生は死人の中より復生するものであつて、其餘の死人は千年期後まで残さるゝものであるとする事は當然の事である。さればかくするは聖言を最も慎重に扱ふ事であつて居る。

此語は『死人より』即ち死人より出るといふ意味で、他の死人は残されて居るといふ意味である。

復生なる語ネクロン又はトンネクロンなる語は義者にも不義者にも通用せられである。何故なれば兩者とも復生するからである。しかしエクネクロン（死人の中より復生する）なる語は一度も不義者の復生に用ひられてないのである。（太二二〇三二、二三三〇六、二四〇五、二一、哥前十五〇十二、十）

此語は聖書中に四十九度用ひられてある。即ち

其三十四度は我等の知る如く基督が死人の中より甦へりし事を顯はしたるものである。（太十七〇九、可九〇九、十、路二十四〇四六、約二〇二二、二一〇九、二一〇四、徒三〇五、四〇一、十、十〇四一、十三〇三〇、十三〇三四、十七〇三、三二、二十六〇二三、羅一〇四、四〇二四、六〇四一、九、七〇四、八〇二一、十、七、九、哥前十五〇十二、二十、加一〇一、弗一〇二一、西一〇十八、二〇十二、撒前一〇十、提後二〇八、來十三〇二十、彼前一〇三、二十一）

其三度はヘロデは洗禮のヨハネが死人の中より甦りしものと想像せし復生を表したるものである。（可六〇十四、十、六、路九〇七）

また三度はラザロが死人の中より甦りし時の復生を顯はして居る。(約十二〇一、)  
なほ三度は罪に死にし人の中より靈的生涯に入りし事を言顯はすために譬喩的に用  
ひしものである。

羅六〇十三には『死人の中より甦りし者の如く』とあり、十一〇十五には『死たる  
者の中より生る』とある。

弗五〇十五に『死人の中より起きよ』とある。

路十六〇三十一にある富る者の譬に『縦ひ死人の中より甦る者ありとも』とある。

また來十一〇十九にアブラハムは神がイサクを死人の中より甦し得るといふ信仰  
があつたとある。

残り四度は死人の中より將來復生する事を言表はすに用ひたるものである。可十二

〇二五に『耶穌はかく言ひ給ふて居る』、『それ死人の中より甦る(エクネクロン)時は娶  
す嫁がす天にある使者等の如し』また路二十〇三五、三六に『彼世に入り死人の中よ  
り復生に足ものは娶嫁ことなし是また死ること能ざるが故なり蓋天の使と伴く復生  
の子にて神の子なれば也』とある。

徒四〇一、二にサドカイ人はペテロとヨハネが『イエスの事をひき死人の中より復

生る事を宣るにより』心を惱したとある。

また腓三〇十一には著しく意味ある方法で用ひられてある。現今の譯には『死たる  
者の甦』とあるが、この譯は良くない。何故なれば希臘語の前置詞なるエクなる語  
は最古の文によれば二重の形で顯はられて居る。其はティン エキサナスタシン テ  
イン エク ネクロンで、其を直譯すると死人の中より甦り出るといふのである。こ  
の語からして死人の中より出て甦るといふ特別に強い意味のものになるのである。

是等の句に由て見ると今後死人の中より甦るといふ事があり、死人の一部分だけ  
甦つて、他は後に甦るといふ事を明白に示して居る事が分る。オルシヨ―セン氏は

『この句は多の死人の中より或者のみが先に復生といふ思想より出たものであるとし  
なければ他に解しやうの無い句である』と申された。

義しからざる者が第一復生には何の關係もないといふ事は路二十〇三六に由て明白  
である。『蓋天の使と伴く復生の子にて神の子なれば也』

これは選抜したる階級即ち義しき者のみの復生である。されば主耶穌はこれを義し  
き者の甦と申されたのである。『然ば爾福なるべし蓋かれらば爾に報ること能す義  
き人々の甦らん其時なんぢらに報答あれば也』(路十四)



パウロはこれを愈れる復生と申された。其は基督の臨る時彼に屬る者の復生で、『基督に在て死し者』で、首に甦る人々である。

第一の復生

『この第一の復生に與る者は福なり是聖者なり』(黙二十)

パウロはパリサイ人であつたから甦の一般的事實を信じて居つた。しかるに後かく申された、『キリストを識を以て……凡のものを損となす……彼と其復生の能力を知……彼の苦に與り兎にも角にも死人の中より甦り出ることを得んが爲なり』(腓三〇八、一) また我等は何が爲に主の愛する三人の弟子が死より甦る事につきて互に論せしかを知るものである。彼等はこれがユダヤ人の一般に信じたる教理であつたから死より甦るといふ事は何であつたか十分に分つて居つたのである。しかし死人の中より甦るといふ事は彼等に取ては新しき示であつた。またこれは我々にとりて大切なる示である。何故なればこれは生命の復生であるからである。

外にまた審判の甦(希臘語による)なるものがある。約五〇二九。これは不義者の甦であつて、これで死人が悉く復生(ネクロン或はトンネクロン)る事になる

①(來十一〇三五) 婦も亦死たる者の復活を受しこあり。亦ある人は最も愈れる復生を得べき爲に酷刑られて死るることを欲まざりき。

②(哥前五〇二三) 然各人その次序に循ふ初はキリスト次はキリストの來らんとき彼に屬する者なり。

③(撒前四〇一六) それ主號令と使長の聲と神の籟を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり。

④(徒二十三〇六八) パウロ彼等の其半はサドカイの人半はパリサイの人なるを知て議會の中に呼り曰けるは人々兄弟よ我はパリサイの人またパリサイ人の子なり。死たる者の甦ること望に因て我いま審判る。パウロ如此いひしはパリサイの人とサドカイの人の間に争論をこりて集りたる多の人々相分れたり。蓋サドカイ人は復生また天使および靈を無言パリサイ人は之をみな有言也。

⑤(可九〇十) 弟子等この言を守つ互に論じ曰けるは死より甦ると云は何の事。

⑥(來六〇二) 萬殊の洗の禮また手を按こ死し人の復生かぎりなき審判これらの教の基は再び置こをせずして完全に進むべし。

⑦(約五〇二九) 善事を行し者は生を得に甦り惡事を行し者は審判を得るに甦るべし。

(但十二〇二) また地の下に睡りたる者の中衆多の者目を醒さん。その中永生を得る者あり。また恥辱を蒙りて限りなく羞る者あるべし。

⑧(徒二十四〇十五) かつ義も不義も死し者の甦らんことを神に頼て我は望り。即ち我等が望む所も異なるなし。

(黙二十〇十二、十三) 我また死し者の大小の別なく皆神の前に立を見たり。其處に皆ありて展く別に又一の書ありて展これ生命の書なり。死し者は皆書に録せる所の事に由その行に循ひて審判を受る也。海その中の死人を出し死し陰府と其中の死人を出せり。彼等おのく其行に循ひて審判を受たり。

のである。これを以て見れば復生の順序に時の差があるやうに其性質に於ても異なる事が分る。即ち第一に義しき者が復生り、次に義しからざる者が復生るといふ事になるのである。此時の差なるものは黙二十章に記されたものと符合し、其間は千年で、其が千年王国である。若し基督は義しき者即ち彼に在て眠れる者の甦る時に來るものとすれば(撒前四〇十)彼の來るのは千年期前でなければならぬ。

我等は希臘語の研究者に求むるところは以上の議論を祈の精神を以て考究せられんことを願ひて願ふものである。

博士ダビデ、アラオン氏は千年期前再臨論者か死人の復生(ネクロン或はトンネクロン)を不義者にのみ適用して居るさいふ説れる推定をなし極めて皮相の議論をして居る。我等はネクロンは基督を首として凡の死人の復生に適用すべきものと信じて居るもので、たと死より甦るさいふエクネクロンだけは第一の復生に與る所の特種の人々へのみ適用する者として居る。同氏は可九〇九、十、徒十〇四一、十三〇三、四、二十六〇二三、羅一〇四の句を引照して居るの間違である。其等の句は悉グレースバハ氏によればエクネクロン或はエクス アナスタセオス ネクロンである。(其著再臨なる本を見よ)。

第七、目醒る事

我等は主の來る爲に目醒むべく命ぜられて居る。主耶穌は幾度も其弟子に向ひ守るべき事を告げ給ふた。『是故に爾曹の主いづれの時きたるかを知れば怠らずして守るべき事』(太二十四)

『然ば怠らずして守れ爾曹その日その時を知らざれば也』(太二十五) 『われ怠らずして守れと爾曹に告るは即ち凡の人に告るなり』(可十三七三) 主は守る或は目醒るといふ言を特に強めて言給ふた、『目を醒し居る者は福なり』(黙十六)。

今人々の心理状態を調べて見れば、千年若くは其より以後に起る出來事に對して目醒て居るとか守るとかいふ事は絶對的に出來ぬ事である。然るに千年期後再臨論者が無理にも取て居る態度は即ちこれである。

マシウ、ヘンリー氏は路加傳十二章四十五節を解して「我等が基督の再臨を以て遠き未來にありとする事は凡の悪行の原因となるもので、其思想はたゞ我等を恐しむるのみである」と申された。また目醒る事に就ては「守るといふ事はたゞ主が來ると信するのみでなく、其來るのを望み、時々其來る事につきて考へ、其を確實にして近き事として常に待望む事である。しかし其時は不確である」と申された。

我等は基督の從者たる故を以て信仰の善戰を戦ふべき兵士に較へられてある。(前提一〇八、六〇三、四〇七)。目醒て守る事に關しては軍中の哨兵に譬ふるの一番よい説明である。

古兵士の熟知せる如く、哨兵となりて戦線に立つ時ほど生氣に充て居る事はない。

何故なれば突發事件に對して注意して居るからである。しかし營中では怠慢にして心を用ひずに居る。何故なれば哨兵は五六哩も離れて居るから何も身邊に起らぬと思ふて居るからである。

若し我等は哨兵と千年間の距があることすれば、守る事に於て非常の相違が起ると思ふ。これが千年期後論者のやつて居る事である。

この議論は常識ある人なれば何人でも分ると信する者である。されば我等は神に願ふ所は是等の七の議論が諸君の信仰の足らざる所を補ふものとなられんことである。

約束し給へる主は誠信なり、彼必ず再び來らん、何れの時來るかを知らざれど、主は我々の會見の約束し給はん。

主は我々に常に準備して待望すべきを告げ給へり、何時にても我故國に行くべく。

されば我常に目醒め、我故郷の歌を歌ひつゝ、黄金の門の此方にては主の聖跡を歩まん。主の血は我を潔む、また其聖手に我涙を拭げん、遂に我故國に携へ行き給ふ時。

眞の警醒とは愛する主に遇ふ時に『是エホバなり、われら待望あり』(賽二十)と喜悅極りて叫び、如何なる業務をも喜んで速に棄んとする心意の態度である。

斷へず目醒て守る事

しかし「教會が過去千八百年間も氣を付て居たが、主は來らなかつた。今後千八百

年間も來ないかも知れない」と言ふ人もあるだらう。

多分その如く主は來らぬかも知れない。しかし如何して來ないといふ事を知り得るか、其來る日を定めやうか、或は目醒て守る事を廢そうか。

千年期後論者は主の來るのは一千年或は其後でなければならぬと云ふが、其説は我等の生存中には如何しても主は來らぬものとするのであるから、詰り其日を定めるのと同じ事になるのである。愛する讀者諸君、もし是を容認せば我等は忽ち我等の守を解いて終ふ事になるのである。

主の再臨に關し聖書中に示されたる重なる罰は『我主人の來るは遅らん』と意ふ者に對してある。

されば遅からんよりは備し居る方が遙に優れる事である。

- ①(撒前三〇九一十)われら爾曹の事に就て我儕の神の前に歡ぶ所の大なる喜により爾曹の爲に如何なる感謝を以て神に報んや。晝夜切に願ふは爾曹の面を見んこと、爾曹の信仰の足ざる所を補はんこと也。
- ②(太二十四〇四八一五)若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遅らんと思ひ、その朋輩を打擡きて酒に醉たる者どもと共に飲食し始なば、その僕の主人おもはざるの日しらざるの時に來りて、之を斬殺し其報を偽善者ども同うすべし。其處にて哀哭切齒するこそ有ん。
- ③(太二十五〇十)かれら買んきて往しき新耶きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉られたり。

千年期前信者は主は何時でも来ると信じ、而して我等は目醒て待望み、腰に帶し、燈を整へ、主人の來るのを待つ人の如くして居る者である。路十二〇三五。已に千八百年餘を経過したから「信仰の初より更に我儕の救は近」くなつたので、「今は寐より寤べきの時」となつて居るのである。羅十三〇十一。

今片時

主は空中まで来り教會を携へ擧たまふ其前に成就すべき預言の出來事は別に無い。されば此約束の成就のため忍耐すべき必要がある。『今片時ありて（希臘語にては極めて僅少の間の意なり）來る者きたらん必ず遅らじ』（來十）  
「然し其は片時ではない」と言ふ人があるかも知れない。嗚呼愛する論者よ、諸君には創造より洪水まで、洪水より基督までの間は長い歲月と見ゆるか。哈二〇六、七にある片時は未だ終らぬものと我等は信ずる。其は基督の第一降臨までの五百年間をも含んで居るのである。心に定め置くべき事は、神が諸君を朽ざる靈魂を有つて居る者として語り給ふ事である。  
諸君は永遠といふ廣大なる圈内の其一部を實驗するまで待がよい、さすれば此千八百年なるものは實に「極めて僅少の間」である事が分るであらう。

オ、我等の眼をして主耶穌に向けしめよ、而して目醒て永遠の王を待望ましめよ。  
初代教會の信仰  
基督は千年期前に臨り給ふて、聖徒と偕に此地上に在り千年間支配したまふと云ふ事は初代教會の信仰であつた事に就ては、何の方面にも受入らるゝところのものである。其證據は實に澤山で、とても否定する事が出來ぬところのものである。餘地があるならば、此點に關し諸大家の説を引照したいけれども、其中の數名を擧て満足せねばならぬ。

② 哈二〇六、七 萬軍のエホバひくいひたまふ。いま一度しばらくありてわれ天地と海と陸とを震動はん。又われ萬國を震動はん。また萬國の願ふさころのもの來らん。又われ榮光をもてこの殿に充滿さん。萬軍のエホバこれを言ふ。

③ 耳三〇十六、十七 エホバシオンよりよびさむらひしエルサレムより聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ。然れどエホバはその民の避所 イスラエルの子孫の城となりたまはん。かくて汝ら我はエホバ、汝等の神にして我聖山シオンに住むことなしるべし。エルサレムは聖き所となり他國の人は重ねてその中をいふまじ。

④ 來十二〇二六、二七 昔は其聲地を震へり。今は彼つげて曰く我また一次地のみならず天をも震はん。この再一次言はるは震るべき者の棄られんことを示す。此等の造られたるは震はれざる者の存んため也。  
⑤ 提前一〇十七 願くは萬世の王すなはち朽す見ざる。一の神に窮なく尊貴と光榮あらんことを。アメン。

モシヤイム曰く「基督は此世の最後の審判に先ち、再び人類の中に來り給ふて、千年間支配し給ふこの力ある説はオリヂンの時以前には何等の反對にも會はなかつた。」  
ガイレル曰く「此時代（初の二世紀間）の凡の著書中には千年期前説は甚だ盛んであつて、其説は當時普及せるものであると思はざるを得ない。」

チリングウオルスは其獨得の正確なる論法を用ひて論じて曰く「何の時代を問はず、最も卓越せる師父等によりて信じられ且教へられたる教理であつて、其同時代に一人も反對する者がなかつたとすれば、其は其時代の教會の公共的教理であるとするべきである。然らば千年期の教理は使徒に次る時代の最も卓越せる師父等に信じられ又教へられたるもので、其時代の何人も反對もせず攻撃もしなかつたものであるとすれば、其は其時代の公共的教理であるとするべきである。」

スタクハウスは其著神性の完全體に曰く「此教理（千年期前再臨説）は古きものであつて、一度は正統的基督信者が一般に信じたものであつた事は拒む事が出来ないものである。」

監督ニユトン曰く「千年期の教理（千年期論者の主張するが如き）は第一世紀より三世紀に亘る最も純粹なる時代に信せられたるものである。」

監督ラッセルは非千年期論者なれどもかく言ふて居る、「四世紀の初め頃までは此信仰は普及せられ敢て反對する者がなかつた。」

ギボンヘンケンは偏見なき證人であるが、かく曰て居る、「昔時流行したる千年期説は、かの使徒等の直弟子等と語りし殉教者チヤスチン及びイレニアスよりコンスタンチン帝の子の師傅であつたラクタンシアスに至るまでの世々の師父等が諄々と説きたるものであつた。これは正統的の信者間に大勢力を有したる思想であつたやうに見ゆる。」

彼また曰く「此謬説（彼の所謂）は教會内に存したる間は基督信者の信仰と實行の上にも最も有益なる結果を來らしめたるものであつた。」

博士ダニエル、ホイットビーは近代に於る千年期後再臨論者の元祖であるが、其著口碑論中に大膽にかく承認して居る、「千年期の教理は初めの二百五十年間使徒の言傳として基督信者の重なる者皆之を信じ、又第二第三世紀の多くの師父等も之を以て我等の主と其使徒等と彼等師父等の前に生存せし古人等より言傳へられたものであると述べて居つた。而して彼等が用ひたる言も其儘で、聖句を解釋したるものも其儘であつて、凡ての正統的基督信者が信じたものであつたと曰て居るのである。」  
かく諸書より引照しても、何人か其真相を看破せざるやうな事があつてはならぬ

から、ギボンの言るゝ如く、これを昔時流行したる千年期説となし、即ち基督が千年期前に再来し、千年間此地に在りて支配したまふといふ説であると言ふのが適當である。これはウエブスターの辭書で見るとチリアズム（基督千年期親政説）と普通呼ばれたものであつた。

これらは此問題に關する教職及び教職外の歴史家の證言である。彼等が曰ふ所の初代師父なる者の或者は悉くとは言ぬけれども大抵使徒等と同時代の人々であつた。

フリギヤのヒーラポリスの監督バピアスは使徒ヨハネの弟子か或は其直弟子から教を受し人であるが、千年期論の元祖と呼ぶ程の極端なる千年期論者であつた。スルナの監督ポリカールの弟子なるイレニアスは使徒約翰と直接の關係があつた。また殉教者ジャスチンも初代師父の一人であつた。

此等の偉大なる師父等が我等の主と其使徒の言傳として明白に教へられたる此教理を尊重しかつ注意するは、我等が嚴に盡すべき義務であるまいか。かのバプテスマや、教會政治や、禮拜儀式や、信仰箇條等の如き、苟も我等の聖教に關する問題であるならば、師父等が抱ける其説を確めんとして、遠く溯り深く穿鑿し、彼等が信じまた教へたものであると我等が思ふ所に力を入るゝのに、ひとり此重大なる問題に就ては、師

父等が信じかつ證したるものであると我等が心得て居るものを棄て顧みないとは何故であるか。これは宜きに合ふ事であらうか。愛する讀者諸君、何卒、パウロがテサロニケ人に送りし警告の言を茲に力言したい。是故に兄弟よ爾曹堅く立かつ或は我儕の言あるひは我儕の書に因て教を受たる

傳を堅く守る

べし。此に傳とあるは書き記したの口で傳へたのに拘らないので、五節を見れば分かる。これらの言傳（即ち教）とはパウロと其他の使徒等が自由に書き記したるもので、基督が再来して聖徒が世を治むる事無して何であるだらうか。彼等はいかゞ警告せられたのであるから、彼等は之を固く守り、而して其言傳はホイットビーや其他の大家等が初代教會が確信せしものであると明白に證明したるものであると信するは合理的の事である。されば我等も近代起りしホイットビーの千年期後再臨説でなく、師父等の古き信仰を確守したいものである。

①（撤後二〇五）われ爾曹の中に在しき此事を語しな爾曹記憶せざる乎。

（撤後二〇五）是故に兄弟よ爾曹堅く立つ或は我儕の言あるひは我儕の書に因て教を受たる傳を堅く守るべし。

使徒等は誤つて居らなかつた。

我等は或人が言ふやうに、使徒等が誤つて居たとか、此問題に就て神の示を蒙らなかつたとか、又使徒等と初代の信者は基督の千年期前再臨に關して自ら騙いで居たなど、信する事が出来ない。彼等は主の再臨を確實なる出来事と信じ、其時は父の外に何人も知るものなしとし、何れの時か分らぬけれども、差迫れる事として、彼等は之が爲に目醒めかつ待望んで居たのである。而して彼等は此世を去て未だ見ざりし樂園に入り、我等に書き記したる聖言と反覆説明せる其言傳（傳へし教）と大なる望を遺された。されば我等は彼等の如く眠らずに望を以て守る事をなし、主は明日來るとも敢て言ひもせず、また爾後千年後であるとも言はず、いま來り給ふても差支ないやうにして居るべきである。

まぢのぞみ

神は恒に此榮光ある望を教會の前に置き、教會をして新郎の來るまで待望と愛慕の適當なる態度をとりしめ給ふのである。我等は荒野に於るイスラエル人の如く、國を求め、城を求め、王を求め居る賓旅また寄寓者の如く、これらを暫て死と甦生のヨルダンを越て實得するのである。

死と復生は教會の大多數人にとりて當然の運命である。然し基督の來る時に活て存れる者もあらうが、彼等は死すに瞬間に變り、エリヤの如く復生れる聖徒と偕に携へ擧られ、空中に於て主に遇ふのである。撒前四〇十六―十八。

①(太二十四〇四二―四四)是故に爾曹の主いづれの時きたるかを知らざれば怠らずして守れ。爾曹これを知らし家の主人ぬすびと何の時きたるかを知らば其家を守て破らすまじ。然ば爾曹もまた預備せよ。意ざる時に人の子きたらんを爲はなり。

②(路十二〇三五―四)爾曹腰に帶し燈火を燃して居。主人婚筵より歸來り門を叩ば速に啓ん爲に彼を待人の如せよ。主人きたりて其目を醒し居を見なば此僕は福なり。誠に我なんぢらに告ん主人みづから腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし。或は二更あるひは三更に主人きたりて然なせるを見なば此僕も福なり。爾曹これを知べし若し家の主人盜賊いづれの時に來かを知ば其家を守て破せまじ。然ば爾曹も預じめ備せよ。不意なきに人の子きたらんを爲はなり。

(來十〇三七)今片時ありて來る者きたらん。必ず遅らし。③(撒前四〇五―五十八)われら主の言に託て爾曹に告ん。主の臨らん時に至り活て存れる我儕は直に寢れる者よりも先だ。それ主號令を、使長の聲と神の籟を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり、後に活て存る我儕われらと偕に携へられ空中に於て主に遇べし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。是故に此等の言を以て互に慰むべし。

④(哥前十五〇五―一五二)視よ我なんぢらに與義を告ん。我儕こゝく寝るには非ず。我儕皆末の籟の

ならんさき忽ち瞬息間に化せん。蓋然ならんさき死し人よみがへりて壞す我儕もまた化すべければ也。  
(太二十三〇三七—三九)噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遺さるる者を石にて撃ものよ。母雞の雞を翼の下に集る如く我なんちの赤子を集んさせしこと幾次ぞや。然る爾曹は好ざりき。視よ爾曹の家は荒地となりて遺れん。われ爾曹に告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹の云んさき至るまでは今より我を見ざるべし。

耶穌は「己の民」を世より取んきて、  
榮光に充ちて來り給ふは、  
暗黒と蔭を破りて出る日光の  
朝なるやも知るを得ず。

耶穌は「己の民」を受る時は、  
眞晝かまたは黄昏ならん、  
思はざる時、夜半の黒雲  
榮光の輝に拭ひ去られん。

耶穌は「己の民」を受る時、  
天軍來りてホザンナを歌ひ、  
榮化せる聖徒は天使に和し、  
聖顔の恵は榮の後光の如くならん。

耶穌は「己の民」を受る時は、  
オー樂しきかな、死を嘗ずして行んさば、  
最早病なし、悲哀なし、恐懼なし、號泣なし、  
雲に携へられ、主と偕に榮光の中に入る。





是れ教會の望である(腓三〇廿、廿二、多二〇)。

又是は(路二十一、弗四〇三)に記せる贖である。

是故に此等の言を以て互に慰むべし(撒前四)。

此の如く神を敬ふ者は艱難を免る(後二十一、三六、彼)。

難は世の始より、今に至るまで有らざる大なる艱難の時代を示す(但十二〇一、太廿四〇廿)。

其時の間教會は携へ擧げられ、神は再びイスラエル人に接し(徒五十一、三十三、十七、同百)。

二〇、而して之を其故土に歸し給ふ(賽十一〇十一、同六〇、耶三十〇三、同三十一、同三)。

偽基督顯はるべし(撒後二)。

神の怒の杯既に傾けらる(詩二〇一五、黙六〇十六、一〇)。

一廿、イスラエル人は基督を受入れ(四同十三〇六)火にて試みられん(亞十三)。

て彼等は廢ざるべし(詩廿二〇三)。

顯現は此世に於て審判をなさんが爲め(猶十四)。

と偕に顯はる(前三〇三)。

是れ基督の此地上に再臨することである(徒一〇十一、申卅三〇二、亞十四〇四、五)。

審は萬國民即ち生ける者の審判を示す(太二十五〇三十一、四十六、同十九)。

偽基督滅され(撒後二)。

復は艱難時代の聖徒の復生にして之を以て第一の復生終る(四一六)。

千年時代は千年期である、基督其新婦と共に一千年間此世を支配すること(四廿〇)を示す(提後二〇十二、黙五〇十、賽二〇二五、同四〇、同十一〇一、同十二、同廿五〇六、同六十五〇十)。

悪はサタンが暫時囚より釋放され、ゴグ及びマゴグと共に滅ぼさるゝを示す(黙廿〇七、十四)。

惡復は審判を受けるため救はれざる人々の復生を示す(黙廿〇十二、十五、約)。

大審は白き大なる寶座の前に於て、爾餘の死者の審判を示す(黙廿〇十一)。

死と陰府とは滅ぼさる(黙廿〇十四、哥)。

永永は永遠即ち來るべき時代を示す(弗二)。

此等の出來事は豫じめ聖書に明示せられて居る事である。我等は信するが、其正確なる順序については獨斷的に言ふ事が出来ない。しかし讀者諸君は之を見るなれば、大體に於て未來の事が聖靈によりて示され(彼後二〇)。

二一、約十六〇十三、哥前二〇十)。

等に斷へず顯はすころのものである。加一〇五、弗三〇二一、腓四〇二一、提前一〇十七、提後四〇十八、來十一、十五〇七、十九〇三、二十〇十、二十二〇五。詳細は二十一章を見よ。

第九章 携擧と顯現

再臨の問題につきて正しく理解する爲に尤も大切なる二の事がある。

其一は携擧と顯現との區別である。

携擧は彼方に携へ行かるゝこの意味である。

顯現は希臘語のアポカルプシスで、出現とか、輝き出るとか、又は顯現といふ意味である。

携擧は艱難の前に教會が基督に會はんが爲に空中に携へ擧らるゝ時に起る事を云ふのである。

顯現とは基督が地上にありて正しき審判を爲んが爲に艱難の終りに其聖徒と偕に來り給ふ時に起るところのものである。

携擧の時には基督が其聖徒の爲に空中まで來り給ふ。

顯現の時には主は其聖徒と偕に來り給ふ。主は聖徒と偕に來り給ふ前に、聖徒の爲

①(羅八〇十九)それ受造者の切望は神の諸子の顯れんことを俟るなり。

②(撒前四〇十四)我儕もしイエスの死で、甦りし事を信するならばイエスに由る所の既に廢れる者を神り

と偕に携へ來らんことを信すべき也。

(撒前四〇十七)後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。

③(撒後一〇七)十)患難を受ける爾曹には我儕と偕に平安を得んことを報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火燄の中に其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面と其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ、諸の信者に由て讃を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。

(猶十四、十五)アダムより七代に當れるエノク此輩の事を預言して曰けるは視よ主其聖萬軍と偕に來りて、衆人を鞠き凡て神を敬はざる者の神を敬はずして行ひし悪行と神を敬はざる罪の主に逆ひて語れる諸の悪言を責給ふべしと。

④(約十四〇三)もし往て我なんぢらの爲に所を備は又きたりて爾曹を我に納へし。我なる所に爾曹をも居しめんさて也。

⑤(撒前三〇十三)爾曹の心を堅くし我儕の主イエスその諸の聖徒と偕に來らんとき爾曹をして我儕の神なる父の前に潔して責へべき所なからしめん事を。

(亞十四〇五)汝ら是我山の谷に逃いらん。其山の谷はアザルにまで及ぶべし。汝らエダの王ウツヤの世に地震を避て逃しごこくに逃ん。我神エホバ來りたまはん、諸の聖者なんぢもこもなるべし。

に來り給ふは實に然あるべき事である。神は聖徒と偕に彼等聖徒をも携へ來り給ふ  
(撒前四〇十四)との確證は、主は先づ彼等の爲に來り、彼等を空中に携へ擧て、其處  
で遇ふといふ證據となるものである。十七節。此處にある遇ふといふ希臘語の意味は  
偕に歸る爲に連れ出すといふ事である。徒二十八〇十五には同じ言が用ひられてある。  
そこには兄弟等はパウロが羅馬に行く途中にアッビーポロム及び三館といふ所で彼  
を迎へ、ともに感謝する時を有たのである。これは恰當基督に遇はんとて我等は携へ  
擧られ、而して後に彼と偕に地上に歸り來る事と一致して居るのである。

擧げの時は基督は新郎として來り、其花嫁なる教會を自分の許に受るのである。  
顯現の時は主は其花嫁と偕に來り、萬國民を治めたまふのである。  
擧げの時は主はたゞ空中に於て聖徒に遇はんとて來り給ふのみである。撒前四〇

十七。

顯現の時には主は地上に來り給ふのである。而して其足は其昇天なし給へる所なる  
橄欖山に立ち給ふのである。

①(徒二十八〇十五)羅馬の兄弟たち我儕の事を聞アッビーポロムおよび三館と云る處に來て我儕を迎  
ふ。パウロ之を見て神に謝し其心に力を得たり。

②(太二十五〇十)かれら買入きて往しとき新郎きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉ら  
れたり。

③(弗五〇二五―三二)夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし。己  
れ己を捨しは水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり。また點汚なく皺なく凡て  
此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。此の如く夫その婦を己  
の身となして愛する也。己の身を惡む者は曾て有らざる。之を保養ふことキリストの教會を保養  
ふが如し。我儕は彼も身の肢なり。彼も肉より出され骨より出たり。是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ  
よたつもの一體になるべし。この奧義は大なり我いふ所はキリストと教會を指なり。

④(黙二〇二六、二七)勝を得て終に至るまで我が命を事守る者には我諸邦の民を治むる權威を賜へん。  
彼は鐵の杖をもて諸邦の民を牧り彼等を陶瓦の器の如く碎らん。我わが父より受たる權威の如し。  
(黙五〇十)且我儕の神の爲に我儕を王となし祭司と作給へば也。われら地に王たるべし。  
(黙十九〇十五)彼の口より利劍いづ之を以て列國の民を撃つ鐵の杖を以て列國の民を牧らん。彼また  
全能の神の甚しき怒の醜を踐む。

⑤(徒一〇十一)曰けるばガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや。爾曹を離て天に擧られし此イエスは爾曹が彼  
の天に昇るを見たる其如く亦きたらん。  
⑥(亞十四〇四、五)其日にはエルサレムの前に當りて東にあるところの橄欖山の上へ彼の足立ん。而して橄  
欖山その真中より西東にて裂甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし。汝  
らば我山の谷に逃いらん、其山の谷はアザルにまで及ぶべし。汝らばエダの王ウツヤの世に地震を避て逃し  
ごこくに逃ん。我神エホバ來りたまはん諸の聖者なんぢもなるべし。

携擧の時には教會はエノクの如く此世より取り上げらるゝ。

顯現の時には千年王國は始まるのである。

路二十一〇二八には携擧は艱難時代の初りであるとしてある。『此等の事の成初ん時には起て爾曹の首を翹よ蓋なんぢらの贖ちかづけば也。』(此處にある贖とは第一の復生を云ふので羅八〇二三にあるのと同じである)。

路二十一〇三一には顯現に就て『此等の事(艱難)起るを見ば神の國の近を知』と申して居る。

携擧は何時起るかも知れない。

顯現は偽基督が現はれなければ起らない。凡の時と期(皆主の日を指して居る)は利二十六〇、但以理書、また黙示録にあるが、之等は先づ遂げられてからである。

顯現は日即ち主の日に先立つて起るものである。この區別をする事がないから此問題につきて註釋者の間に大なる混雜が起るのである。

例へば撒 後二章である。其一節にはパウロは携擧即ち主が來りて、我等を其許に集むる事を記してある。其事につきては前の書の、殊に四章に委しく記して居るの

である。

二節には顯現即ち主(のクリオー)の日について記し、其日は先づ道を離るゝ事や罪の人又は淪亡の子即ち偽基督が顯はれなければ來らぬものであるとしてある。

しかるに多の註釋者はパウロが此兩節で同一の事を言て居るのだと論ずるが爲に、聖書をして矛盾せしむるやうな事をして居る。

しかしパウロは基督の來るのが切迫して居ると言て、凡の人を警戒したる所の主の訓戒を矛盾せしめやうとする考が毛頭なかつた事を明白に見るものである。可十三〇

⑨徒十五〇三十七 彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞。神初て異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述。預言者の言これと符り。其書に此後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を復び起し其破壊の跡を再び造て之を建べし。是の餘の民あよび凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言と録されたるが如し。

⑩羅八〇二三 此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子と成人こそ即ち我儕の身體の救れんことを俟。

⑪太二十四〇四二 是故に爾曹の主いづれの時きたるかを知ざれば怠らずして守れ。

⑫撒前五〇二 是は主の日の來ること盜人の夜きたるが如なることを爾曹詳細に知ばなり。(路十七〇三十) 人の子の顯るる日にも亦かく有べし。

また撒後一〇七十一、路三〇十一十二をもあられよ。

三五―三七、路十二〇三五―四十。彼はたゞ上に述べたる如く携擧と顯現との間に區別を付たのみである。當時迫害を受けて居たテサロニケ人は艱難時代に居ると思ひ、主の日今既に来ると思ふて居たのであつた。(今さいふ希臘語はエネステイケンで、手近に、現に又は來九〇九に用ひられてある。三〇二二、七〇二六、加一〇四)。

七) いまだ彼等の爲に來らぬ事を先づ彼等に思ひ出さしめ、其から次に主の日の來る前に起らねばならぬ種々の出來事について語り、彼等の誤謬を訂したのである。また主の日は盜賊の夜來るが如く來ると告げ、(撒前五)然し彼等は夜に屬するものでないから醒て憤むべき事を勧めたのである。

携擧と顯現との尙一つの異は、教會が艱難時代を通過せず、而して顯現は其後であるといふ事である。(太二十四〇)。

エノクは教會の型で、其携擧即ち移されたる事(來五十一)によりて洪水を逃るゝ事が出來た。

基督は曰給ふた、『是故に爾曹醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ』(路二十一)。

而して主は此命令を遵奉する教會に「福なる約束を與へ給ふた、『爾わが忍耐の言を

守りしにより我も亦なんぢを守りて地に住人を試みんが爲に全世界に臨んとする試煉の時に之を免れしむべし……視よわれ迅速に來らん』(黙三〇十)。

こゝに示したるは或特別なる試煉の時の事で、全世界に臨むものである。(全世界は希臘語のオイコーメネーで全人類である。太二十四〇十四にも同じ語がある)。

これは艱難の時で、たゞユダヤにのみ限つた事ではなく、人の住む全地球に及ぶものである。これは『此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき又後にも有じ』(太二十四)と言はれた大なる患難と同じものである。

主耶穌は教會が此患難即ち試煉の時から(希臘語エク)目醒て祈る事によりて逃るゝ約束なし給ふた。路二十一〇三六。これは全世界を覆ふのであるから、其から逃るゝ道としては、此世から取り上らるゝより外にない。其は携擧によりて出來るのである。

選ばれたる者即ちイスラエル人の一部はエルサレムに集められ、火即ち大なる試煉を

路二十一〇三六)是故に醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ。  
 太二十四〇二二)若その日を少くせられずば一人だに救るゝ者なからん。然し選ばれし者の爲に其日は少くせらるべし。

經過するどある。

エノクの如く、教會は其を逃るゝのである。

ノアの如く、イスラエルは之を通過する。

故に教會はエノクの如く(創五〇) 神を悦ばすものであるとの證を得、神と偕に歩む

(米六〇八) ために、自らを卑くし、かくて何時携擧があつてもよいやうに目醒て居るべき

である。

ユダヤ人は何れの時、何れの日を問はず、顯現即ち主の日、彼等にとりては全く光もなき 最暗黒の日である其日を望んで居る。而して彼等は其間に基督を受入れ、而

⑨(賽六十五〇九) ヤコブより一裔をいだしユダよりわれ山々をうけつぐべき者をいだしん。わが撰みたる者は、これをうけつぎ我がしもべらは彼處にすむべし。

⑩(賽一〇二六、二七) なんぢの審士を舊のごまく、なんぢの議官を始のごまくに復すべし。然るのちなんぢは正義の邑、忠信の邑とよばれん。シオンは公平をもてあがなはれ、歸來するものも正義をもて贖はるべし。

(亞十〇六一十) 我ユダの家を強くしヨセフの家を救はん。我われらを恤むが故に彼らをして歸り住しめん。彼らは我に乘られし事なきが如くなるべし。我は彼らの神エホバなり我われらに聽べし。エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たるごまく、心に歡ばん。其子等は見て喜びエホバに因て心に樂まん。我われらに

向ひて嘯きて之を集めん。其は我これを贖ひたればなり。彼等は昔殖増たるごまくに殖増ん。我われらを國々の民の中に播ん。彼等は遠き國において我をおぼへん。彼らは其子等ごまくに生ながらへて歸り來るべし。我われらをエジプトの國より携へかへりアツスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかん。その居處も無きはざるべし。

⑪(亞十三〇八、九) エホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に、三分の一はその中に遣らん。我その三分の一を携さへて火にいれ銀を熱分るごまくに之を熱分け金を試むるごまくに之を試むべし。彼らわが名を呼ん、我これにこたへん。我これは我民なりと言ん、彼等またエホバは我神なりと言ん。

(詩五十七〇二) 我をあはれみたまへ神よわれをあはれみたまへ。わが靈魂はなんぢを避所とす。われ禍害のすぎざるまではなんぢの翼のかげを避所とせん。

(賽二十六〇二一) わが民よゆけ、なんぢの室にいり汝のうしろの戸をさちて忿毒のすぎゆくまで暫時かくるべし。視よエホバはその處をいでる地にすむものごまくに不義をなしたまはん。地はその上なる血をあらはにして殺されたるものをまた掩はざるべし。

⑫(來十一〇五) 信仰に由てエノクは死ざるやうに移されたり。神これを移しに因て人見出すごまかを得ざりき。彼れまだ移されざる先に神に悦ばるる者ご證せられし也。

⑬(歴五〇十八、二十) エホバの目を望む者は禍なるかな。汝ら何ぞエホバの目を望むや。是は昏くして光りなし。人獅子の前を逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るるに宛も似たり。エホバの日は昏くして光なく暗にして輝なきに非ずや。

⑭(亞十二〇九、十) その日には我エルサレムに攻きたる國民をこまかく滅はすごまかを務むべし。我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈禱の靈をそごかん。彼等は其の刺たりし我を仰き觀、獨子のために哭き長子のために悲しむがごまかくのために痛く悲しまん。

して『夕暮の頃に明くなり』『活る水エルサレムより出』(亞十四〇六一八)る様になる。  
新郎の來るとき携擧せらるゝ事は信者にとりては實に最も麗しき慰藉である。され  
ばパウロは『此等の言を以て互に慰むべし』(撒前四〇十八)と申されたのである。  
しかし基督が其聖徒と偕に顯現する事は神を信せざる者に對する復仇であるから、  
我等の主耶穌基督の福音に従はざる者にとりては手酷き事でもた恐しき事である。

○(黙六〇二十一十七)また第六の封印を開し時われ觀しに大なる地震あり。日は毛布の如く黒なり月は血の如  
くなれり。天の星は無花果の樹の大風に搖て未だ熟せざる其果の落るが如く地に墮、天は巻物を捲が如く去  
ゆき諸山諸島みな移てその處を離れたり。地の諸王また貴人、富者、將軍、勇士、すべての奴隸すべて  
の自主悉く洞に匿れ山の巖の中に匿れ、山巖に曰けるは願くは我儕の上に墜我儕を掩ふて寶座に坐す  
る者の面を蓋の怒を避しめよ。この蓋の怒の大なる日すでに至れるなり。誰か之に抵ることを得んや。

### 第十章 教會と千年王國

主の再臨の問題につき理會する爲に大切なる第二は教會と千年王國との間にある區別である。

基督教會(希臘語のエクレーシア)は集會といふ意味で、モーセ時代の集會即ち荒野に於る教會と異りたるものである。教會なる者は基督が來り給ふまでは未來に屬するものであつた。これは左の聖言に由て分る、『我が教會をこの磐の上に建べし』(太十六)これに由て見れば教會は未だ建られて居なかつた事が分る。

これは又これに次で來る千年王國とも違ふて居るのである。教會は肉體を以て顯はれたる基督の同伴者で、基督の苦難を顯彰し、其患難の缺たる所を補ふ者である。

○(徒七〇三八)彼は野の會に在シナイ山にて己に語れる所の天使また我儕の先祖等と偕に在て我儕に授んが爲め生る道を受し者なり。  
○(西二〇二四)今われ爾曹の爲に受る苦を喜び又わが肉體をもてキリストの體すなはち教會のために其患難の缺たる所を補ふ。  
また前二〇五、六、三三〇、三三三、三三六、三三九、三四一、三四三、三四五、三四七、三四九、三五〇、三五二、三五四、三五六、三五八、三六〇、三六二、三六四、三六六、三六八、三七〇、三七二、三七四、三七六、三七八、三八〇、三八二、三八四、三八六、三八八、三九〇、三九二、三九四、三九六、三九八、四〇〇、四〇二、四〇四、四〇六、四〇八、四一〇、四一二、四一四、四一六、四一八、四二〇、四二二、四二四、四二六、四二八、四三〇、四三二、四三四、四三六、四三八、四四〇、四四二、四四四、四四六、四四八、四五〇、四五二、四五四、四五六、四五八、四六〇、四六二、四六四、四六六、四六八、四七〇、四七二、四七四、四七六、四七八、四八〇、四八二、四八四、四八六、四八八、四九〇、四九二、四九四、四九六、四九八、五〇〇、五〇二、五〇四、五〇六、五〇八、五一〇、五一二、五一四、五一六、五一八、五二〇、五二二、五二四、五二六、五二八、五三〇、五三二、五三四、五三六、五三八、五四〇、五四二、五四四、五四六、五四八、五五〇、五五二、五五四、五五六、五五八、五六〇、五六二、五六四、五六六、五六八、五七〇、五七二、五七四、五七六、五七八、五八〇、五八二、五八四、五八六、五八八、五九〇、五九二、五九四、五九六、五九八、六〇〇、六〇二、六〇四、六〇六、六〇八、六一〇、六一二、六一四、六一六、六一八、六二〇、六二二、六二四、六二六、六二八、六三〇、六三二、六三四、六三六、六三八、六四〇、六四二、六四四、六四六、六四八、六五〇、六五二、六五四、六五八、六六〇、六六二、六六四、六六六、六六八、六七〇、六七二、六七四、六七六、六七八、六八〇、六八二、六八四、六八六、六八八、六九〇、六九二、六九四、六九六、六九八、七〇〇、七〇二、七〇四、七〇六、七〇八、七一〇、七一二、七一四、七一六、七一八、七二〇、七二二、七二四、七二六、七二八、七三〇、七三二、七三四、七三六、七三八、七四〇、七四二、七四四、七四六、七四八、七五〇、七五二、七五四、七五八、七六〇、七六二、七六四、七六六、七六八、七七〇、七七二、七七四、七七六、七七八、七八〇、七八二、七八四、七八六、七八八、七九〇、七九二、七九四、七九六、七九八、八〇〇、八〇二、八〇四、八〇六、八〇八、八一〇、八一二、八一四、八一六、八一八、八二〇、八二二、八二四、八二六、八二八、八三〇、八三二、八三四、八三六、八三八、八四〇、八四二、八四四、八四六、八四八、八五〇、八五二、八五四、八五八、八六〇、八六二、八六四、八六六、八六八、八七〇、八七二、八七四、八七六、八七八、八八〇、八八二、八八四、八八六、八八八、八九〇、八九二、八九四、八九六、八九八、九〇〇、九〇二、九〇四、九〇六、九〇八、九一〇、九一二、九一四、九一六、九一八、九二〇、九二二、九二四、九二六、九二八、九三〇、九三二、九三四、九三六、九三八、九四〇、九四二、九四四、九四六、九四八、九五〇、九五二、九五四、九五六、九五八、九六〇、九六二、九六四、九六六、九六八、九七〇、九七二、九七四、九七六、九七八、九八〇、九八二、九八四、九八六、九八八、九九〇、九九二、九九四、九九六、九九八、一〇〇〇



千年王國とは基督の榮光の顯はるゝ事である。其榮光は『人の子榮光の位に坐する時』また試煉の時に基督と偕に苦しむたる者が權力と權威を與へられて崇めらるゝ時に、受る所のものである。此王國は手近にある、即ち主なる耶穌が來り給ひし時に、近に來たので、近よつたのである。かの愛する三人の弟子は變貌山に於て主の榮光と能力を先に味ふたる事を證して居る。

しかし猶太人は王國を拒絶し、彼等の王を殺した。彼等は耶穌に支配せらるゝ事を欲まなかつたから、神の國は『たゞちに顯明れ』なかつたのである。されば其は恰當『ある貴者みづから領地を受けて歸んとて遠國へ往』(路十九十) たやうな事になつた。此譬に由て見れば神の國はなほ將來にある事を耶穌は教へたまふた事が分る。

神の國はなほ未來である

主は『われ爾曹に告ん之を神の國に成までは復これを食せし…我なんぢらに告ん神の國の來るまでは葡萄酒より造しものを飲じ』(路二十二) と言給ふた時には王國は未來の事であつた。(太二十六〇二九、可) (十四〇二五をも見よ)

②(太十九〇二八) イエス彼等に曰けるは我まこに爾曹に告ん。我に従へる爾曹は世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫べし。また路廿二〇二八三十三。

②(彼前一〇十一) 即ち彼等その衷に居キリストの靈キリストの受んとする苦難と其のち得んとする榮を預じめ證したる此は何の日のいかなる時を示せるか推究したり。

③(太三〇二二) 曰けるは天國は近けり悔改めよ。 また四〇七、十〇七を見よ。

④(路十〇九—十一) 邑の中なる病の者を醫せ。亦衆人に神の國は爾曹に近けり。曰。もし邑に入んに接る者なくば爾に出て曰。我儕に沾たる爾が邑の塵は爾曹に對て拂ん。然も神の國の近けるを知。

⑤(來十〇二五) 會集を轍る或人に傲ふことなく共に相勸め其日よく近るを見て益此の如くなすべし。

⑥(太十七〇一九) 六日の後 イエス、ペテロ、ヤコブその兄弟、ヨハナを伴ひ人を避て高山に登り給ひ、彼等の前にて其容貌はより其面目の如く輝き其衣は白く光れり。モーセとエリヤ現れてイエスと偕に語め。ペテロ答てイエスに曰けるは主よ我儕ここに居は善。もし尊旨に適ばば我儕に三の廬を建てたまへ。一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん。如此いへる時かやける雲かれらを蔽ふ。聲雲より出て言けるは此は我旨に適ふわが愛子なり。爾曹これに聽べし。弟子これを聞て大におそれ倒れ伏たり。イエス來りて彼等に手を按ふき懼るる勿れと曰ければ、其目を舉しに惟イエスのほか一人をも見ざりき。山を下る時にイエス彼等に命じて人の子の死より甦るまでは爾曹の見し事を人に告べからずと語り。

(彼後一〇十六—十八) われら前に爾曹に我儕の主イエスキリストの能力と其顯れ給ふことを告るに巧なる奇談を用ざりき。我儕は親其大なる威光を見し者なり。至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼ば我心に適ふ我が愛子なりと曰る此時かれは神なる父より尊き榮を受たり。われら彼と偕に聖山に在し時この天より出し聲を聞り。

かの懸られたる罪人の一人が『主よ爾國に來らん時我を憶たまへ』(路二十三)と叫びし時には王國は未來の事であつた。耶穌を墓に葬りしアリマタヤのヨセフは『神の國を慕る者』(可十五)であつたとあれば、矢張神の國はなほ未來の事であつた事が分る。パウロは弟子等に信仰に居るべき事を勧め『又多の艱難を歴て我儕が神の國に至るべき事を教へ』(徒十四)とあれば未來の事である。迫害を受たるテサロニケ人は患難を受たのは『神の國に入べき者たらしめん爲』(撒後一〇)とあるから神の國は未來の事である。

ペテロは次の如く勸をせし時は數年後の事であるが、神の國は確に未來の事である。『是故に兄弟よ勤て爾曹の召れし事と選れし事とを堅固せよ若前に告たる事どもを行へば爾曹いつまでも躓くこと莫らん此の如ば神なんぢらに我儕の主なる救主イエスキリストの永遠國に入の恩を豊に予へ給ふべし』(彼後一〇)而して忠信にして敬虔なる教會が鞭撻、拷問、放逐、嘲弄、誣告等の恐るべき迫害を蒙りし悲しき長の月日を送つて居た間は神の國は未來の事である。

耶穌は『領地を受て』教會に患難を加へたる者には患難を以て報ひ、『其榮光の位に坐す』る爲に歸り來るまでは神の王國は未來のものである。

此數世紀間神の國は奧義として隠されて居たが、暫て能力と榮光の中に顯はるゝの

- ①(提後三〇十二)凡てキリストイエスに在りて神を敬ひつゝ世を渡らん志す者は審を受べし。
- ②(路十九〇十五)領地を受て歸し時あの一商賣して幾何の利を得たるかを知んて金を予ふきたる僕等を召し命じぬ。
- ③(撒後一〇六一十)蓋なんぢらに患難を加ふる者には患難を以て報ひ、患難を受る爾曹も皆に平安を得べきを以て報ひ、神の公義なればなり。此事は主イエスキリストの福音の中に其能力の諸使に天より顯れん時にあり。即ち神を識る者もよび我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。これら主の面を其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讃を得ん其日なり。爾曹は我儕の證を信する者なり。
- ④(太十九〇二八)イエスキリストは彼等に曰けるは我まここに爾曹に告ん我に從へる爾曹は世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を轄べし。
- ⑤(太十三〇十一)答て曰けるは爾曹には天國の奧義を知んことを予たまへど彼等には予へ給されば也。路八〇十二、(太十三〇四三)此の義人は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽ゆる者は聽べし。
- ⑥(羅八〇七一二三)我儕もし子たらば又後嗣たらん。即ち神の後嗣にしてキリストに後嗣たる者なり。我儕もし彼に苦を受なば彼に榮を授べし。われ意ふに今時の苦は我儕に顯れん榮に比ぶべきに非ず。それ受造者の切望は神の諸子の顯れんことを俟るなり。それは受造者の虚空に歸せらるるは其願ふ所に非ず。即ち之を歸する者に因り。また受造者みづから敗壞の奴たることを脱れ神の諸子の榮なる自由に入んことを許れんことを望む有されたり。萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に勞苦を成んこと即ち我儕の身體の救れんことを俟。

である。

其時『此世の諸の國は我儕の主および主のキリストの屬となり』而して王國は至高者の聖徒に與へらるゝのである。されば我儕は主に教へられし如く

爾國を臨らせ給へ

と祈るのである。

戰鬪的教會はペンテコステの時、徒二章に始つたが、艱難時代の前の携擧の時に終るものである。

神の國は艱難時代の終の顯現に始まる。

其は基督が親しく地上に於て治むる事である。

彼は猶太人の王となると預言されてある。(賽九)。

彼は猶太人の王として生れた。(太二)。

彼自ら猶太人の王なりと言た。(太二十七)。

彼は猶太人の王として釘られた。(太廿七)。

彼は神の國の福音を傳ふるために來り『期は満り神の國は近けり』(可一〇五)と宣ふた。

彼は神の國は彼等の間にありと申された。路十七〇二一。

彼己の國に來たりしに其民が接なかつた。(約十一)。

彼は神の國を建たかつた。しかし民は之を拒み、彼を十字架に釘た。(太二十三)。

しかし神は彼を死より甦らしめ、神の右に擧げたまふた。

主は聖靈を世に遣り給ふた。其能力と導のもとに使徒等は天國の福音(徒二)を先づ

③(歌十一〇十五)第七の天、使、箴を吹しとき天に大なる聲ありて曰此世の諸の國は我儕の主および主

のキリストの屬を爲りキリスト世々窮なく之を治め給はん。

(但七〇二七)之に權を榮と國を賜ひて諸民諸族諸音をしてこれに事へしむ。その權は永遠の權にして

て移りさらず又その國は亡ぶることなし。

④(但七〇二七)而して國を權と天下の國々の勢力さほみな至高者の聖徒たる民に歸せん。至高者の國は

永遠の國なり。諸國の者みな彼に事へかつ順ひばん。

⑤(來十〇十二、十三)然と此人は一次罪の爲に一の犠牲を獻て窮なく神の右に坐し、その敵を足踏さな

さん時を俟り。

(徒二〇三四一三六)夫ダビデは天に昇しことなし。然るに彼みづから言主わが主に曰けるは我なんちの敵

を爾の足踏さ爲まで我右に坐すべし。然らば凡てイスラエルの全家爾曹が十字架に釘し此イエスを立て

神これを主となしキリストとなし給しことを確かに知れ。

⑥(徒三〇二六)神すでに其僕イエスを立なんちら各人を其惡より引反し福を獲させんが爲に先なんちらに

彼を遣せり。

(羅一〇十六)我は福音を耻させず此福音はユダヤ人を始ギリシヤ人すべて信する者を救んさの神の大

能たれば也。

猶太人に傳へたが、彼等は之を受入れなかつたから、弟子等は異邦人に向ふやうになつた。かく神の國は猶太人に近いたけれど、彼等は跳つけたから、其待つ間に、神は『異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひ』(徒十五〇十四)かくして隔の籬を毀ち、主の名を信する凡の猶太人と異邦人を一となし、一の新き人即ち基督の靈妙なる體なる教會となし給ふのである。

本文中に其待つ間にさあるが、これは此問題の眞の解釋である。我等は信するものである。基督は來り給ふた時に神の國は近いたのである。若し彼等は主を受入れたならば神の國は實現したのであつたらう。しかし今は中止の姿となり、彼が再び來り給ふまで待ればならぬ事になつて居る。

希臘語のエンギゾーなる語は太三〇二、四〇七、十〇七、また路十〇九一十一に近けり。譯されてあるが必ずしも極めて近いといふ意味ではない、羅十三〇二に同じ語が用ひられてある。『日近けり』また『其日いよいよ近るを見』(來十〇二五)『主の臨り給ふ事近し』(雅五〇八)『萬物の末期近けり』(彼前四〇七)にある語は同一で、いまだ送げられて居らぬのである。

さればエンギゾーなる語は千八百有餘年を経過し、主が再臨し給ふ時までを言ふのであるといふ事を我等は知るものである。

奧義

此の如く教會は一の奧義として來つた。これは舊約の預言中に稀に示されて居るのみである。『世の成ざりし前より隱藏たりし奧義』(羅十六)『前代には人に知らしめざりし奧義』(弗三〇)『この道は歴世歴世隠れたる奧義なりしが今……顯れたり……異邦人

の中に顯れし奧義の榮の豊(四一〇二)。

②(徒十三〇四六)パウロとバルナバ毅然として曰けるは夫神の道は必ず先爾曹に告べきなり。然も爾曹は之を棄つ己は永生を受べき者に非ず。自ら定れば我儕轉て異邦人に向ふべし。

③(太二十三〇三九)われ爾曹に告ん主の名に託て來る者は福なり。爾曹の云んとき至るまでは今より我を見ざるべし。

④(弗二〇十四、十五)彼は我儕の和なり。二者を一となし冤仇なる隔の籬を毀ち律法の中に命する所の法を其肉體にて廢せり。蓋二者を己に聯れ之を一の新しき人に造りて和むしめ。

⑤(弗四〇十二、十三)これ聖徒を全うし服務の事を、行ひキリストの體の徳を建我儕をして皆おなじく神の子を信し之を知り全人すなはちキリストの満するほど成までに至り。今よりのち嬰兒ならず人の詭譎の術と誘惑の巧に蕩漾するることなく各様の教の風に搖動されず。

(弗五〇二二三)蓋キリスト教會の首なる如く夫は婦の首なれば也。キリストは身の救主なり。然れば教會のキリストに服ぶ如く婦も凡のこの夫に服ふべし。夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし。己を捨給ひし水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者せんに爲なり。また點汚なく皺なく凡て此の如く類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。此の如く夫その婦を己の身となして愛すべし。婦を愛する者は己を愛する也。己の身を惡む者は曾て有ることなむ。之を保養ふことキリストの教會を保養ふが如し。我儕は彼が身の肢なり。彼が肉より出かれ骨より出たり。是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし。この奧義は大なり。我いふ所はキリストと教會を指なり。

これは教會に關する奧義であつて、預言者等を困らせたもの、靈が基督の苦難を預じめ證したとは何の事であるかと、探索かつ推究せしめたるものであつた。(前二〇十一) 彼等は來らんとする神の國の榮光の事は知つて居つたけれども、我等に示されまた天使を喜ばしたる此奧義をば悟らなかつたのである。其奧義とは苦難を受るメッシャと迫害せらるゝ教會であつた。

教會は基督の新婦たるべきもの、主は其を自ら己の前に建んとし給ふのである。(弗一〇三三)

しかし教會は今悲哀と苦難の處女であつて、其婚約せる夫なる主耶穌基督の苦難を分擔して居るのである。

主曰く『爾曹は世の屬ならず我なんぢらを世より選たり之に因て世なんぢらを惡む…人もし我を窘迫ば爾曹をも窘迫べし』(約十五十) 『爾等世に在ては患難を受ん』(約三三) 使徒曰く『凡てイエスキリストに在て神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘を受べし』(提後三) なる約十七〇十四と撒前三〇三を見よ。これは實に然あるべき事である。何故なれば此世は神の子を殺したる爲に、其血の責を任ふべきである。しかし父なる神は其比類なき愛と恩寵の故に此非道を忍び、復仇の日を忍耐びて延し、永く

忍びて一人にても滅亡ざるを望み居たまふのである。

神は其子を殺したる者に對してさへかく忍び給へば、其教會を迫害する者に對して忍び給はざる事はあるまい。

(彼前一〇十一) 爾曹が受る所の恩を預言せし預言者等は此 救に係る事を探索かつ推究したり。即ち彼等その衷に居キリストの靈キリストの受んとする苦難其のち得んとする榮を預じめ證したる

此は何の日にいなる時を示せるを推究したり。彼等は黙示を蒙りて其傳る所の事おのれの爲に非ず爾曹の爲なることを知り、其傳へし事は今天より遣り給ふ聖靈に由て福音を傳る者の爾曹に告る所の事なり。斯事は天の使等も知んことを欲へり。

(哥後十一〇二) われ神の熱心の如き熱心をもて爾曹を念ふ。我なんぢら一人の夫に聘定せり。是なんぢらな潔き女としてキリストに獻んごする也。

(約十七〇十四) われ爾の道を彼等に授たり、世は彼等を惡む。蓋わが世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非されば也。

(撒前三〇三) 一人もこの患難に搖されざらしめんため也。それ患難は我儕に定れることなるを爾曹自ら知り。

(彼後三〇九) 主その約束し給ひし所を成に遅きは或人の遅しき意ふが如くに非ず。一人の亡ぶるを欲み給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也。

此迫害は耶穌が來り給ふて教會を取り擧げ、而して教會をして大なる試煉の時を逃れしむる時までには續くであらう。其試煉は全世界に臨り、教會に患難を與へたる者に患難を以て報ふる時である。この反逆と迫害の精神は患難時代にもあり、また基督が其聖徒と偕に、火焰の中に顯はれ、地のの上に審判を爲し給ふ主の其日までも續くであらう。されば迫害を受ける教會の全歴史中に千年王國のやうなものが起る所が一もない

⑨(撒前四〇十六、十七)それ主號令と使長の聲と神の箴を以て自ら天より降り入り其時キリストに在て死し者先に甦へり、後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。

⑩(黙三〇十)爾わが忍耐の言を守しにより我も亦なんぢを守りて地に住人を試みんが爲に全世界に臨んとする試煉の時に之を免れしむべし。

⑪(撒後一〇六)蓋なんぢらに患難を加ふる者には患難を以て報。⑫(黙十六〇九、十一、十四、廿一)人々大熱に焼れて此等の災殃を掌ざり給ふ神の名を誦り且悔改めす神に榮を歸せざりき。又その痛苦と腫物との故に因て天の神を誦り己が行を悔改めざりき。此は惡魔の靈なり。異なる跡を行ひて全地の諸王に就り彼等して全能の神の大なる日の戰に集らしむ。また大なる電天より人々の上に降り。電ごとに重き約そ一タラントあり。人々電の災に因て神を誦れり。蓋この災甚しく大なれば也。

⑬(撒後一〇七)患難を受ける爾曹には我儕と偕に平安を得べきを以て報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火燄の中に其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識る者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面と其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讃を得ん其日なり爾曹も我儕の證を信する者なり。

⑭(猶十四、十五)アダムより七代に當れるエノク此輩の事を預言して曰けるは祝ふ主其聖萬軍と偕に來りて、衆人を鞠き凡て神を敬はざる者の神を敬はずして行ひし惡行と神を敬はざる罪人の主に逆ひて語れる諸の惡言を責給ふべしと。

⑮(彼後三〇一十)愛する者よ我今この第二の書を爾曹に筆贈る。此兩書を以て爾曹の眞實なる心を勵し、先に聖預言者の語し言と爾曹の使徒等が傳へし主なる救主の命令を記憶させん。まづ首に此事を知べし。末日至らば戲謔者いで來り己の慾に従ひて行み、主の約束し給ひし其臨る何處に在や。列祖の寢しより以來すべての物開闢の始と變ること無き云ん。彼等は神の言に由て上古天あり地の水より出ひつ水に由て立、之に由て古の世水に淹れて滅たる事を知を欲まず。それ神は其言を以て今の天と地を蓋へ之を火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する淪亡の日まで存せり。愛する者よ爾曹の一事を知ざる可らず。主に於ては一日は千年の如く千年は一日の如し。主その約束し給ひし所を成に遅きは或人の遅しと意ふが如くに非ず。一人の亡ぶるをも欲み給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也。然主の日の來ること盜の夜きたるが如ならん。其日には天大なる響ありてさきり體質こましく焚毀れ地と其中にある物みな焚盡ん。

事を我等は見るとある。たゞ『義と平和と互に接吻し、眞は地よりはえ義は天より見下す』(詩八十五〇)時は其時である。

『王あり正義をもて統治めその君たちは公平をもて宰さざらん』(賽三十)正義を以て貧しき者はさばかりやうになり、ユダとイスラエルは恢復せられて安全に住むやうになり、神の聖山の何處にても害ふことも、傷る事もなく、動物さへも平和になるやうになるのである。

また此等の聖句殊に賽六十章を見ると恢復せられたるイスラエルとエルサレムは千年王國の中心的榮光となるのである。しかし主は其榮光の中に顯はるゝまでは神はイスラエルを恢復せず、シオンとエルサレムを再建し給はない。

『エホバはシオンを築き榮光をもて顯はれ給はん』(詩百二)主は教會を携へ擧げ給ふまではシオン又はダビデの幕屋を建て給はないのである。

そこで我等は明白に、苦しむ教會と榮光の王國との間にある區別を知るものである。此二は次の如く患難によりて區別されてある。

教會 擧 携 患 難 現 王 國

(第八章の圖解を見よ)

②(賽十一〇四九)正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなし、その口の杖をもて國をうち、その口唇の氣息をもて 惡人をころすべし。正義はその腰の帶となり 忠信はその身のおびきならん。おほいみは小羊さうもにやどり、豹は小山羊さうもにふし 犢をじく肥たる家畜さうもに居てちひさき童子にみちびかれ。牝牛と熊さうもを同じし、熊の子と牛の子さうもにふし 獅はうしのこころをくまをくらし、乳兒は毒蛇のほらにたはふれ、乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん。斯てわが 聖山のいづこにても 害ふことなく傷ることなからん。そは水の海をまほへることくエホバをふるの知識地のみつべければなり。

(羅八〇二二一二三)また受造者みづから敗壞の奴たることを脱れ神の諸子の榮なる自由に入んことを許れんとの望を有されたり。萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に勞苦ことあるを非僂は知。ただ此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我僂も 自ら 心の中に歎て子と成人こと 即ち我僂の身體の 救れんことを俟。

③(徒十五〇三三三七)彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞。神初めて異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述。預言者の言これと符り。其書に此後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を 復び起し其破壞の跡を 再び 造て之を建べし。是の餘の民および凡て我名をもて稱らるる異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言と録されたるが如し。

教會は報を與へらるべし

教會は何時でも苦しむ又迫害せらるゝものであるかとの問がある。決して然でない。教會は暫て結婚すべきである。片刻の輕き苦は極て大なる窮なき重き榮を得しむるものとなる。而して教會は主耶穌が天より顯はるゝ時に、神の國の爲に苦しむたる故を以て、其に入に足る者とせらるゝのである。是故に『患難にも欣喜をなせり蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生ず』(羅五〇四)我等の望また我等の生命なる基督の顯はるゝ時には、我等も主と偕に榮光の中に顯はるゝのである。『われら地に王たるべし』(黙五〇十)そこで教會は千年王國に於て基督と偕に王たる事を以て報いらるゝと我等は決定するものである。『小き群よ懼るゝ勿れ爾曹の父は喜びて國を爾曹に予へ給はん』(路十二二三、但七)『十八一二二一二七』されば我等をして主が我等に教へ給ひし如く『爾國を臨らせ給へ』と祈らしめよ。

名のみの基督信者

しかし「教會は迫害せられて居ない、今でも比較的平和であるではないか」と言ふ人がある。

之に對して我等はかく答ふる、所謂教會と稱する者は(天主教、希臘教及び其他名)のみの基督信者が凡て四億萬人あるだらうが)多くは世と異なる所が殆んど無い程世

と妥協して居るのである。かゝる名のみの、冷たい心の、俗化したる基督信者が神にとりて何の益になるだらうか。神は聖別したる聖き民を要め給ふ。されば神は『爾曹彼等の中より出て之を離れよ』(哥後六〇十)と命じたまふのである。

太十三章の譬喩にある空の鳥と麪酵は悪者の子即ち偽善者であつて、教會の中に住

④(哥後四〇十七、十八)夫我儕が受る片刻の輕き苦は極て大なる窮なき重き榮を我儕に得しむる也。我儕も願する所は見る所の者に非ず見ざる所のもの也。蓋見る所の者は暫時にして見ざる所の者は永遠ければなり。

⑤(撒後一〇四一十)是故に我儕なんぢらの爲に神の教會の中に誇る。蓋なんぢら窘迫と患難の中に在て忍耐と信仰を存ばなり。これ神の義、鞠の表なり。爾曹をして神の國に入べき者ならしめん爲なり。爾曹いま神の國の爲に患難を受。蓋なんぢらに患難を加ふる者には患難を以て報。患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得こを以て報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火燄の中に其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面と其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讚を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。

⑥(羅八〇十七)我儕もし子ならば又後嗣たらん。即ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり。我儕もし彼と偕に苦を受なば彼と偕に榮をも受べし。(提後二〇十二)我儕もし忍ばば彼と共に王と爲べし。我儕もし彼を知らずと言はば彼も我儕を知らずといはん。



み、偽詐の教を以て教會に潜り込みて、教會を亂し、教會をして形式的のもの、名のみの者とするものを言ふのであると我等は信するものである。  
神は生命の道がエレミヤの骨の中に燃たる如く燃る熱心なる基督信者を要め給ふ。かゝる信者は今日に於ても實に僅少でなからうか。  
所謂教會は微温であつて、殆んど主の口より吐出されんとして居る。しかし感謝すべき事には、戒られ懲された爲に、金と白き衣と見ることが得んが爲に目薬を買ふて居る者があり、勝利を得て基督と偕に其位に坐する者がある事である。(黙三〇十)。

眞正の教會

茲に一の教會がある。即ち基督の體であつて、主にある凡の眞正の信者より組立たる、一體にして分つべからざるものである。この教會は教會中の教會、糠の中の麥とも呼ばるゝものである。而して基督の教會は苦難を受くべきものに定められ、其平安の間(徒九)は種々の新なる迫害に耐ふるの力を養成するの時間なる事を我等は忘れはならぬ。これは今日までの教會の歴史であつたが、なほ今後末の日の戲謔者、悪き者、また誘惑する者の中に居るべきものと心得て居るべきである。  
しかし教會は其苦難の中に在ても、聖靈に由て新に生るゝ(約三) 靈魂の新生の爲

に苦しむ、其宣るところの神の國の福音は凡て信する者にとりて神の能力なる事を知

- ②(弗二〇二二、二三)また一切の物を彼の足下に置きた彼を一切の者の上に首となし此を教會に賜ひて其首と爲り。教會は彼の身體なり。萬物を以て萬物に満しむる者の満る所なり。
- ③(弗四〇十一、十二)その賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり教師あり。これ聖徒を全ふし服従の事を行ひキリストの體の徳を建てる。
- ④(哥前十二〇十二、十三)體は一にして多の肢あり。一體の凡の肢は多けれども一の體なり。キリストも亦かくの如し。或はユダヤ人あるはギリシヤ人あるはは奴隸あるはは自主に拘らず我等みなひとつに在てパプテスマをうけ一の體となり又みな一の靈を飲り。
- ⑤(彼後三〇三)まづ首に此事を知し末日に至らば戲謔者いで來り己の慾に従ひて行み。  
(提前四〇一)然るも靈明かにいふ後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑す靈と惡鬼の教に心を寄ん。
- (提後三〇一―五)末世に艱の日きたらん。爾この事を知。その日至ば人た己を愛し貪婪、矜誇、驕傲、誹謗、不孝、恩を忘れ不潔、不情、怨を解す、謗議、慾を縱まゝにし、殘刻、善を好まず。友を賣、放肆、自負、神よりも快樂を愛することなせん。彼等は敬虔の貌あれど實は敬虔の徳を棄。なんぢ此の如き者を避べし。
- ⑥(加四〇十九)我ち小子よ我なんぢらの心にキリストの狀成までは復び爾曹の爲に産の劬勞をなす。
- ⑦(羅一〇十六)我は福音を耻とせず。此福音はユダヤ人を始ギリシヤ人すべて信する者を救んとの神の大能たれば也。

るは、教會にとりて福なる特權である。

基督の新婦

『夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべしかれ己を捨しは水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なりまた點汚なり皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。』

此聖句(弗五)に由て、教會は基督の新婦として、人の子等の中に最も親しく優しく聖き關係として知られたる者に型とられて居る。

アブラハムの僕は、犠牲となる基督の型であるイサクの爲に、新婦を見出さんとして遠國へ(創二十)往たとある。(二〇)その如く聖靈は耶穌の爲に新婦を見出さんとして世に來り給ふた。かの僕は『我を阻むるなかれ』と言た。その如く聖靈は世と戦ひ、冷淡なる信者と争ふて居給ふ。これ新郎の爲に新婦の準備を急がして居るのである。(太二〇二一)。

レベカはわれ『往ん』と言た。その如く新婦は往んとて悶へて居るべきである。神は婚姻を準備し、其筵を備へ給ふた。百物(新婦をのぞき)は携擧の爲に備へられ

て居る。實に羔の婚姻の席に招かるゝ者は福である。(黙十九) オー希ふ所は、教會が靈魂の悔改の爲に數百倍も熱心に働き、基督の體の徳を建んことである。然すれば新婦が完成せられ、其主の來るのを速にし、『新郎きたりぬ』との夜半ばの叫を聞き、出て迎へ得るやうになるのである。(太二十)。

オー我は我愛する者に屬し、我愛する者は我に屬し、かれ其酒席に於る賤しき者を伴ひ給ふ。我は彼の功德に由りて立ち、是よりも愈れる立場なし、即ちインマエルの地にして榮光に充る所なり。

新婦の目は己が衣服に向はず、其愛する新郎の顔に向ふ、されば我は榮光を見ずして、恩恵の王を見ん、かれ賜ふ冠にあらず、其裂れし聖手を見ん、羔はインマエルの地に於る凡の榮光なり。

④(彼後三〇十一、十二)斯の如く諸のもの鎔されん。然ば爾曹神の日の來るを待これ速やかにせんことを務いかに潔行をなし神を敬ふことを爲べき乎。神の日には天蒸毀れ體質焚鎔ん。

第十一章 患難—復生—審判

患難時代

我々は携擧と顯現との間或は教會と千年王國との間の此地上の歴史の時をば患難時代といふ言を用ひて表して居るものである。其間は必ずしも患難ばかりでない、『われら喜び樂み互に禮物を贈答し』(黙十一)『人々平和無事なりと言ん』(撒前五)とある。其期間は比較的短きものであると思ふ。何故なれば六千年と預言の時即ち年と日は殆んど経過してからである。此患難の時代とはダニエルの七十週最後の週を含むもので、神が教會を携へ擧げ給ふてから、再びイスラエル人に關係し始むる其期間で、多分七年以上を含む事は疑もなき事である。

此期間には無比の試煉、悲哀、災難、靈的暗黒及び公然の惡業があるに違ない。これは此世の夜である。しかし眞正の教會は夜に屬するものでなく、目醒て祈り居るから、携擧に由て其を逃れ、人の子の前に立ち得る者とせらるゝのである。而してイスラエ

(但九〇二七)彼一週の間衆多の者と固く契約を結ばん。而して彼その週の半に犠牲と供物を廢せん。また殘暴可惡者羽翼の上に立ん。斯つひにその定まれる災害殘暴るゝ者の上に踏きくだらん。

(徒十五〇三—三七)彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞。神初て異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述。預言者の言これさ符り。其書に此後われ反て己に傾圮たるダビテの幕屋を復び起し其破壊の跡を再び造て之を建べし。是の餘の民および凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言さ録されたるが如し。

(太二四〇二一)其とき大なる患難あり。此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき。又後にも有じ。

(彼後三〇三、四)まづ首に此事を知べし。末日至らば戲謔者いで來り己の慾に従ひて行み、主の約束し給ひし其臨る何處に在や。列祖の寢しより以來すべての物開闢の始と變ること無き云ん。

(約九〇四)晝の間は我がならず我を遣し者を行なす可なり。夜きたらん其とき誰も行なすこと能はず。

(路十七〇三四)我なんぢらに告ん。其夜ふたり同床に在んに一人は執れ一人は遣さるべし。

(撒前五〇四、五)然らば兄弟よ爾曹幽暗に居されば其日盜賊の來る如く爾曹に來ることなし。爾曹みな光の子ども晝の子ども也。われら夜に屬るもの暗に屬る者に非ず。

(路二一〇三六)是故に爾曹徹醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ。

(亞十三〇九)我その三分の一を携へて火にいれ銀を燃分ることくに之を燃分け金を試むることくに之を試むべし。彼らわが名を呼ん、我これにこたへん。我これは我民なりと言ん。彼等またエホバは我神なりと言ん。

ル人の三分の一は之を通過し、選ばれたる者の爲に此終局的患難の日は基督の顯現に由て短くせらるゝのである。賽二十章から二十八章を見ると、此時代の恐るべき事が幾分か分り、其間に偽基督が顯はるゝのである。(本書十二) 其間或者殊にイスラエル人の残れる或者は基督を受入れ、其證人となり、偽基督に殺さるゝやうになる。此人々を我等は患難時代の聖徒と呼び、第一復生の大收穫の蒞残りとして、大患難時代の終に復生らさるゝ人々である。

復生

復生に關しては哥前十五〇二三の文字通の意味は『然と各人その次序に循ふ』と云ふのである。

『キリストの來らんとし彼に屬する者』の復生とは、基督が空中に來り給ふ時に携擧に由て甦らさるゝ新婦と、教會とは復生の順序に於て異て居る所の新郎の朋友なる舊

①(撒後一〇七)患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得べきを以て報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火獄の中にて其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり。

(撒後二〇八)其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るべき發す所の榮光を以て彼を廢せん。

②(太二四〇二二)若その日を少くせられずば一人だに救るゝ者なからん。然と選れし者の爲に其日は少くせらるべし。

③(約三〇二八、二九)我はキリストに非ず。惟その先に遣されし者なりと言し事を證する者は爾曹なり。新婦をもてる者は新郎なり。新郎の友たちて其聲を聞げ之に縁て喜び多し。我いま此喜び満ることを得たり。

④(伯十九〇二五―二七)われ知る我を贖ふ者は活く、後の日に彼がならず地のの上に立ん。わがこの皮の身の朽はてん後われ肉を離れて神を見ん。我みづから彼を見たてまつらん、我目かれを見んに識め者のごさくならじ、我が心これを望みて焦る。

(賽二六〇十九)なんちの死者はいき、わが民の屍はおきん。塵にふすものよ醒てうたうたふべし。なんちの露は草木をうるほす露のごさく地はなきたまをいさん。

(何十三〇十四)我われら陰府の手より贖はん。我われらを死より贖はん。死よなんちの疫は何處にあるか。陰府よなんちの災は何處にあるか。悔改はしてくれて我が目にみえず。

(結三七〇十二―十四)是故に預言して彼らに言へ主エホバが言たまふ。吾民よ我汝等の墓を啓き汝らなその墓より出きたらしめてイスラエルの地に至らしむべし。わが民よ我汝らの墓を開きて汝らな其墓より出きたらしむる時汝らは我のエホバなるを知ん。我わが靈を汝らの中におきて汝らを生しめ汝らなその地に安んぜしめん。汝等すなば我エホバがこれを言ひこれを爲たることを知にいたるべし。

また來十一〇三九、四十を見られよ。

約時代の聖徒と、(黙六〇九) 患難時代中に基督を信じて苦しみ、顯現即ち基督が地上に來り給ふ時に、基督と偕に千年王國に與る爲に復生の所の人々の復生である。この最後のものは圖解中に難と記したるものである。そこで第一復生の大收穫即ち生命の復生の中に含む所は左の如くである。

基督

初熟の實

教會時代と舊約

收穫

時代の諸聖徒

基督の來る時  
基督に屬する者

患難時代の聖徒

苜蓿の残り

第二復生即ち審判を得に復生の事は千年期後に起るものであつて、其他の死人を含む所のものである。

審判

千年期後再臨論者はよく一般の審判なる語を用ふるが、それは將來凡の人類が神

の前にありて皆同時に審判するといふ意味に用ひて居る。

しかしかゝる語は聖書にはない。千年期前論者も審判は一般であると信じて居る。

⑨(黙六〇九—一〇) また第五の封印を開しき祭壇の下に曾て神の道のため、およびその立し證の爲に殺されたる者等の靈魂あるを見たり。かれら大聲に呼り曰けるは、聖誠の主よ何時まで地にすむ者等を審判せしめ且これに我儕の血の報をなし給はざる乎。爰に彼等各人に白衣を賜へて之に曰給ひけるは彼等の如く殺されんとする其共に勞ける兄弟等の數の益るまで安んじて暫く待べし。

⑩(黙十三〇十五) 彼の獸の像に生命を予へ之をして言ふことを得しめ又その像を拜せざる者を悉く之に殺しむるの權を予られたり。

⑪(黙二十〇四—六) 我らほくの座位を見しに其上に坐する者あり。彼等審判の權を予らる。又イエスの證もよび神の道の爲に首斬られたる者の靈魂を見たり。此は獸と其像を拜せず其印誌を額あるひは手に受ざりし者の靈魂なり。皆生てキリストと共に千年の間王と作り。其他の死人は千年終まで甦らざる也。これ第一の復生なり。この第一の復生に與る者は福なり。是聖者なり。此輩の上に第二の死は權を執り能はず。彼等は神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし。

⑫(黙二十〇二十四) 我また死し者の大と小との別なく皆神の前に立を見たり。其處に書ありて展く別に又一の書ありて展これ生命の書なり。死し者は皆書に録せる所の事由その行に循ひて審判を受る也。海その中の死人を出し死し陰府と其中の死人を出せり。彼等おのゝ其行に循ひて審判を受たり。死し陰府と火の池に投入られたり。是第二の死なり。

其意味は凡の人は審判るといふのみで、凡が同時にといふ意味でない。罪人としての信者の審判は、基督が十字架の上に成就なし給ひし事によりて、過去つたものである。

『我言をきく我を遣しし者を信する者は永生を有かつ審判に至らず死より生に遷れり』(約五〇)。また約三〇七十七十九を見るなれば審判られたれども罰せられずである。

審判の日は来る。しかし其日は二十四時間の一日でなく、また数年の長の間でもない。日とは哥後六〇二、弗六〇十三、來三〇八にあるやうな一期間を表はす所のものである。約五〇二五にある時は既に千八百年を経過した。されば其二十八節にある時も數百年であるやも知れない。

此審判の日(太十十五、十一廿二、廿四、十二三六、可)は或は主の日(賽二〇十二、十三〇八、十八、二〇二、結十三五、耳一〇十五、二〇一、三〇十四、廢五〇十八、阿十五、番一〇七)或は末の日(約三九、四四、四四、五四)或は大なる日(馬四〇五、猶六、默六〇十七、默十六〇十四、徒二〇二十)と呼ばれて居る。

此審判の日は種々の禍害を以て始まり、火を以て終るのである。其間は即ち千年王

①(約三〇七、十八)神の其子を世に遣し給へるは世を審判んごに非ず。彼に由て世を救んご爲なり。彼を信する者は審判れず。信せざる者は既に審判れたり。蓋神の生たまへる獨子の名を信せざるに因り。

②(哥後六〇二)かれ曰われ慈恵の時に爾に聽きた救の日に爾を助けたり。今は恩恵の時なり今は救の日なり。

(弗六〇十三)是故に神の武具を取べし。是あしき日に遇て敵を禦ぎ凡の事を成就して立ん爲なり。(來三〇七、八)野に在て主を試みたる日その怒を惹し時の如く、爾曹心を剛復にする勿れ。③(撒後一〇六)十蓋なんぢらに患難を加ふる者には患難を以て報、患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得んことを以て報るは神の公義なればなり。此事は主イエス火燄の中に其能力の諸使さ偕に天より顯れん時にあり。即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。かれら主の面の其勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん。其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讚を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信する者なり。また黙十九〇十一二。

④(黙二十〇十)彼等を感し惡魔火と硫磺の池に投入られたり。即ち獸および偽の預言者の居さる也。こゝば夜も晝も患難痛苦ありて世々熄時なし。(黙二十〇十五)凡て生命の書に録されざる者も亦火の池に投入られたり。⑤(黙二〇四一六)我らほくの座位を見しに其上に坐する者あり。彼等審判の權を予らる。又イエスの證あふび神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり。此は獸と其像を拜せず其印誌を額あるは手に受ざりし者の靈魂なり。皆生てキリストと共に千年の間王と作り。其外の死人は千年終まで甦らざる也。これ第一の復生なり。この第一の復生に與る者は福なり。是聖者なり。此輩の上に第二の死は權を執こ能す。彼等は神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし。

國で、『ダビデに約せし變らざる恵』の長き期間である。其間には次の如く四の有形的の審判がある。

四の審判

一、聖徒の業に關する審判

これは地上に起るものでない。撒前四〇三十一十八と撒後一〇六一十一、黙十九〇十一十六とを較べて見、引照の(㉑)と(㉒)を見られよ。

これらの榮化せる聖徒は不信者よりも前に當然其審判を受けべきである。太二十五〇十四―三十。僕の審判は諸國民の審判の前に起るものである。太二十五〇三十一―四六。なほ彼前四〇三十七―十八を見よ。

二、地上にある活る國民の審判は主の顯現の時である。耶穌は活る者と死る者との審判者である。

教會即ち聖徒は其前即ち携擧の時に擧られて居るが、此世の活る諸國民を審判んが爲に、基督と偕に來るのである。これは基督が顯れ來る時に地上に生息して居る者即ち活る者の審判である。主は綿羊と野羊とを別ち、躑躅となる者を悉く斂め(太十三〇四―五)然ば主の來らんときまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ。主は幽暗にある隠たる情を照し

をなしてダビデに約せし變らざる恵をあたへん。

(徒十三〇三四)また朽壞に歸せざる様に彼を死より甦らす事に就ては左の如く言ひ、曰われダビデに約

束せし所の頼むべき恵を爾曹に予ふ可也。

(哥前四〇五)然ば主の來らんときまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ。主は幽暗にある隠たる情を照し心の計謀を顯さん其時あのかの神より譽を得べし。

(哥前三〇三十一十五)各人の工は明かならん。夫日これを顯す可ければなり。此は火にて顯れん。其火あのかの工の如何を試むべし。若その建る所の工たもたば賞を得。若その工やかれなば損を受。されど己は火より脱出する如く終には救れん。

(哥後五〇十)蓋かれら必ず皆キリストの臺前に出て善にもあれ惡にもあれ各身に居て爲し所のことに循ひ其報を受べき者なれば也。

(彼前四〇十七)そは神の家を首として世を審判するとき已に至ばなり。若し我儕なほ首に審判せらるる時は神の福音に従はざる者の其結局は如何ぞや。

(徒十〇四二)かつ彼は其生者と死者の審判人に神より定められし事を我儕に證して民に宣ふ命じたり。

太十三〇四十一―四三 神子の斂て火に焚る如く此世の末に於ても此の如くなるべし。人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て躑躅なる者また惡をなす人を斂て、之を爐の火に投入るべし。其處にて哀哭切齒するこも有ん。此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽ゆる者は聽べし。(哥前六〇二)なんちら聖徒の世を鞫んするを知らんや。世もし爾曹に鞫るるならば爾曹至小き事を鞫に足ざる者ならん乎。

また撒後四〇一、彼前四〇五。

二、其王國を建て給ふ(四三)而して主の同胞なる三分の一のイスラエル人は諸國民の中に數へらるべきものでない。

それから千年王國が始まるので、それは一の連續せる審判の日である(徒十七)〇三十一其間は義しき審判者が地上に居り(提後四)公平を準繩となし、正義を錘となさるのである。(賽二十八)〇十七。

三、次は大なる白き寶座に於る死者の審判である。

四、『惡魔と其使の爲に備へられたる』火に投入らるゝ天使の審判。其所は不信者が第一に行く所である。黙十九〇二十と黙二十〇七十、彼後二〇四、猶六を比較して見られよ。

かゝる出來事には時間の間隔があるので、一般の審判といふ語で言顯はす事が出來ない。

〇(詩百二十二〇八)わが兄弟のためわが侶のためにわれ今なんぢのなかに平安あれさいはん。

〇(民二三〇七九)バラムすなはちこの歌をのべて云くモアアの王バラクスリアより我を招き寄せ東の邦の山より我を招き寄せ云ふ來りて我ためにヤコブを誑へ來りてわがためにイスラエルを呪れ。神の誑はざる者を我いかに誑ふことを得んや。エホバの呪らざる者を我いかに呪ふことを得んや。磐の頂より我これを

〇(黙二十〇二十五)我また死し者の大ま小まの別なく皆神の前に立を見たり。其處に書ありて展く。別に又一の書ありて展く。これ生命の書なり。死し者は皆書に録せる所の事に由その行に循ひて審判を受る也。海その中の死人を出し死し陰府に其中の死人を出せり。彼等おのゝ其行に循ひて審判を受たり。死し陰府に火の池に投入られたり。是第二の死なり。凡て生命の書に録されざる者も亦火の池に投入られたり。(彼後二〇九)此の如く神を敬ふ者を患難より救ひ不義なる者を審判の日まで守りて之を罰し。

〇(彼後二〇四)神さきに罪を犯しし天使を容さず。之を地獄に投いれ之を幽穴に置之を禁錮彼等をして審判の時を待しめ給へり。

〇(猶六)己が本位を守らずして其住る所を離れたる天使を限なく繋て大なる日の審判まで幽暗の中に守り置たまひし事也。また前六〇三、黙二十〇十。

〇(黙十九〇二十)獸と偽の預言者と共に擲にせらる。此偽の預言者は前に獸の前にて異なる跡を行ひ獸の印誌を受たる者および其像を拜する者を感しし者なり。此二のもの生ながら硫磺にて燃る火の池に投入らる。

(黙二十〇七十一)千年終りてサタン其囚より釋放さるべし。かれ出て地の四方の列邦ゴグマゴグを感し之を集めて戦しめんさす。彼等の數は海の砂の如し。かれら地に遍く滿て聖徒の陣營を愛せらるゝ城を圍む。此時に火天より降りて彼等を焚盡せり。彼等を感しし惡魔火と硫磺の池に投入られたり。即ち獸および偽の預言者の居る所也。こゝは夜も晝も患難痛苦ありて世々燄時なし。



主の日は二の方面がある。即ち神の敵に對する審判と神の民に對する救と恵である。

そこで審判を分てば、左の四種である。

- 第一、信者の性質に關するもので十字架にあり。
- 第二、信者の業に關するもので基督の審判の座にあり。
- 第三、活る國民に關するもので顯現の時にあり。
- 第四、不信者に關するもので大なる白き寶座の前にあり。

④(賽二〇二、三)すゑの日にエホバの家の山はもろくの山のいたゞきに堅立ち、もろくの嶺よりもたかく  
 舉り、すべての國は流のごとく之につかひん。おほくの民ゆきて相語いはん、率われらエホバの山にのほ  
 リヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道をなしへ給はん、われらその路をあゆむべし。そは法律は  
 シオンよりいでエホバの言はエルサレムより出べければなり。  
 (賽二〇十七)この日には高ぶる者はかゞめられ、驕る人はひくゞせられ、唯エホバのみ高くあげられ給はん。  
 また賽四〇一六、耳二〇二二七、三二、三〇二二七、但七〇九一四、亞十四〇一一二、番三〇八、九、馬四〇一三。

第十二章 偽基督

偽基督なる名は我等をして神の聖言中で、最も嚴肅なる預言の問題の一を考へしむ  
 るものである。聖書に耶穌基督に絶對的に逆ふ偽基督なる者が來ると教へてある。偽  
 基督の靈は既に世の中に在つて、過去に於ても將來に於ても、耶穌基督は肉體を以て  
 來る事を拒んで居るのである。

偽基督の此靈が、今多の人に憑て居るが、やがて頂上に達して一箇の人格者なる  
 偽基督となり、父と子とを拒むやうになるのである。

- ④(約壹二〇十八)孺子よ今は乃ち季世キリストに敵する者來らん。爾曹が聞きし所の如く今すでにキリスト  
 に敵する者多し。是に由て今は乃ち季の世なるを我儕は知り。
- ④(約壹四〇三)凡そイエスキリストを認はざる靈は神より出るに非ず。即ちキリストに敵する者の靈な  
 り。此者の將に來らんとする事は爾曹が聞きし所なり。今既に世に居り。
- ④(約貳七)そは惑に誘ふ者おほく世に出イエスキリストの肉體を爲て臨り給ふことを認はさず此惑に誘  
 ふ者は乃ちキリストの敵なれば也。
- ④(約壹二〇二二)誰は是 誰者イエスを言てキリストとせざる者ならずや。父と子とを拒む者は即ちキリ  
 ストに敵する者なり。

撒後二章には彼は一箇の存在者であると明白に教へてある。そこには罪の人、  
淪亡の子、もつと適切に言ふなれば不法の者と呼ばれてある。

基督は神の眞像である如く、偽基督は「此世の主」なるサタンの最高の顯現である。  
彼の來るのは「サタン」の行爲に循ひて各様の偽なる能と徴と奇跡かつ不義の諸の詭  
譎の爲である。

彼は眞理を信せざる者に對して「迷惑をして彼等の中に働かしむ」る者である。

此不法といふ秘密は使徒時代に於て既に働いた事がある。しかしこれを抑る者即ち  
聖靈が世をして罪を曉らしめ、また教會に屬る者を集る者として、其職を顯はして居  
給ふた。この抑る者が教會の擧の時に除かるゝとき、其秘密が曝露せられ、不法の  
者が顯はるゝのである。(七節)

この偽基督は猶太人にも納られ、彼等は再び本國に歸り、神殿を再建したる後、預  
言者が「死と立し契約……陰府と結べる契」と稱へし條約を彼と結ぶやうになるので

(來一〇三)彼は神の榮の光輝その質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨を  
なして上天に在す威光の右に坐しぬ。

(約十四〇三)此後われ多の言をもて爾曹に語り。蓋この世の主きたる故なり彼われに與ることなし。

撒後二〇三、四)誰なれの法を以てするとも爾曹欺かるゝこと勿れ。蓋さきに道を離るゝ事なく且罪の人  
即ち淪亡の子現るゝ事なくば其日きたらじ。かれ凡て神と稱る者また人の拜む所の者に敵し之より超  
て己を尊くし神の殿に坐して自ら神なりと爲に至る。

(撒後二〇六—十二)彼をして其時に至りて、現れしめん爲に今かれを抑る者を爾曹しる。それ不法の隠  
たる者すてに働けり。今これを抑るもの除るゝまで隠れり。其時に至りて不法の者あらはるべし。主  
イエス其日の氣を以て彼を滅さん。其臨るるとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。彼サタンの行爲に  
循ひて各種の偽なる能と徴と奇跡、かつ不義の諸の詭譎を以て顯れ、かの淪亡者の中に  
在なり。蓋かれら眞理を愛するの愛を受ずして救を得ざる者なれば也。是故に神かれらに詭譎を信ぜん爲  
に迷惑をして彼等の中に働かしむ。これ凡て眞理を信せず不義を好む者の罪を定んて也。

(約五〇四三)我は吾父の名に據り來しに爾曹われを接す。もし他の人あつて名に據り來ば爾曹これを接ん。

(賽二八〇十四—十八)なんぢら此エルサレムにある民をさむるころの輕慢者よエホバの言をきけ。  
なんぢらば云り、われら死と契約をたて陰府さむるをむすべり。漲りあふるる禍害のすぐるさむわれらに  
來らじ、そのわれら虚偽をもて遮所さなし欺詐をもて身をかくしたればなり。このゆゑに神エホバかく  
いひたまふ視われシオンに一つの石をすてその基をなせり、これは試をへたる石たふさき隔石た  
くすゑたる石なり、これに依頼するものはあわつることなし。われ公平を準繩とし正義を錘とす、斯て電  
はいつぱりにてつくれる遮所をのぞきさり水はその隠れたるころに漲りあふれん。なんぢらば死した  
てし契約はきえうせ陰府さむるさむるは成ることなし。されば漲り溢るゝわさはひのすぐるさむ汝等は  
これに踐たふさるべし。

ある。彼(偽基督) 凡て神と稱する者また人の拜む所の者に敵し之より超て己を尊くし  
神の殿(エルサレムに再建したる)に坐して自ら神なりと爲に至る(撒後三〇四) 彼は實  
に但十一〇三六等に記してある王であつて、其心の儘をなし、凡の神よりも自分を高  
くする所のものである。彼はまた黙十三〇十一―十八に記したる獸で、其數は人の數  
なる六百六十六である。而して彼は『その權を得て獸の前に行ふ所の奇跡を以て地に  
すむ者を欺き……獸の像を拜せざる者を悉く殺すの權を予られ』居る者である。彼は  
また賽十四章にある明星と言れ、其型はバビロンの王で、諸國民を弱くし、『位を神の  
星の上にあげ……集會の山に坐す』る所のものである。

右に短く述たるものは基督の大敵について聖書が示したる恐るべき繪である。多の  
人は偽基督が既にアテオカス、エピファネス或は羅馬法王或はマホメットと其相續  
者によりて顯はれたと云ふけれども、我等は悉く之を否定するものである。法王は基  
督の偽代理者として其崇めと能を受た、しかし基督の反對者でなかつた。されば法王  
を偽基督又は反對者と呼はざる間違である。アンテオカスは實際偽基督の一の型で  
あつた。彼はエホバを拜する事に反對し、殿の中に於て嫌むべき豚を犠牲となし、猶  
太人を慘酷に取扱ふなど、最後の偽基督が爲る所を微細の點まで寫して見せて居る。

但十一〇三六此王その意のまゝに事をなす。萬の神に逾て自己を高くし自己を大いにし神々の神た  
る者にむかひて大言を吐き等して忿怒の息む時までその志を得ん。其はその定まれるさころの事成さる  
べからざればなり。

黙十三〇十一―十八)我また一匹の獸の地より出るを見たり。之に二の角ありて、羔の角の如し。且その  
言ふこと龍の如し。この獸先の獸の前にて先の獸の凡の權威をとり地と其上に住る者をして先に  
死なせする状なりし傷の愈たる獸を拜せしめたり。また大なる奇徴をなし人々の前にて火を天より地に降  
し、且その權を得て獸の前行ふ所の奇徴を以て地にすむ者を欺き彼等に語りて彼の刀傷を受けて  
なほ活る獸の像を作らしむ。彼の獸の像に生命を予へ之をして言ふことを得しめ又その像を拜せざ  
る者を悉く之に殺しむるの權を予られたり。かれ衆人をして大小貧富、自主、奴隸の別なく或  
は右の手或は額に印誌を受しむ。印誌すなはち獸の名あらざる者あるひは其名の數あらざる者は凡て  
貿易する事を得ざらしめたり。此獸の數目の義を知ものは智慧あり。才智ある者は此獸の數を算よ。  
獸の數は人の數なり。其數は六百六十六なり。

賽十四〇二十六あしたの子明 星よいかにして天より傾しや、もろくの國をたふしよ者よいか  
して斫れて地にたふれしや。汝さきに心中にもへらく、われ天にのぼり我くらぬを神の星のうへにあ  
げ北の極なる集會の山にさし、たつき雲漢にのぼり至上者のごさくなるべし。然ごなんぢは陰府におこ  
され坑の最下にいれられん。なんぢを見るものは熱々なんぢを視なんぢに目をさめていはん、この人は地を  
ふるはせ列國をうごかし云々。

彼はパウロとヨハネが来るべき偽基督について書く前に此世を去つた。その如くマホ  
 メットも或意味に於ては一の型である。たゞ其だけに過ぎない。  
 偽基督はなほ今後の者である。撒前四章にある通り、眞の教會が携擧の時取り  
 去らるゝまでは、彼は顯れ出ぬのである。パウロ曰く「兄弟よ我儕の主イエスキリス  
 トの臨り給ふこと及び我儕が彼の所に集ることに就ては我儕願ふ」——此意味は、曩  
 に書きたる携擧の事は背教者が起り、また罪の人が顯はるゝ前である事を告たのであ  
 る。此事は七節によりて明白である。聖靈は今新婦を集め居給ふが、また罪につき義  
 につき審判につきて世をして罪ありと曉らしむるのである。やがて教會なる新婦が主  
 に遇はんとて空中に携へ擧らるゝ時は聖靈も取り去られ、後に残さるゝものは道に背  
 く所の教會と姦淫せるイスラエルと不信なる世であつて、彼等は詐偽を信じ、それか  
 ら不法の者が顯はるゝのである。教會は此恐ろしき試煉を逃るゝ事が出来ることは實に  
 神に感謝すべきである。教會は其主と偕に居り、此世は偽基督に支配せらるゝやうに  
 なるのである。

⑦(撒前四〇一六—一八)それ主號令と使長の聲と神の籤を以て自ら天より降らん其時キリストに在  
 て死し者先に甦へり、後に活て存る我儕われらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕

いつまでも主と偕に居ん。是故に此等の言を以て互に慰むべし。  
 ⑧(撒後二〇一、二)兄弟よ我儕の主イエスキリストの臨り給ふこと及び我儕が彼の所に集ることに就て  
 は我儕願ふ。爾曹あるひは靈により或は言に由あるひは我が贈れるに似たる書に由て主の日いま既に來  
 るさて心を動かし且擾こま莫らんことを。  
 (撒後二〇七)それ不法の隠たる者すでに働けり今これを抑るもの除るゝまで隠をり。  
 ⑨(哥前十二〇一二、十三)體は一にして多の肢あり。一體の凡の肢は多けれど一の體なり。  
 キリストも亦かくの如し。或はユダヤ人あるひはギリシヤ人あるひは奴隸あるひは自主に拘らず我等みな  
 ひとつの體に在てバプテスマをうけ一の體となり又みな一の靈を飲り。  
 (弗四〇三)神の聖靈をして憂しむること勿れ。爾曹救を得る日の爲に彼の印を受し者なり。  
 ⑩(約十六〇八)かれ來らんとき罪につき義につき審判につき世をして罪ありと曉しめん。  
 ⑪(撒後二〇一)是故に神われらに証を信せん爲に迷惑をして彼等の中に働かしむ。  
 ⑫(路二一〇三六)是故に爾曹醒て此臨んとする凡の事を避また人の前に立得やうに常に祈れ。  
 (黙三〇十)爾わが忍耐の言を守しにより我も亦なんぢを守りて地に住人を試みんが爲に全世界に臨  
 すとする試煉の時に之を免れしむべし。  
 ⑬(撒前四〇一七、一八)後に活て存る我儕われらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇へし。斯て我儕いつ  
 までも主と偕に居ん。是故に此等の言を以て互に慰むべし。  
 (撒前五〇九、十)それは神われらを怒に遣せんき定たるに非ず。我儕の主イエスキリストに由て救を得しめ  
 んき定め給ひたれば也。かれ我儕の爲に死たり。是我儕をして醒たるも寢れるも彼と偕に生しめんきて也。

しかし偽基督はかく自己を大に高め、かゝる能を以て此世を支配するけれども、『彼つひにその終に至らん之を助くる者なかるべし』とある。『主イエス其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん』。ラザルハムの直譯によれば『其到着の輝によりて彼を麻痺せしむ』とある。これは主は聖徒と偕に地に住む不信者を審判かんが爲め來り給ふ時である。然り、彼は『陰府に落され坑の最下にいれられん』。彼を見るものは熟々彼を視かれに『目をさめていはんこの人は地をふるはせ列國をうごかし世を荒野のごとくしもろくの邑をこぼちし者なるか』(賽十四〇十)。

我等は偽基督が父と子とを拒むといふ事に注目せられんことを欲ふものである。撒後二〇七、八には不法の隠たる者(秘密)或は不法の者であるが、我等思ふに、これは社會主義、虛無主義及無政府主義の無神的不法の三の驚くべき表現で、今や非常の速力を以て擴がり、結婚や財産などに關する總ての律法を排除せんとする状態である。

これらは偽基督の直接の先鋒であるかも知れない。何は兎もあれ、彼は確に來らんとして居る。かゝる罪惡の高潮に達せんとして居る無神の世人の思想は實に憫むべきものである。

偽基督につける尙委しい事や、サタンの地上に於る首府でありまた商業の中心となるべきバビロンの再建、其潰滅、其他の相關係して居る事柄について知りたくば著者の「サタンと其王國及其滅亡」と題する小冊子を見られよ。

④(但十一〇四五)彼は海の間に於いて美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。然と彼つひにその終にいたらん。之を助くる者なかるべし。

⑤(撒後二〇八)其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其日の氣を以て彼を滅さん。其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。

⑥(猶十四、十五)アダムより七代に當れるエノク此輩の事を預言して曰けるは祝よ主其聖萬軍と偕に來りて、衆人を鞠き凡て神を敬はざる者の神を敬はずして行ひし惡行と神を敬はざる罪人の主に逆ひて語れる諸の惡言を責給ふべし。

⑦(約壹二〇二二)誰は是謊者イエスを言てキリストとせざる者ならずや。父と子とを拒む者は即ちキリストに敵する者なり。

第十三章 重なる事件

我等は前章に記したる出来事の順序の概略は聖書を忠實に研究する人には分ることであると信ずる。茲に熱心に進言したき一事がある。即ち基督の千年期前再臨と聖徒の携擧である。これは教會にとりては大希望で、信者が待望むところの重なる出来事である。

携擧に次で起り来る患難時代また千年王國などに關して多の事が示された。しかし其は其概略に過ぎない。愛する讀者諸君よ、我等は充分これを了解する事が出来ないにしても、決して落膽すべきでない。

王は來りつゝ居る事を忘れてはならぬ。若し王が來り給ふ時は此王國に關する詳細の事が明白になる時である。

千年期後論者の質問

千年期後再臨論者は全く此を忘れて居る。何故なれば彼等は主の再臨に關する事柄を充分了解しないからである。われら今鏡をもて見るごとく見るごころ昏然であるけれども、彼等は明白に示されて居る事をも拒絶するのである。

若し我等現代に於ても自由意志や神の大權に關する教理は相互に了解するやうに説明する事が出来ぬとすれば、況て來るべき王國に於て我等に顯はるゝ榮光の事が分らう筈がない。されば彼等の持出す質問に由て我等は攪亂せられないやうにせなければならぬ。其質問の例を挙げれば左の如である。

千年王國時代に如何して人は救はるゝか。  
恩恵を受ける方法は如何であらうか。

福音宣傳と教會の禮典に代るものは何であるか。

猶太人は基督の第一降臨前に、かゝる質問に答ふる事が出来なかつた。基督は來るまでは其事は示されなかつたからである。

耶穌は再び來らんとして居る。其來る時は第一降臨の時の如く、既に示し給へる事

①(撒前一〇九、十)蓋われら我儕の事を語りて我儕いかなる狀にて爾曹の中にいり且なんぢら偶像をすて神に歸して活る眞神に事へ、その子の天より臨るを待と言は也。その子は即ち神の死より甦らしむ所

のイエスにして我儕を來らんとする怒より拯ふ者なり。  
②(母上十〇二四、二五)サムエル民にいひけるは汝らエホバの擇みたまひし人を見るか。民のうちには是人の如き者なし。民みなよばざりいひけるは願くは王のちながくれ。時にサムエル王國の典章を民にしめし

に加へて、更に神の言を示し給ふと思ふは至當の事である。

『未だ斯人の如く言し人あらず』(約七〇)と謂れし主は再語り給ふ事であらう。『墓に在者みな其聲を聞いて出るとき來ん』(約五〇)而して『その口より出る所の恩惠の言』(四路二〇二)は斷へず示さるゝ事であらう。

耶穌が來り給ふ時は萬事明らかになるであらう。何故なれば我等は其眞狀を見、その如くなり、目と目と相合せ、面を對せて相見るからである。

千年期後論者は凡の事が教會によりて現時の方法を以て任遂らるべきものと思ふて居るやうである。

千年期前論者は義をもて其事を速かに行る基督に由て、異りたる方法を以て成就したまふ事を待望み居る者である。

千年期後論者は教會を崇め、

千年期前論者は耶穌を崇め、信者の心を活る、人格的の、來らんとする救主を以て

充さんとして居る。

千年期後論者は基督の再臨は教會の北斗星であること認めながらも、之に心を用ふる事も僅少で、語る事も僅少である、耶穌の再臨の時に起る事柄が少くも千年後である

と信じて居る。かの人々がかく思ふは自然でまた當然の事である。

かの人々は再臨について宣る事が殆んど稀である。

道を宣傳ふべし

しかるにパウロはテモテに『なんぢ道を宣傳ふべし』(提後四)と告げ、又テトスには

①(太十二〇二七)父は我に萬物を予たまへり。父の外に子を識もの無また子および子の顯す所の者の外に父を識者なし。

②(約壹三〇二)愛する者よ我儕いま神の子なり。後いかん未だ露れず。其現れん時には必ず神に肖んことを知る。そは我儕その眞狀を見なければ也。

③(賽五二〇八)なんぢが斥候の聲きこゆ、かれらはエホバのシオンに歸りたまふを目と目とあひあはせて視るが故にみな聲をあげてもろさもにうたへり。

④(哥前十三〇十二)われら今鏡をもて見こく見こる昏然なり。然る彼の時には面を對せて相見ん。我いま知ここと全からず。然る彼の時には我が知るゝ如く我しらん。

⑤(羅九〇二八)神は義をもて其言を斷之を成竟るべし。蓋さだめ給ふ所の事は主速かに此地に行ふべければ也。

⑥(賽四〇四)そばまばきするみたまま焼つくす靈をもてシオンのむすめらの汚をあらひエルサレムの血をその中よりのぞきたまふ期きたるべければなり。

また亞十四〇を見られよ。

『望所の福と我儕の救主イエスキリストの榮の顯れん事』につき『なんぢ此等の事を以て語れ』(多二〇十)と告し事に對照して見るなれば大なる相違である。また彼は主の再臨と教會の携擧につきてテサロニケ人にかく書た、是故に此等の言を以て互に慰むべし』(撒前四)。(路十二)なほ提後三〇十六、來十〇二五、彼後一〇十九を見られよ。

我等は千年期再臨を信ずる兄弟等に向ひ、何故此等の慰の言を教會に與へぬかと問ふものである。これは實に『時に及て給與ふ食物』で『其主人きたる時に是の如く勤るを見らるゝ僕は福なり』(路十二)。

嗚呼兄弟等よ、千年期後再臨説は教會より此望の星を隠して居る。されば神から非常の責任を負はせられて居る。教會が衰微して行くのは此眞理に注意しないからである。

嚴肅なる警戒

我等は諸君が博士ヒュー、マクネール氏の左の嚴肅なる言に注意せられんことを願ふものである。我敬愛する兄弟等よ、目醒て基督の來る事を宣傳へよ。予は來らんとする主の名によりて諸君に求む、耶穌の來るを宣傳へよ。嚴肅にまた愛を以て、神

の名を以て諸君に求む、耶穌の來るを宣傳へよ。主は若し不意に來り給ふて、門守が眠つて居るのを見られぬ爲に、諸君よ、警醒して居られよ。

千年期前再臨説は其中に活々した生命があるから、其を信する者に神の聖言に對して眞の愛と興味を有しめ、聖言を披くと新しき本の如く思はしむるものである。

ブラオン博士さへも此事を認めてかく申して居る、千年期前論者は聖書と神の眞理の計畫中にある再臨の事につきて人々の注意を惹起し、其が爲に大に教會の利益になる事をした」と。

多の人々が「如何したのだらう、此眞理が分つてから、聖書は私にとりて別な本のやうだ」と言ふのを我等は聞た。人は此を讀んで其中に示されたる神の計畫の宏大なる事と無限なる事とを知り、殆んど我を忘るゝやうな事があるにしても、我等はなほ其中に眞理と慰藉の藏を見出し、續いて學ぶ事に由て愈優れる食物を與へらるゝ事である。

⑨(提後三〇十六)聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學しむるに益あり。

(來十〇二五)會集を輟る或人に倣ふことなく共に相勸め其日よく近るを見て益此の如くなすべし。(彼後一〇十九)殊に預言者の確言われらに在。この言は暗處に輝る燈の如きものなり。夜の明るまで明星の爾曹の心の中に出るまで之を顧みば善。



ある。

これは基督信者の信仰中で最も實行的なる教理である。凡そ神に由る此望を懐く者は其潔が如く自己を潔す』(約壹二) この實行的聖潔が我等に必要であるまいか。また若し人が此教理を心中に受るなれば、此世の愛から其人を釋放つ大なる能なるものである。若しこれが教會内で全く信せられ又説れたなれば、教會は物質上の缺乏を感じる事なく、諸處の宣教運動を助くる爲に金錢を哀願するやうな事が無つたらうと思ふ。

かの聖徒ブリスを感動せしめ、「イエス來らん時」又は「我來れば若を守れよ」この讚美歌を作らしめたのは此教理である。教會と人々とは此眞理を求め、神も之を得させんと爲給ふ事は、之に興味を有ち注意を拂ふ事により、また神が其宣傳を祝福し給ふ事によりて、我等は明らかに知つて居る。

### 第十四章 反對論の研究

第一、これは宣教運動を阻害する。

此再臨の教理は外國傳道を阻害すると謂て反對する人がある。現時の傳道者の中に宣教の精神があるのはこれに對する何よりの答である。左の人々は此信仰を有て居つた宣教師等である、ベン、エズラ、ジョゼフ、ウオルフ、ジエームス、マグレゴル、パトラム、エル、デー、マンسفヒールド、ゴンソルフス、博士ケレー及びヒュイトン。

「かのグリーンランドの氷の山よりといふ光輝ある傳道歌を作り、インドの珊瑚の濱に於て全力を注ぎ、其處に眠りし英國教會の偉大なる宣教監督ヘーバーを動かしたるものは此望であつた。」

「支那の開教者なるガツツラフ、日本の開教者なるベットルハイムを奮起せしめ、又蘇格蘭人を昏睡病より醒し、印度の教化し難き人種の開拓者となつたダッフを動かしたのも此望であつた。またマクチェン、ブーア、ローリー、ランキン、ロエンタル及び其他多の人々を感動せしめ、悦ばしめ、雀躍せしめたるものも此望であつた。」

ロード氏はかく斷言して居る、凡の教派の宣教師の大多數は、國內の教役者の中にもあるやうに、千年期前再臨の信者である。彼等は使徒等の如く、來らんとする怒り或人々を救はんとて、熱心に努力して居る。

第二、これは行動を阻害する。

この信仰は行動を阻害するとして反對する人がある。此反對は其當を得て居ない。何故なれば此教理の眞髓はまもり、はたらき又まことのぞむ事である。いまは働く時である。夜が來ては誰も働けるものではない。

第三、救はれざる朋友が澤山ある。

未だ救はれて居ない朋友が澤山あるから、耶穌の再來を願はないと言て反對する人がある。

『凡て父の我に賜し者は我に就らん』(約六〇三) 何人でも渴く者は來るがよい。『如此われら主の畏べきを知が故に人に勧め』(哥後五) なければならぬ。

洪水前の人々はノアの説教に頓着しなかつた。またロトの親族(其女婿等さへも)は彼と偕にソドムを出る事を好なかつた。かくの如く基督を信する事を好ぬ人もあらぬ。

うと思ふ。しかし彼を信する者は、一人だに滅亡の事はない。イスラエル人は災難の最中に悔改むるやうに屢々導かれた事がある。その如く我等の朋友は今基督を受入るやうに勧められぬとすれば、多分患難時代に入ってから神の有形的の審判のもとに然

①(羅十一〇十四)是わが骨肉の者を如何してか、激し其中より數人を救んむ爲なり。

(哥前九〇二二)柔弱者には我柔弱者の如くなれり。是柔弱者を得ん爲なり。又すべての人には我その凡の人の狀に循へり。是いかにして彼等數人を救ん爲なり。

(撒前一〇九、十)蓋われら我儕の事を語りて我儕いかなる狀にて爾曹の中にいり且ならん偶像をすて神に歸して活る。眞神に事へ、その子の天より臨るを待言は也。その子は即ち神の死より甦らし、所のイエスにして我儕を來らんとする怒り拯ふ者なり。

(雅五〇二十)此人知べし罪人を其迷る道より引反すは乃ち其靈魂を死より救かつ多の罪を掩ふことな。

②(約九〇四)晝の間は我かならず我を遣し、者の行をなす可なり。夜きたらん其とき誰も行をなすこと能はず。(黙廿二〇十七)靈と新婦といふ來れ。之を聞者も來れといへ。渴者は來るべし。願ふ者は價なしに生命の水を飲べし。

③(約一〇十二)彼を接その名を信せし者には權を賜ひて之を神の子と爲り。

④(約十〇二七、二八)我羊は我聲を聽われれば彼等を識かれら我に従ひ、われ彼等に永生を賜ふ。彼等いつまでも亡びず亦これを我手より奪ふ者なし。

(太七〇十三)窄き門より入り沈淪に至る路は濶その門は大なり之より入り入もの多し。

するやうになるかも知れない。

縦し彼等は基督を受入れやうが、受入れまいが、人類の大多数が罪の渦中に捲込まれ滅亡の淵に沈淪しつゝあるのである、(太七〇) 數から言ば、眞の信者なるものは彼等に比較て實に少數である。しかし千年王國に於ては、これは一變し、『エホバを知の知識地にみつべければなり』(賽十一)とある。また凡の人はインマヌエル王の義しき王權のもとに跪づくやうになるのである。

我等は一人の友人が自ら好んで瀛車の線路に身を横へて居るのを救はんとして、列車中の乗客數百の生命を犠牲にするやうな事はせない。凡の人は我等の兄弟ではないか。しからば我等は彼等を靈的死の潮流より救ひ出さんが爲に苦闘すべきではないか。しからば我等をして聖靈と偕に叫しめよ、『アメン主イエスよ來り給へ』(黙二十二)と。主は來り給ふなれば、其行を義をもて速に成竟るのである。

第四、我國は此世の國ならず

耶穌は『我國は此世の國ならざる也』(約十八)と言して反對する人がある。然り、此世の靈に屬るものでない。(五十七) 恰も信者は此世の屬でないと同じ事である。(約十五) 此聖句を正しく言顯はすなれば『我國は此世より(エク)にあらざる也』であ

る。即ち神の國は此世の發生でないといふ事である。主自身は此世から(エク)出たものでない、彼と彼の王國は兩ながら上よりのものである。しかし主が教へ給ひし『爾

①(賽四五〇二二、二三)地の極なるもろくの人よ、なんぢら我をあふぎのぞめ然ばすくはれん。われは神にして他に神なければなり。われは己をさして誓ひたり。この言はたましき口よりいでたれば反ることなし。すべての膝はわがまへに屈み、すべての舌はわれに誓をたてん。

(腓二〇十、十一)此は天に在るもの地に在るもの及び地の下にある者をして、悉くイエスの名に由り膝を屈しめ、且もろくの舌をして、悉くイエスキリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり。(路一〇三二、三三) 大なる者爲て至上者の子と稱られん。又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予れば、ヤコブの家を窮なく支配すべく且その國終ること有ざるべし。また路十四〇十一、米四〇一七。

②(羅九〇二八)神は義をもて其言を斷之を成竟るべし。蓋さだめ給ふ所の事は主速に此地に行ふべければ也。

③(約八〇二三)イエス彼等に曰けるは爾曹は下より出われは上より出。なんぢらは此世より出われは此世より出す。

④(西三〇一四)既に爾曹キリストと偕に甦りたれば天に在るものを求むべし。キリスト彼處に在て神の右に坐し給へり。爾曹天に在るものを念ひ地に在るものを念ふ勿れ。夫なんぢらば死し者にて其命はキリストと偕に神の中に藏れ在なり。我儕の命なるキリストの顯れんとき我儕も之と偕に榮の中に顯るべし也。(加四〇二六)然らば上に在るものエルサレムは自主にして是われらの母なり。

國を臨らせ給へ聖旨の天に成ごとく地にも成せ給へ(路十一)とある祈禱の如く、神の國は地上に建らるべきものである。此世の王國は悉サタンの欺騙によりて腐敗して居るけれども、千年王國に於ては彼は縛らるゝから、人々を惑す事が出来なくなる。物質其物のうちに罪なるものは一もない。墮落前のアダムは物質的の身體を有して居たけれども、罪がなかつた。基督も肉體を有て居られたけれども、罪がなかつた。此地は罪の故に誑はれ、世の靈は罪に密着して居る。しかし誑は除かれ、凡の邪魔物が王國より取出されてからは、萬物は嘆き求むるものを得、而して義しき者は其父の國に於て日の如くに輝くのである。

第五、神の國は爾曹の哀に在

神の國は有形的に見ゆるものでなくて、靈的のもので目に見えざるものであると謂て反對する人がある。此説は耶穌の左の聖言より出て居る、神の國は何の時來るかと言はるる人に問れば耶穌答て曰けるは神の國は顯れて來るものに非ず此に視よ彼(但七〇十八)然と終には至高者の聖徒國を受け長久にその國を保ちて世々限りならん。

(耶二三〇五、六)エホバはひたまひけるは視よわがダビデに一の義き杖を起す日來らん。彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし。其日エダは救をえイスラエルは安に居らん。其名はエホバ我儕の義と稱らるべし。

(黙二十〇一―三)われ一人の天使底なき坑の鑰を手に携へて天より降るを見たり。かれ惡魔と稱へサタンと稱る龍すなはち老蛇を執て之を千年のあひだ縛置ん。之を底なき坑に投入し閉こめて其上に封をなし千年過るまで諸國の民を惑すこと莫らしむ。其後かならず暫時のあひだ釋放さるべし。

(羅一〇三二)凡て此等を行ふ者は死罪に當るべき神の判定を知てなほ自ら行ふのみならず亦これを行ふ者をも喜べり。

(黙二二〇三)重て呪咀あることなし。神と羔の寶座そこに在。その僕これに事ん。

(太十三〇四)一人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て躓礙なる者また惡をなす人を斂ん。

(羅八〇十九―二二)それ受造者の切望は神の諸子の顯れんことを俟るなり。そは受造者の虚空に歸せらるゝは其願ふ所に非ず。即ち之を歸する者に因り。また受造者みづから敗壞の奴たることなを脱れ神の諸子の榮なる自由に入んことを許れんことを望を有されたり。萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に勞苦とあるを我儕は知。た此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子と成人とを即ち我儕の身體の救れんことを俟。

(太十三〇四二、四三)之を爐の火に投入べし。其處にて哀哭切齒すること有ん。此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽ゆる者は聽べし。

に視よと人の言べき者にも非ず夫神の國は爾曹の衷に在(路十七〇二)。

この顯れて(英語 observation)なる語は博士アダム、クラークに依れば、注意深き見張と譯され、ラザルハムに依れば、細心の見張と譯されてある。また爾曹の衷とあるはラザルハム、ウイルソン、ホイテング教授及び其他に依りて『爾曹の間』と譯せられ彼等の方がよい。主は神の國が、かの悪きパリサイ人の心中にあると申したのでない。彼等の間即ちユダヤ人のうちにあると言たのである。ベンゲルはかく曰て居る、「こゝに用ひたる衷なる語は、パリサイ人各箇の心といふのでなく……ユダヤ人全體に關して言たのである。王即ちメシヤと王國は此處にある、爾曹見よ聞よ」と。

そこで意味はこうである、神の國は氣を付て見張つて居るので來るのでない。即ち鋭敏なる批評家によりて判断せらるゝとか、其が爲に心配さうに見張つて居るので見らるゝといふものでない。また視よあそこだ、こゝだと言べきものでない。何故なれば神の國は汝等の間にあり、即ち王なる耶穌は存在者として有形的に彼等の中に居るこの事である。その如く主は再び來り給ふ時には有形的に顯はるゝのである。もし彼等は信仰を以て主を受入れたならば、其を合點するために心配さうに見張る必要が無つたのである、また今後とも要らない。もし彼等は耶穌に對し詐偽多き探偵のやうな目

を以て細心の見張をせなかつたならば、彼等は彼等の王が現に其處に居た事を悟り、かの山上に於て主の愛する弟子等が見たところの王國が天下萬國に顯はれたるを人先に受る準備を爲たのであつたらう。しからば主は王として喜んで自身を顯はし、其王國を彼等の中に樹立したのであつたらう。其は太二十三〇三七—三九にある愛慕の聖言で分る。『噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣さるゝ者を石にて撃ものよ母鶏の雛を翼の下に集る如く我なんちの赤子を集んとせしこと幾次ぞや然ぞ爾曹は好

①(黙六〇十六、十七)山さ巖さにて曰けるは願くは我儕の上に墜我儕を掩ふて寶座に坐する者の面さ羔の怒を遮しめよ。この羔の怒の大なる日すでに至れるなり。誰に之に抵ることを得んや。  
②(路二十〇二十)即ち之を窺ひその言を取て方伯の政事の權威に解さんとして自ら義人と偽れる間者を遣せり。

③(太十七〇九)山を下る時にイエス彼等に命じて人の子の死より甦るまでは爾曹の見し事を人に告べからずと言ひ。

彼後一〇十六—十八)われら前に爾曹に我儕の主イエスキリストの能力さ其顯れ給ふことを告るに巧なる奇談を用ざりき。我儕は親く其大なる威光を見し者なり。至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼ば我心に適ふ我が愛子なりと曰る此時かれは神なる父より尊さ榮を受たり。われら彼と偕に聖山に在し時この天より出し聲を聞き。

ざりき視よ爾曹の家は荒地と爲て遺れん我なんぢらに告ん主の名に託て来る者は福なりと爾曹の云んとき至るまでは今より我を見ざるべし。』  
 彼は其父の名によりて來り給ふた。しかしイスラエル人は彼を受けなかつた。『かれ己の國に來しに其民これを接ざりき』(約一〇)。  
 イスラエル人は盜賊をば釋放して、自分等の王を拒み之を十字架に釘た。されば王國は、彼等は主を受るまで、此世の國が我等の主と基督の王國となり、彼は世々支配する時となるまで、延さるゝ事となつた。  
 オー讚むべき王の王よ、來り給へ、爾國を臨ませたまへ。

王は其壯麗を以て彼處に在り、  
 覆面なくして見るを得べし。  
 途に七の死横はるども、  
 其は樂しき旅行なり。

羔は其整へる軍勢を以て、  
 シオンの山に立ち給ふ。  
 榮光に榮光  
 インマヌエルの地に充り。

第六、神の國は飲食にあらず  
 パウロが『神の國は飲食に非ず 惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり』(羅十四)と言りと  
 て反對する人がある。

④(約五〇四三)我は吾父の名に靠て來しに爾曹われを接す。もし他の人おのが名に靠て來ば爾曹これを受け  
 ず。

⑤(亞十二〇十)我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈禱の靈をそとがん。彼等ははその刺たりし我を  
 仰き觀、獨子のために哭くがごとく之のために哭き長子のために悲しむがごとく之のために痛く悲しまん。  
 (亞十三〇六)若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あらば是は我が愛する者の家にて受  
 たる傷なりと答へん。  
 (太二十三〇三九)われ爾曹に告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹の云んとき至るまでは今より我を見  
 ざるべし。

(羅十一〇二五一二八)兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無らん爲に此奧義を知ざるを欲まず。即ち幾  
 分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈るに至らん時まで也。然てイスラエルの人悉く救るを得ん。録  
 して救者はシオンより出てヤコブの不虔を取除かん。且その罪を赦す時に我われらに立ん所の誓は此也と  
 有るが如し。福音に就ては爾曹の益の爲に彼等は憎まれ選擇に就ては先祖の故によりて彼等は愛せらるゝ也。

⑥(黙十二〇十五)第七の天使 籤を吹き天に大なる聲ありて曰此世の諸の國は我儕の主および主  
 のキリストの屬と爲り。キリスト世々窮なく之を治め給はん。

實に神の國は飲食ではない、單に外形の作法ではない。イスラエル人の王國なるものが飲食でないのみならず、羅馬帝國もさうでない。何處の國民でも飲食はする。パウロは單に茲に於て飲食を慎み深くまた愛を以てすべき事を教へたのみである。神の國の臣民も飲食はする。『神の國に食する者は福なり』(路十四)『羔の婚姻の筵に招れたる者は福なり』(黙十九) 賽二十五〇六―八の筵を見よ。

主耶穌も曰給ふた、『われ爾曹に告ん今より後なんぢらと偕に新しき物を我父の國に飲ん日までは再びこの葡萄にて造れる物を飲じ』(太二十六)。

また『我父の我に任せし如く我も爾曹に國を任すべしこれ爾曹わが國に於て我案に食飲せんが爲なり』(路二十二) と言給ふた。これらは神の國が文字通でまた有形的のものである事の最も強い證據である。尤も其は罪の詛から釋されたるものである。

第七、血肉

血肉は神の國を嗣ぐ事が出来ないとして反對する人がある。

勿論我々は肉即ち新生せざる人ならばこれを嗣ぐことが出来ない。しかし靈に由て新に生れ、基督耶穌の中に新に造られ、彼と偕に後嗣となるのである。肉は益なく、靈は活すものである。

- ②(賽二五〇六―八) 萬軍のエホバの山にてもろくの民のために肥たるものをもて宴をまうけ久しくたくはへたる葡萄酒をもて宴をまうく。隨ちほき肥たるもの久しくたくはへたる清るぶだう酒の宴なり。又この山にてもろくの民のかぶれる面帕ももろくの國のほへる外帳をさりのぞき、さこしへまで死を呑たまはん。主エホバはすべての面より涙をぬぐひ全地のうへよりその民の凌辱をのぞきたまはん。これはエホバの語りたまへるなり。
- ③(太十三〇四―四三) 人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て蹶蹶なる者また惡をなす人を歛て、之を爐の火に投入べし。其處にて哀哭切齒すること有ん。此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん。耳あけて聽ゆる者は聽べし。
- ④(哥前十五〇五) 兄弟よ我これを言ん血肉は神の國を嗣ぐ能はず。亦壞る者は壞ざる者を嗣ぐ能はず。
- ⑤(約三〇三―五) イエス答て曰けるは誠に實に爾に告ん人もし新に生ずば神の國を見こ能はじ。ニコデモ彼に曰けるは人はや老ねれば如何で復生る事を得んや。再び母の腹に入りて生る可んや。イエス答けるは誠に實に爾に告ん人は水と靈とに由て生ざれば神の國に入こ能ざる也。
- ⑥(弗二〇) 我儕は神の造り給へる者なり。即ち我儕をして善事を行はしめん爲にキリストイエスの中に造り給へり。此事は神われらに行はせんとて預じめ備へ給ひし所なり。
- ⑦(羅八〇十五―十七) 爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ずアバ父さよぶ子たる者の靈なり。聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す。我儕もし子ならば又後嗣たらん。即ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり。我儕もし彼と偕に苦を受なば彼と偕に榮をも受べし。
- ⑧(約六〇六三) 生命を賜る者は靈なり。肉は益なし。我なんぢらに曰し言は靈なり生命なり。

パウロは此哥前十五章に於て、復生の問題につきて語り、復生らざる神の國を嗣ぐ事も所有する事も出来ないといふ事を證明して居るのである。彼は血と肉は神の國を嗣ぐ事が出来ない、されば復生の時、我等の朽果る肉と血を有る體が、朽ざるもの、永遠のものに變るといふ事を示して居るのである。其時生存て居る人の身體は變つて、『其榮光の體に象ら』しめらるゝのである。今我等は此肉と血とを以て居るから、『土に屬する者』なる第一の人アダムを帶て居る。しかし復生の時には變つて、『天に屬する者』即ち第二の人、天よりの主に似たものになるのである。

基督を死より甦したる主は、我等に子たる者の靈を與へ、其によりて神の後嗣となし基督と偕に後嗣となし、我等に内住する靈によりて、我等の死べき體をも生し給ふ。それから、我等は後嗣となり、國を獲る者となり得るのである。これは神は我等に約束なし給へるものである。此故により我等は復生のいとも重大なるものなるを知り、復生らざる神の國を嗣ぐ事が出来ないといふ事を得て居る。(哥前十五) 此に反對する主意は、千年期後論者が神の國をばたゞ靈的のものであるとなし、決して文字通のものではなく、有形的のものでないといふ説くのを、辯護せんとする爲である。しかしパウロはかゝる事を少しも言はず、其言ふ所は悉く其反對の事である。我等の體(希臘語ソマ)は壞る

者、尊からざる者又弱き者であるけれども、壞ざる者、榮ある者又強き者に甦らざれば、若し生存て居るとしても、瞬息間に變るのである。この榮化した體を以て我等は

- ①(腓三〇二十、二一)我儕の國は天に在り。われらには救主即ちイエスキリストの其處より來るを待。彼は萬物を己に服せしむる能に由りて我儕の卑き體を化て其榮光の體に象らしむべし。
- ②(哥前十五〇四五―四九)録して始の人アダムは生命ある魂となり終のアダムは生命を予ふる靈となる。こゝに在る靈の者は先に在らず。反て血氣の者さきに在る靈の者の中に在り。第一の人は地より出で土につき第二の人は天より出たる主なり。かの土に屬する者にして凡て土に屬する者は似たり。彼の天に屬する者にして凡て天に屬する者は似たり。われら土に屬する者の狀を有る。如く後また天に屬する者の狀を有ん。
- ③(羅八〇十一)若イエスを死より甦らしむる者の靈。爾曹に住ばキリストを死より甦らしむる者は其なんぢらに住さるの靈を以て爾曹が死すべき身體をも生すべし。
- ④(哥前十五〇五十一)兄弟よ我れを言ん血肉は神の國を嗣ぐ能はず。亦壞る者は壞ざる者を嗣ぐ能はず。(但七〇二)終に日の老たる者來りて至高者の聖徒のために公義をおこなへり。而してその時いたりて聖徒國を獲たり。
- ⑤(路十二〇三二)小き羣を懼るゝ勿れ。爾曹の父は喜びて國を爾曹に予へ給はん。
- ⑥(哥前十五〇四二―四四)死し人の甦るも亦かくの如し。壞る者にて播れ壞ざる者に甦され、尊からざる者にて播れ榮ある者に甦され弱き者にて播れ強き者に甦され、血氣の體にて播れ靈の體に甦さるゝなり。血氣の體あり靈の體あり。
- ⑦(哥前十五〇五一―五三)視よ我なんぢらに與義を告ん我儕こゝに居るには非ず。我儕皆末の籐のならんさき忽ち瞬息間に化せん。蓋籐ならんさき死し人よみかへりて壞す我儕もまた化すべければ也。この壞る者は必ず壞ざる者を衣しぬる者は必ず死ざる者を衣べし。



「創世より」我等の爲に「備へられたる國を嗣ぐ」のである。それは萬物の正統なる嗣子なる基督も其所に居り、我等も彼と偕に治むる者となるからである。其時主は其榮化したる體即ち甦り、天に昇り、而して天の所に入りし體を以て顯れ給ふのである。

此榮化したる聖體をばステパノも見、パウロも見た(徒九、ヨハネも見、(黙一〇)十字架の釘迹を有せる聖體で、「殺されし事あるが如し」とある。然り、主は肉體を以て歸り來り給ふ(十一)約貳七節の本統の讀方は「肉體となりて臨りつゝあるを認はさず」とすべきである。また賽六十三〇一六、黙十九〇十一一十六を見られよ。「其現れん時には必ず彼に肖んことを知」(約壹三)されば我等基督の榮光の體と同じものに變りたる體を有る者は神の國を嗣ぐといふ事は明なる事である。

第八、聖靈の御業を輕しむ

此教理は聖靈の御業を輕しむると言て反對する人がある。決して然でない。聖靈の御働とは何である。新婦を集る事である。彼は教會が基督に獻げらるゝに至るまで、この新婦なる教會を教へ、導きまた慰め給ふのである。

④(太二五〇三四)斯て王その右に在る者に云ん吾父に惠る者よ來りて創世より以來なんぢらの爲に備られたる國を嗣ぐ。

⑤(太二一〇三八)農夫等その子を見て互に曰けるは此は嗣子なり率これ殺して其産業をも奪べしと。(來一〇二)この末日には其子に託て我儕に皆たまへり。神は彼を立て萬物の嗣とし且これを以て諸

の世界を造りたり。

⑥(提後二〇一二)我儕もし忍ばば彼と共に王と爲べし。我儕もし彼を知ずと言はば彼も我儕を知すといはん。

⑦(路二四〇三九)我手わが足を見て我なるを知られぬを摸て視よ。靈は我も在る爾曹も見ここく肉と骨は有ざる也。

⑧(徒一〇九)此事を言畢し、のち彼等の見が間に擧るる雲、これを接て見せしめたり。

⑨(來九〇二四)キリストは眞の物の模なる手にて造る聖所に入す今より永く我儕の爲に神の前に顯れんとして眞實の天に入ぬ。

⑩(徒七〇五五)然るにステパノは聖靈に満されて天を仰て神の榮光と其右にイエスの立るを見て曰けるは、(黙五〇六)われ寶座および四の活物のあひだ長老等の間に羔立なるを見たり。此羔さきに殺されし事あるが如し。之に七の角と七の目あり。此日は全世界に遣はす神の七の靈なり。

⑪(弗五〇二五一一七)夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も姉を愛すべし。己を捨給ひし水の洗を以て道に因て教會を深め之を聖なる者とせんが爲なり。また點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。

⑫(約十四〇十七)之は即ち眞理の靈なり。世これを接ること能す蓋これを見ず且しらざるに因。されど爾曹は之を識。そは彼なんぢらと偕に在り、爾曹の衷に在り。

⑬(約十四〇二六)わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言しこを爾曹に憶起さしむべし。

⑭(約十六〇十三一十五)然らば彼すなはち眞理の靈の來らんとき爾曹を導きて、凡の眞理を知しむべし。蓋己に由て語に非ず。其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければ也。彼わが榮を顯さん。蓋わが屬を受て爾曹に示せば也。凡て父の有給ふものは我屬なり。是故に彼わが屬を受て爾曹に示すと曰り。

⑮(約十六〇十三一十五)然らば彼すなはち眞理の靈の來らんとき爾曹を導きて、凡の眞理を知しむべし。蓋己に由て語に非ず。其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければ也。彼わが榮を顯さん。蓋わが屬を受て爾曹に示せば也。凡て父の有給ふものは我屬なり。是故に彼わが屬を受て爾曹に示すと曰り。

同時に彼は罪につき、義につき、審判につきて、世をして罪ありと曉らしむる働をなし給ふ(約十六)。

彼はまた憂しめられ、反對せられ、また熄るゝ事がある。しかし聖靈は永く人と争ひ給はない。聖靈の今の働は竟へるのである。而して王の王、主の主が其敵を征服せんが爲に(黙十)天の軍勢を以て來り、業を全ふし給ふのである。

元始に(創二)『水の面を覆ひ』給ひし者は『神の靈』であつた。聖靈は創造の凡の御業に與り給ひし事と信する(創一〇)。彼は洪水前には人と争ひ給ふた(創六)彼は預言者に由て語り(徒一〇二六)。殊にヨセフや其他の人を恵み給ふた(創四十一〇三八、出三十一〇二、廿七〇十八)。簡單に言ば、彼は創造と救贖の凡の業に關係したまふた。我等は洪水

の故を以て、ユダヤ人が基督を拒みし故を以て、また原の杖が折られし故を以て(十)聖靈の御業が失敗であるとは思はない。現代に於る福音の宣傳はたゞ或僅少の人の救のみに終つても、我等は聖靈の働が失敗であるとは思はない。彼は千年王國時代の榮光と凱旋に與ると我等は信する。何故なれば其時にはイスラエル人でさへ其衷

②(弗四〇三)神の聖靈をして憂しむること勿れ。爾曹救を得る日の爲に彼の印を受し者なり。  
③(徒七〇五)強頑にして心と耳に割禮を受ざる者、爾曹常に聖靈に逆ひ其先祖たちの如く爾曹も行なり。

①(撒前五〇十九)靈を熄こと勿れ。

②(創六〇三)エホバいひたまひけるは我靈永く人と争はじ。其は彼も肉なればなり。然ど彼の日は百二十年なるべし。

③(黙十九〇十一一十六)我また天の關を觀しに一匹の白馬あり。之に乗るもの忠信また誠實と稱らる。彼は義を以て審判と戦争を爲せり。その目は火燄の如く其首は多の冕を冠れり。又録せる名あり。彼の外に之を識者なし。かれ血に染たる衣を纏へり。彼の名は神の言と云。天にある諸軍、皎く輝ける細布をき白馬に乗て之に従へり。彼の口より利劍、いつ之を以て列國の民を撃つ鐵の杖を以て列國の民を牧らん。彼また全能の神の甚しき怒の醜を踐。彼が衣と股に録せる名あり曰く諸王の王諸主の主。(羅九〇二八)神は義をもて其言を斷之を成竟るべし。蓋さだめ給ふ所の事は主速かに此地に行ふべければ也。

④(路十三〇二三一二五)或人いひけるは主よ救るゝ者は少き乎。イエス彼等に曰けるは窄門に入ために力を盡せ。我なんぢらに告ん入ん事を求て能ざる者おほし。家の主人おきて門を閉し後に爾曹外にたち門を叩て主よ主よ我に啓と曰んに主人こたへて我なんぢらは何處より來しか知すと曰ん。(哥前九〇二二)柔弱者には我柔弱者の如くなれり是柔弱者を得ん爲なり。又すべての人には我その凡の人の狀に循へり。是いかにもして彼等數人を救入爲なり。  
⑤(結十一〇十九)我われらに唯一の心を與へ新しき靈を汝らの裏に賦けん。我われらの身の中より石の心を取さりて肉の心を與へ。

に新しき靈を宿すとあるからである。而して諸國民は、其上に主の靈のごとまり居る主によりて、平和と正義を以て支配せらるゝとある。

聖靈は基督が凱旋するから、妬ましく思ふなご、無用の心配すべきでない。寧ろ聖靈が新婦を御許に遣ふことを急で居ると思ふべきである。新郎の爲に、新婦は聖靈によりて印せられ(弗四〇)、而して無限に靈を與へられたる主ご一になりて、一の全き人、即ち聖き殿となり、靈に由て神の居給ふ處となるのである。聖靈が其住み給ふ聖にして活る殿によりて如何なる事を成し給ふか、誰も知る事は出来まい。聖靈は其完成を速いで居る事は當然の事である。創二十四〇五六を見れば聖靈が急いで居る事の型を見る事が出来る。しかし此完成は主が再来し給ふまでは出来ない。其時は首と體が永久に結び付くのである。撒前四〇十八。さればこれに由て我等は、或點まで、「アメン主イエスよ來り給へ」(黙二十二)との聖靈の切なる叫聲の意味を曉る事が出来る。

第九、福音は失敗に歸する

此教理は福音をして失敗に歸せしむると言て反對する人がある。

しかし然でない。失敗は人間にある。『此福音は……凡て信する者を救ふこの神の大能なり』(羅一〇)。世界の教化を障礙るものは、福音の無力でなくして、罪人の故意の

不信仰である。『我に就る者は我かならず之を棄す』(約六〇)と主は言給ふた。また『爾

①(賽十二〇二、三、四)その上にエホバの靈とまらん、これ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈、

エホバをおそるゝの靈なり。かれはエホバを畏るゝをもて歡樂し、また目みるころによりて審判をなさす、耳きくころによりて断定をなさす、正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて國のうちの卑しき者のために断定をなし、その口の杖をもて國をうち、その口唇の氣息をもて、悪人をころすべし。 〇一三三

②(約三〇三四)神の遣しし者は神の言を語る蓋神これに靈を賜ひて限量なければ也。

③(弗五〇三十一三)我儕は彼が身の肢なり。彼が肉より出れば骨より出たり。是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし。この奥義は大なり。我いふ所はキリストと教會を指なり。

④(弗四〇十三)我儕をして皆おなじく神の子を信じ之を知り全人すなはちキリストの満足るほご成すまでに至り。

⑤(哥前三〇十六)爾曹は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知らざる乎。 また六〇十九、哥後六〇十七。

⑥(弗二〇二十一)且なんぢら使徒と預言者の基の上に建らる。イエスキリスト自ら其隅の首石となれり。全屋みな構合て彼の中に在りて増て聖殿主の中に成なり。爾曹も皆に彼の中に建られたり。是靈に由て神の居給ふ處となるべき爲なり。

⑦(創二四〇五六一五八)彼一人之に言エホバ吾途に福祉をくだしたまひたるなれば我を阻むるなけれ。我を歸してわが主人に往しめよ。彼等いひけるは童女をよびて其言を問ん。即ちりベカを呼て之に言けるは汝此人と共に往や。彼言ふ往ん。

曹わが所に生を得んがため来るを欲まず』(約五〇)と言給ふた。我等は何處にも傳道するけれど、凡の人が悉それを受入るゝとは思ふて居ない。主は『徧く世界を廻て凡の人に福音を宣傳よ』と言給ふた時に、かく附加へ給ふた、『信じてバプテスマを受ける者は救れ信せざる者は罪に定らるゝ也』(可十六十)。しかし『爰に信せざる者あれど其を如何その不信は神の信を廢べき乎非ず』(羅三〇)救は末の時に顯はるゝである。耶穌は『己が靈魂の煩勞をみて心たらはん』(賽五十三)。

『此後われ觀しに諸國、諸族、諸民、諸音の中より誰も數へ盡すこと能ざるほどの許多の人白衣をき手に櫻欄の葉をもち寶位と、羔の前に來りて立り、われら大聲に呼り曰けるは救は寶座に坐せる我儕の神と羔より出るなり』(黙七〇九、十)。ハレルヤ、アメン、ハレルヤ。

第十、福音は全世界に傳はつて居らない。

基督は太二十四〇十四に然あるべく斷言なし給ひし如く、福音は全世界に傳はつて居らない、されば基督を待望み、または終の來るのを待つ事が出來ないと見て、反對する人がある。我等は左の聖句を慎重に查べたいものである。

『また天國の此福音を萬民に證せん爲に普く天下に宣傳られん然るのち末期いたるべし』(マテ二四一四)

一、此末期とは疑もなく此時代(希臘語のトーアイオノス)の末で、三節に弟子等は其事について問ねた。

二、天下(希臘語のオイコメニー)は人間の住居して居る地上である。

三、天國の福音とは、善き音信で、來るべき王國に關する喜の音信である。

是等の喜ばしき音信は凡の國民に證のため、凡て人間の住居る地に宣傳へらるべきを申したのである。それから(希臘語のトテ)此時代の末期が來るのである。この傳道が繼續する時期なるものは『萬民に證せんため』といふ特定の句によりて全く定めらるべきものである。若し此證が完成するなれば、終が來るのである。

證は完成せられてから

何時證は完成せらるゝか、限ある智を以ては今斷定する事は出來ない。若し出來るとすれば、末期は既に過去たどせねばならぬ事になる、何故なれば、福音はペンテコステの日に於て宣傳へられた。其時『敬虔あるユダヤ人天下の諸國より來て』(徒二)とある。後弟子等は散されて、『徧く往て福音を宣傳たり』(徒八)とある。また『弟子た

り。(彼前二〇五)なんぢら信仰に由て神の能に護られ已に備ある所の末時に顯れんとする救を得な

り。(西一〇二三)若なんぢら信仰に止り其基を定めつつ堅して福音の望より移すば如此せらるゝことを得べし。此福音は即ち爾曹の聞し所なり。且すでに天下の萬人に傳れり。我パウロその役者を作たり。